
IS Ichika the Strange

狸原 小吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S I c h i k a t h e S t r a n g e

【Nコード】

N 9 6 7 5 T

【作者名】

狸原 小吉

【あらすじ】

お試し作品。

世界で唯一ISを扱える男 織斑一夏。彼の精神構造はこれまで置かれてきた特殊な環境により研磨され、柳の如き柔軟性と、鋼の如き強靭さを得た。ただしなめ上の。

【注意欄】

かなり見切り発車です。

ご都合主義になるかもしれません。

織斑一夏は変人です。

山田真耶先生はいじられ役です。

以上に挙げた要素を嫌悪するという方、不愉快に感じる方はここで
お戻り下さるようお願いします。

第1話 「マイ ネーム イズ イチカ オリムラ」 (前書き)

現在手持ちの原作が一巻しかありません。期待なさらずお読み下さい。

第1話 「マイ ネーム イズ イチカ オリムラ」

「全員揃ってますね。それではS H Rをはじめますよー」

と言いながら教壇で微笑むクラスの副担任を見ながら、織斑一夏は思考を走らせた。

幼い。

眼前で連絡事項を伝える副担任の容姿は、彼の十数年の人生の中で出会ったいかなる教員のタイプとも一致しなかった。

その幼い顔立ちや、不自然にサイズの合っていない衣服や眼鏡。そして全身からほとばしる小動物オーラ。

唐突に、『わたし実は同級生なんです。騙されましたか？えへへ』と可愛らしく言われても、何の疑いもなく納得してしまいそうだ。

しかし今自分がいる場所は特殊な場所だ。

IS学園。

かつて起こった『インフィニット・ストラトス白騎士事件』以降、世界の軍事バランスに大きな影響を与えたIS。

本来は宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツとして開発されたそれは、従来の兵器が鉄クズ同然と評されるほどの圧倒的なSF仕様装備によって、いつしか『兵器』としての軍事転用が始まった。

そんなISの取り扱いについて学ぶこの学舎は、その設置場所こそ日本だが、実際には『IS運用協定』 通称・アラスカ条約と呼ばれる国家間の約定により、『いかなる国家機関にも属さずまた干渉をよせつけない』国際的にも特殊な場所なのである。

「……くん。織斑一夏くんっ」

筆記や実技といった難関試験を突破してきたエリートたちが、その国籍を問わず世界中から集まってくるこの学園には、純粋にISについて学びたいという者もいれば、何らかの組織の意向を背に入学してくる者もいる。

企業あるいは国家間の思惑が入り混じり、煮えに煮立った混沌の坩堝^{るっほ}。それがこのIS学園である。

「あつ、あの、大声出しちゃってごめんね？ お、怒ってる？ 怒ってるかな？ 怒ってるよね？ メロスじゃなくても激怒しちゃうよね？ ご、ゴメンね！ その、ね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんの番なの。だ、だから自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

そのような教育機関に属する教員が、この愛らしい見た目通りの人間だとは到底考えられない。

この小動物のようなオドオドした態度も、全ては計算し尽くされた上での行動。そして頭ではそのことが理解できていても、実際に眼前でうろたえている人物からは、そのような『切れる』気配は全く読み取れない。

そう考えると彼の思考は止まらない。『山田真耶』という名前にも疑問を抱く。他人の名前にケチをつけるなど下衆の所業だとは判っているが、それにしても『山田』で『真耶』である。

上から読んでも下から読んでも『やまだまや』である。回文的なアレである。トマトと同じである。『山田トマト』。いや、これでは回文になっていない。

ここは一つ『山田・^{トマト}T・真耶』ではどうか？『やまだトマトまや』！？

またもや回文になっていないっ！ 逆から読むと『山トマトだ真耶』 山トマトとは何のことだ？ おのれこの俺をここまで惑わすとは……山田め！

積み重ねた思考の末に、彼 織斑一夏は、眼前の女性に最終的な評価を下した。

「この、狸めっ！」

「自己しよ……って、ええー！？ど、どうして私が狸なんですかあっ！？！？」

「隠しても俺の目はごまかせないぞ？それにさっきから尻尾が見えているっ！？」

「わ、私に、し、尻尾なんてありませんよあっ！？」

「いや冗談なんすけどね？」

「な、なんなんですかーっ！？！？」

山田先生はためーつと鳴いた。

第1話「マイ ネーム イズ イチカ オリムラ」

「で？ 挨拶も満足にできないのか、お前は」

織斑一夏の実姉にしてクラス担任である織斑千冬は、数分前自分によって強襲・制圧され机に突っ伏している実弟に対して、諦念の混ざった問いをした。

「いや、千冬姉、俺は」

スパンツ！ 出席簿により小気味悪い音が教室に響き渡る。

「いや、千冬お姉ちゃん、俺は」

スコンツ！ 何かの角をぶつけたような軽快な音が教室に響き渡る。

「いや、ちーちゃん、おれ」

ゴスンツ！ 先ほどまでとは明らかに質の異なる鈍い音が響き渡る。

「織斑先生と呼べ」

「……や、了解^ヤ、織斑先生」

「あと自己紹介をしる。虚言戯言無しで簡潔にな」

「私は織斑一夏です。今後ともよろしく」

このやりとりで姉弟なのがクラスの人間にバレたが、二人の様子に全員類を引き攀らせており、どう反応すればいいのか判断できずにいた。

なお余談だが、織斑姉弟と旧知であり、その片割れとは幼なじみの間柄である剣道少女は頭を抱えて机に突っ伏していた。

そうこうしているうちにチャイムが鳴り、結局自己紹介は『お』以降終わらなかったことを明記しておく。

山田先生はずっとため……と泣いていた。

・
・
・

・
・

・
一時間目の授業終了を知らせるチャイムが鳴り、教室には筆記用具を置く音やノートを閉じる音が溢れた。

「ふいー」

織斑一夏は一時間目の授業が終わり、一息ついていた。

IS学園では学ぶべき知識の多さから、入学式当日からもう最初の授業が始まる。

慣れない環境で緊張した、というようなことは特になかった。そのようなまっとうな神経など彼は持ち合わせてはいない。

彼の神経の図太さは自他共に認める強靱さを誇っており、まだ遭遇^あて数時間しか経過していない1年1組のメンバーにさえも、それは共通認識として受け入れられつつあった。

世界で唯一ISを扱える『男』として世に認識されたその日から、彼の日常は他者からの視線に晒されるようになった。それもそのはず、ISが女性にしか使えないということは子供でも知っている常識であった。

にも関わらず、彼 織斑一夏はそのISの起動に成功した。自身^でが男であるにも関わらず。

一般人はもちろん、国籍に関係なく政府関係者やＩＳ研究者、よくわからない企業や組織が彼に興味を抱き接触を図ろうとした。

幸いにも日本政府による保護を受け、身边にも警護の人間が密かに配備されるようになったが、不躰な視線までは止めようがなかった。

彼に向けられた視線の中には、好奇心以外の仄暗い感情のこもったものも少なくなかった。

人は自分の内に無いものを持つ他者に対して嫉妬する。特別な存在というものに憧れもするし、突き出た存在を排斥しようとする。自分が享受していた特権を揺るがそうとするものに穏やかな感情を向けることはできないだろうし、他社や他国に先んじることができる可能性を持つものが存在したら、手を伸ばそうとするのも仕方のないことだろう。

そういった環境を経験して研磨された精神を持つ彼は、現状、たとえ男が自分一人という状況であったとしても、同年代の小娘たちに向けられる好奇の視線（時には大人の事情が絡んでいる者もいるが）程度は余裕を持って受け流すことができた。

彼の内側からあふれる余裕の発露は、鼻歌付きのペン回しという形で結実し、授業中その手中におさめられた細身のシャープペンシルは風切り音を出しながら高速回転していた。

幼少の頃より鍛えてきたその業から彼は『イチカ・カザキリ』という異名を付けられ、近隣のペン回し業界を荒らしまわる孤狼として恐れられた。

授業中、彼が持つペンはその異名に相応しい回転速度を叩き出し、その回転に比例して、山田先生の愛らしい眼からはとめどなく涙が^{まなこ}あふれた。そして織斑一夏は出席簿に制圧され机に突っ伏し、ペンは空を舞った。

クラスの人間の彼への評価はうなぎ上りだった。ななめ上に。

そして山田先生は世のままならない様にぽんぽこ泣いた。

まあ何はともあれそんなはじめての授業が終了した彼は、ノートに『ペンの回転速度と山田先生の涙量の相関関係』なるレポートを極めて真剣な表情でまとめていた。

そんな彼に対して、多くの視線が向けられる。それらの視線は教室の内と外で、その性質を異ならせていた。

織斑一夏という人間をまったく知らない外側の人間は、彼の整った顔立ちとノートをまとめている真剣な表情を見て頬を赤く染め、好意的な視線を向けていた。

ISは女性にしか扱えない。故に、ISに携わる環境はほとんどが女性で構成されている。彼女達もその例外ではなく、つまり何が言いたいのかというと、彼女達は男慣れしていなかった。

全員が全員そういうわけではないのだが、そうでない生徒も、唯一ISを扱える『対等な男』であり、憧れの的である織斑千冬の弟であり、悪くない顔立ちをした彼に少なくない興味を持っていた。

対し、織斑一夏という人格の発露に間近で晒された1年1組の間は、次はどのような突飛な行動に出るのだろうという好奇心、恐れ、でも顔は良いのよね、背も高いし　という外の人間と同質の好奇等様々な感情が入り混じった複雑な視線を向けていた。

両者に共通しているのは、そのどちらもが織斑一夏という人物が発する独特の雰囲気にも物怖じして、未だに交流の切欠をつかめずにいる点であった。

『一声かけて色々なことを聞いてみたい、でも……』という躊躇いが足を踏み留まらせ、互いをけん制し合い、いつのまにか『抜け駆けは駄目よ!』という空気が醸し出されていた。

そのような状況を打破したのは

「……………ちよつといいか？」

「んあ？」

六年ぶりの再会となる幼馴染だった。

第2話 「幼なな染」(前書き)

まじめパートというか乙女パート。

狸原は女の子の恋を応援します。

第2話 「幼なな染」

IS学園屋上。

昼休みには昼食をとる生徒で賑わう場所であるが、授業の合間の短い休み時間に足を運ぶ者は滅多におらず、現在は織斑一夏とその幼馴染・篠ノ之箒の二人だけだった。

篠ノ之箒は焦っていた。自分の顔が緊張で強張っていることは、鏡を見るまでもなく自覚できる。その緊張の原因は明白だ。

（一夏）

かつて幼少時代を共に過ごし、そして周囲の人間によって引き離された幼馴染。六年ぶりに再会した自分の想い人。

ずっと会いたかった。言いたいことや聞きたいことがたくさんあった。一緒にやりたいことだってたくさんある。

（六年、か）

思えば長い年月だった。彼に会えないことがこれほど辛いことだったとは、彼女自身思ってもいなかった。離れて解ったのは、自分が眼前の織斑一夏という人間の存在にどれほど救われていたか。そして、自覚していた筈の自分の想いが、自分が想像していた以上に強いものであったということだ。

そのことは、彼女の憤りを、悲しみを、苦しさを、寂しさを、そ

して彼への恋慕の情を、一層強めるだけだった。

（でも、やっと会えた）

六年間で心の内に堆積したものが、箒の胸を焦がす。

再開の喜び、今まで自分に気付かずに副担任とじゃれついていたことへの怒り、年月を経て成長した彼を見ることができた嬉しさ、少女へと成長した自分が見られる恥ずかしさ、といった様々な感情が一度にあふれ出す。

事前に用意していた再会の台詞（『久しいな一夏。元気にしていたか？ 私はこの六年間、お前のことを忘れたことは無かったぞ』）は見事真っ白、白紙になった。恐らくその台詞を使うにはレベルが足りなかったのであろう。

（ 能天気な顔をして！ ）

そんな箒の胸の内に気付いた様子もなく、眼前の彼 織斑一夏
はこちらを眺めていた。

「そつえば」

唐突に一夏が切り出す。

「何だ？」

その返す言葉とは裏腹に、彼女の内心は

（うわあああ！ 一夏だ！ 本物！ 生一夏！ しゃべった！
す、少し声が低くなったか？ ああ、でもそれも良い……！ お、
落ち着け私、まだ慌てるような時間じゃない！ でも……ああ、ま
ずい、むり、もうっ、わけがっ、わからない?!?!?)

絶賛熱暴走中だった。

第2話 「幼なな染」

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとう」

微笑と共に告げられた一夏の言葉に、飛んでいた筈の心はハツと
現実へと引き戻された。しかし、彼が口にした内容が理解できてく
ると同時に、その心はブーメランの如く再び精神世界へと反転しつ
つあった。

箒はトリップしつつある精神を気合でねじ伏せ、現世へと押し止める。この時ほど彼女は、これまで積み重ねてきた剣道の精神修練に感謝したことは無かった。

彼女は冷静に、その思考を回転させる。

（お、お、お、落ち着け私っ！　う、嬉しい、嬉しいのは解る、がい、今は返答だ。いつもどおり冷静に、クールな私をつ！！　余裕のある表情をつ！！！）

実際には『冷』も『静』も無く波立つその心を何とか落ち着かせ、彼女は考える。

予定はこうだ。彼の顔を正面から見据え、『おめでとっ』の言葉に浮かれていることなど一切表情に出さずに告げる。

『ふ、あの程度などまだまだだ』　　これだ！　完璧に過ぎる。

で、では

「……」

（む、無理っっー！！）

その時の彼女の表情は、重力に逆らい、嬉しさで上がる口を何とか押し止めようと『へ』の字にするも、その歡喜の感情の発露は止めきれず、『へ』の字の両端はピクピクと上向いているという珍妙

なものであった。

当然その顔は真っ赤だった。

「な、なんでそんなこと知ってるんだ」

既に彼女の理性が作り出した鋼の理想像は、6年間積み重なった感情から来る熱エネルギーの奔流に押し流され、溶解されていた。どう取り繕うべきなのか、熱に浮かされた彼女の脳細胞は、この場における理性的な対処の一切を放棄した。箒だけに。

「なんでって、新聞に載ってたぞお前」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

一夏の表情が怪訝なものに変わる。もう箒は自分で自分が何を言っているのかがわからなかった。事前に抱いた理想像と、現在の無様な自分の姿とのあんまりなまでの乖離に目の奥が熱くなる。

もはや何と言っているのかわからなかった。惨めで、泣きたくなかった。

そして彼女の心は

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ」

「え……」

その一言で静まった。

「ほら、髪型あの頃一緒だしなあ」

あの頃と変わらぬ表情で言う一夏に、決壊寸前だった筈の心の波は静かに治まってきた。

（ああ、そうだ）

理性が戻り、思考が復活する。彼 織斑一夏という人物とのやり取りがよみがえる。

「よ、よく覚えているものだな……」

（必要以上に、取り繕おうとする必要なんて無かったじゃないか）

彼はこんなにも自然に、あの頃と同じようにして、目の前にいる。ならばこちらに変に大人ぶる必要なんてないじゃないか。6年、6年間待ったんだ。そして今日の前にいる。これからは同じ学園で過ごせる。

ならば

焦ることは無い。自分の成長した部分は、これからゆっくりと見せていこう。目の前の、鈍感で、変わらない、でも少しだけ格好良くなった幼馴染に。

「いや、忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

「……」

その言葉に、ギロリと彼を睨みつける。今度はしっかりと、真正面から顔を見据えて。

良いだろう、これは宣戦布告だ。絡まった糸は解けた。これから見せ付けてやろう。今の私を。

そして、その『幼馴染』という言葉を別の言葉に変えてやろう。

二時間目を告げるチャイムが鳴る。扉の方から複数の気配が慌しく離れていくのを感じる。

ライバルは多いのかもしれない。だが、不思議と心が高揚した。

（絶対に、振り向かせてみせる！）

先ほどまでとは違う、芯の通った力強さ。箒は決意を胸に、もう日常会話程度で躊躇うものかと改めて彼の顔を見据える。

新たに芽吹いたその力強さは

「そろそろ俺達も戻ろうぜ」

「わ、わかっている」

まだ、少し弱い。

ぶいと顔をそらす。恐らくまだレベルが足りていないのだろう。

パンツ！

「さっさと席に座れ織斑」

「あ、あれー？」

第2話 「幼なな染」(後書き)

まあ感情の変化というものは唐突に来ることもあるもので。

一夏くんはちょっと空気を読んで奇行を抑えています。

第3話 「金髪との遭遇」(前書き)

C e c i l i a t h e a r i s t o c r a t .

そしてみんなどこかが傾いてる。

第3話 「金髪との遭遇」

授業終了のチャイムが鳴り、二時間目の授業もつつがなく終了した。

授業内容に関しては、彼は事前に配付されていた参考書に目を通していたため、特に苦勞することは無かった。

しいて問題点を挙げるとすれば、途中、山田先生が『わからないところがあつたら聞いてくださいね』と言ってくる場面があつたので『ない』と答えたら、『ほ、本当ですかー？』と疑わしげな目で返してきたので、思わず頬をつねって遊んでしまったことぐらいだろうか。

ワタワタと涙目で慌てるタヌキ娘を嬉々として弄んでいた彼は、当然のようにクラス担任の出席簿の閃きの前に崩れ落ちた。

織斑一夏は、実はDVに晒されているのではなからうかと考え愕然とした。

山田先生は、生徒・織斑一夏の自分像がいじりキャラとして定着しつつあるという事実には涙を拭いた。

そしてクラスの人間は、早くもこの状況に順応しつつある自分達の姿に気付き戦慄した。

第3話 「金髪との遭遇」

「ちよつとよろしくて？」

山田先生のもの言いたげな視線を無視していた一夏に、突然声がかけられる。

またも彼の様子を伺っていた生徒達は、その躊躇ない行動にどよめいた。

彼は一息吐くと、手にしていたノートから目を

離さなかった。

誰もその行動は予想しなかったのか、周囲のざわめきが一層増す。

「ち・よつ・と・よ・ろ・し・く・て！」

だが敵もさる者である。額に青筋を浮かべながらも、何とか怒りを抑えてもう一度彼に声をかける。

そこで彼はようやく『観察日記』と書かれたノート 題名の下に、緑色のペンで大きく『狸』と書かれている から目を離し、声の主へと視線を向けた。

彼の目に映るのは金の長髪。つり上がった碧眼の瞳に宿るのは怒り。眼前の少女はその不快感を隠そうともせずはこちらを真直ぐ見据えていた。

織斑一夏は英国人と遭遇した。

・
・
・

セシリア・オルコットは怒りにふるえていた。

彼女は織斑一夏という人間が気にいらなかった。

半日にも満たない観察の末に、彼女は織斑一夏の性質が、自分とは決して相容れないことを認識した。

そもそも、彼女は男という存在に良い印象を抱いていなかった。

別に自分はレズビアンというわけではない。しかし男と聞き脳裏に浮かぶのは父の姿。故人に鞭打つような真似をしたいわけではないが、彼女の父は弱かった。

婿養子であるという理由から母には頭が上がりず、ずっと卑屈な態度を取っていた。

セシリア・オルコットはその姿が嫌で嫌で仕方が無かった。

父以外の男ならば違うのだろうかとも考えたが、彼女の目に映る男は皆、母とは正反対の　父と同じように卑屈で、脆弱な者ばかりだった。

これがせめて、セシリアが心身共に健やかであり続けていたならば、また別の印象を抱く機会もあったのかもしれない。

しかし、彼女は事故により両親を亡くし、両親に　尊敬する母に代わって、その細腕で家を守らなければならなかった。

彼女は努力した。自分が育った家を、母が残した家を、今度は自分が守るために。

その間、彼女に近付いてくる大人たちは遺産目当てのクズばかり。

休みなく張り詰め続けた彼女の精神は疲弊していた。

男性への悪印象を拭う暇もなく、ただ家を守るために力を求め努力を積み重ねてきた少女は、いつしか国家の代表候補生となった。

今では昔と比べて余裕も出てきたが、それでも、一度固定された男性への嫌悪感を拭うのは難しかった。

そこに彼　織斑一夏である。

初め、彼女がその存在を知った時、彼女は織斑一夏という人物に期待した。

個人の資質もあるのだろうが、現在の女尊男卑の風潮をつくっているのは間違いなくISである。それまでの主だった近代兵器を軽くあしらう圧倒的な兵器・IS。

それを扱うことができるのはIS適性を持つ女性のみ。その圧倒的な武力を背景に、それまでの男尊女卑の風潮は一気に逆転した。

だが、自分達と同じようにISを使える男ならばどうだろう？

何を卑屈になる必要があるのだろう。

彼女は貴族であり、家を守るためにいずれは結婚して子供を生む必要がある。

前時代的な考えと思う人間もいるかもしれないが、貴族とはそういう

う存在なのだ。

そしてその相手となるのは当然、男である。

家を守るためならば、どのような相手でも我慢しようと考えていた。その矢先に世界に広まったのが彼　織斑一夏が存在である。

もしかしたらこれは、自分の男性への嫌悪感を払拭する最後のチャンス　いや、それどころか生まれて初めて対等と認められるような『強い』男性と出会うチャンスではなかるうか？

そんな期待を胸に彼女は日本　IS学園へとやってきた。

そしてその期待はたった数時間で裏切られた。

織斑一夏は奇人であった。彼は初対面のクラス副担任をあらうところか『タヌキ』呼ばわりし、副担任をからかって授業を妨害し、そして知らぬ顔をしているのだ。

どれだけタヌキ好きですの！

そのふざけた態度からは、知性の欠片も感じない。

山田先生をタヌキと言うのなら、お前は人を化かして振り回す狐ではないか。

そのような考えを抱きもした。

彼がかの『ブリュンヒルデ』 第1回 モンド・グロッシン IS世界大会総合優勝者

である織斑千冬の実弟であつたことには驚いた。

しかし、それだけ素晴らしい姉がいるにもかかわらず、あのような軽薄な態度を取り続ける織斑一夏という人間には、失望感が重なる一方であつた。

やはり男など愚劣極まりない生物で、対等な関係など考える自分が馬鹿者なのかしら。

彼女の思考は諦観の境地に達しつつあつた。

だが、本人の勝手な期待で帯びていた熱が冷めて正常な思考が回ってくると、セシリアの脳裏に別の考えが浮かんた。

彼 織斑一夏の顔立ちは及第点。ブリュンヒルデの実弟ということではISの素質もあるのかもしれない。

そう考えると、惜しむらくはその性格だ。

だがそれとて、どんな場面においても自分を崩さず、悠然と構えているとも取れるのではないか？

そもそも自分は卑屈な男というのが一番嫌いなのだ。ならば、このような女性に囲まれて男一人という状況にあつてもあれだけ我を貫ける彼は、それはそれで悪くないのではないだろうか？

確かに、性格面においては気に入らない部分も多々あるが、少なくとも卑屈さはまったく見えない。半日ばかりの観察で見つけた欠点ばかりに注目して、悪くない獲物を逃してしまうのは愚かではないか？ 狐的に。

ならば

性格が悪いならわたくしが治せばいいんですわ！

ななめ上の結論だった。

それは、彼女の母国と海を隔てた隣国の、かつて貴族の頂点に近い位置にいた人物が言ったとされる台詞に語調や語感がよく似ていた。

なまじ純粋であるが故に、少女はその台詞の歪みに気付くことは無かった。

ななめ上の発想　という意味では、セシリア・オルコットと織斑一夏は同類なのかもしれない。

今日半日の間に、彼女の考えはコロコロとその色を変え、とうとう一つの到達点に辿り着いた。

二時間目の終了のチャイムが鳴ると、彼女は悠然と立ち上がり、獲物（織斑一夏）がいる席へと近付いた。

そして冒頭に至る。

・
・
・

二度目となるが、セシリア・オルコットは怒りにふるえていた。

原因は眼前の少年。

彼がこちらにむける視線からは、何の感情も読み取れなかった。

それが彼女のプライドを更に刺激した。彼女は貴族の生まれであり、母国イギリスの威信を背にする代表候補生である。

その自分の声を一度は無視し、ようやくこちらを向いたかと思えば、この自分を前にして何の感情も現さない。

何を言うでもなく、まるで路傍の石でも眺めているかのようなその視線は、ひどく彼女の神経を苛立たせた。

「あなた訊いてますの？ お返事は？」

「訊こえているが……何か用か？」

「まあ！ まあまあまあ！ なんですよ、そのお返事は！ このわたくしに声をかけられるだけでも至極光栄なことですよ？ 反応には相応の態度というものがあるでしょうに！」

セシリア・オルコットは、沸き立つ怒りを何とか抑えつつも、冷静な部分で彼の様子を観察していた。

無礼な態度は気に食わない。だが、ここで自分の台詞に対してどのような反応をするか。無いとは思うが、ここで卑屈な態度を取るようなら見込み違い。

これまでの男と同じく歯牙にもかけない いや、この自分にか
けられた期待を裏切るのだ、奴隷で十分だ。

暴力的な対応をするようならば、こちらも力でねじ伏せる。そして獣は人ではない、奴隷で十分だ。

おろおろとみつともなく慌てるようならば 奴隷で十分だ。

これまでの観察内容と変わらず、妙な言動でこちらを煙に巻こうとするならば、腹立たしいがまずは及第。

さあ、見せてみなさい織斑一夏！ あなたはどのような反応をするのかしら？

彼の対応は

「誰だ貴様」

少なくとも彼女にとっては予想外だった。

第3話 「金髪との遭遇」(後書き)

セシリアは策士。ただし溺れる。

第4話 「化かされる金髪」(前書き)

今回はR - 15。念のため。

様々な方向を模索しています。

第4話 「化かされる金髪」

「誰だ貴様」

セシリアの思考を一時的に停止させた一言は、教室に浸透し、教室の空気までもを凍結させた。

「Who are you？」

織斑一夏はその空気をまったく意に介さず、彼女 セシリア・オルコットへ問いかけた。

母国の言葉を聞き再起動された彼女の思考は、通常運行を通過して過熱した。

「わ、わたくしを このイギリス代表候補生にして入試主席であるこのセシリア・オルコットを、あなたは知らない、と、おっしゃいます……の？」

渦中の二人に視線を向けるクラスメイト達は戦々恐々としていた。特に最後の「…の？」のあたりが怖かった。

彼女が優秀な人間であり、高いプライドを持った人物であることは既にクラスの多くに認識されていた。

それ故に、今の織斑一夏の言動に声を荒げて激怒するかとも思ったが、意外にもそれはなかった。

だがそのことは、周囲の人間を全く安心させなかった。むしろ導火線に火がついたダイナマイトを見ている気分であった。

「あ、あ、あなた……！」

「ん？」

だがここでセシリアはハッとなった。

罨だ。

これは自分を苛立たせ、正常な思考をできなくするための、目の前の狐が企んだ罨だ。

この男が他人の神経を逆撫ですることに長けていることは、これまでの観察の結果解りきっていたことではないか。

だいたい、彼と自分では出身国が違う。この学園でも自分を知るものは少なくないであろうが、それでも全員が自分を知っているな
どと思うのは傲慢だろう。

いや、目の前の男ならば、仮に自分のことを知っていても同じことを言ってきたりそつでもある。

沸々とした精神を、彼女は理性でもって静める。彼女の体に流れる青き血は、このような庶民の言動一つで我を忘れてしまうような無様を許さない。

いいだろう、これは戦いだ。

目の前の狐と、自分との静かなる闘争なのだ。

ふう、と一息つく。彼女は決意を新たに、目の前の獲物を睨み付ける。

「先ほども言いましたが、わたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生として選出されたエリートにしてIS学園入試主席、美と実力を兼ね備えた高貴なる身ですわ」

絶賛自画自賛であつた。

「ほほう、エリートで高貴な身なのか」

織斑一夏が関心したように頷く。その様子に、セシリアの優越感
は僅かだが満たされた。

彼女の、織斑一夏への試練はまだ終わっていなかった。

先ほどのやり取りでは、相手が自分のことを知らないという予想だにしない問題があった。本当の戦いはこれからだ。

織斑一夏という男が、自分が教育を施してパートナーとするに足る男であるか、それとも、

奴隷となるか。

「そう！ わたくしはエリート！ エリートなのですわ！ そのわたくしのような選ばれた人間と同じクラスとなり、し・か・も！ 声をかけられるなどということは、この上ない奇跡的な幸運ですよ？」

びしりとその指を彼に突きつける。

（二度目となりますが、さあ！ どう反応するのかしら 織斑一夏！――）

鼻に当たりそうなくらいに近づけられたその美しい指に、彼は目を向ける。

「？ なんですか？」

そして彼は

ちゅぱっ

「
きゃ
」

迷い無く吸い付いた。

完全なる奇襲であつた。

第4話 「化かされる金髪」

狐は警戒心の強い動物である。夜行性で、基本的には雑食。

賢い動物である彼ら彼女らは、実は好奇心が強い。

そのため一度警戒を解いた狐は、時に以外な行動に出ることがある。

そのような狐の性質と、織斑一夏の今回の行動に関連性があるかどうかはわからないが、つまり何が言いたいのかというと セシリア・オルコットは奇襲を受けた。

・
・
・

教室で話す者は誰もいなかった。

だがその沈黙は、先ほどのセシリアが怒りを抑えていた時のものとは性質が異なる。

クラスの間は目の前で起こっている光景にただただ見入り、そして頬を赤らめていた。

教室の外側から注視している者たちも同様であった。

学園唯一の男　織斑一夏が、同じクラスの才媛・セシリア・オルコットに突きつけられた指に吸い付き、舐めているのだ。

唾液で湿った指が音を立てる

耽美。

そんな言葉が自然と浮かび、彼女達はいけない妄想を掻きたてる。

ある者はメモを取り、ある者は写真を撮り、またあるものはこの光景を絵画として後世に残そうと絵筆を取った。

セシリアにとって、そのような行為の数々は、普段であれば一喝して止めさせるものだった。

しかし、今の彼女にとってはそれらの行為すら思考の埒外にあった。

彼女の脳は熱暴走し、青き高貴なる血は、顔を真っ赤にするという通常の反応をするために血管内で加速した。

そして気が済んだのか、織斑一夏はゆっくりと、指に這わせていた舌を離す。

誰かがゴクリと唾を飲んだ。

そして遅れて

「「「キャーーーー！！！！」」」

歓声が上がる。女三人よればかしい。そのような言葉があるが、少なくともISS学園に所属する彼女たちもその例外ではなかった。

今、目の前で特大の燃料が注がれたのであった。

その後の教室の喧騒はすさまじく、生徒達は皆一様に頬を赤く染め、眼前で起きた幻想のような事象についての意見を交わした。

それを気にした様子も無くしれつとしていた織斑一夏は、衝撃から復活した幼馴染　篠ノ之箒の業の冴えにより強襲・制圧された。当然彼女の顔を真っ赤ではあったが、それ以上に涙目であった。

そしてセシリア・オルコットは、指を突き出した格好のまま固まっていた。

その顔は、陳腐な表現だが、リンゴのように赤かった。

・
・
・

セシリア・オルコットは本日三度目となる感情の猛りに身を包んでいた。

原因は言わずもがな、教室の最前列のど真ん中の席で、両手でペン回しをしているうつけ者 織斑一夏であった。無論、担任に制圧されていたが。

しかし、その平時と変わらぬ彼の様子にセシリアは苛立ち、親指の爪を噛んだ。

あのような行動は予想だになかったのだ。

突きつけられた己の指を、躊躇いなく口に含むなど。

あまつさえ、舌を絡めて舐めてくるなど。

（い、いくらなんでもあの男はありえませんか！）

彼女の心はもはや冷静ではいらなかった。

彼女の怒りは織斑一夏だけではなく自身へも向いていた。

それもそのはず、

（このわたくしが「きゃ！」だなんて小娘のような悲鳴を上げるだなんて……！）

しかも、その後に三時間目が開始されるまで完全にフリーズしていたということも彼女に敗北感を感じさせた。

一度ならず二度までも、彼女は化かされたのだった。

なんて無様。

そのあんまりな敗北に、彼女は顔を歪めた。

「では候補者は織斑一夏……私が言うのもなんだが、お前ら本当に

いいのか？ 他に候補はいないのか？ 自薦でも他薦でも構わないぞ？ ……おい。どうして全員頬を赤くして私から目を逸らしている
「

そんな彼女の耳に、クラス担任の声が聞こえた。

候補者？ ……候補者。 ! 候補者ですわ!!!!

そう、三時間目のこの時間は、二週間後に行われるクラス対抗戦に参加する代表者を決めているのだ。

セシリアの思考が一気に活性化する。

認めよう 織斑一夏、彼は強敵だ。この自分をここまで振り回し、化かし、敗北させたのだ。

彼は狐は狐でも、英国の威光を正面から引つ掻き回す恐るべき『Desert Fox（砂漠の狐）』であったのだ。

狐狩りと思つて、結局狩られたのは自分であつたのだ。

認めよう そして、このままでは済まさない。済ませることなどできない。

この選択はもはや八つ当たりの域であるという自覚はある。

それでも、彼女にも譲れないものがある。

クラス代表とは最も強い者になるべきだ。

それは、祖国で代表候補となるべく努力してきた彼女の信念だった。

彼の实力も見ずにこのままクラス代表にしては、これまで積み重ねて得た、自分の大切なものが揺るがされる。

ISは、ISに関してだけは 何ら抗うことなく済ますことなどできない。

（わたくしにも わたくしにも！ 代表候補生まで登りつめた、IS操縦者としての面子がありますの！！）

この日、1年1組ではクラス代表の候補が二人拵がった。

決戦は一週間後の月曜日。

第4話 「化かされる金髪」 (後書き)

まだ1日目すら終わりませぬ。

幕間1 「一日の終わりに」(前書き)

幕間ということので短い構成となっております。

きりの良いところになっています。

幕間1 「一日の終わりに」

教室で山田先生に渡された部屋番号の書かれた紙とキーを手に自室へと向かいながら、織斑一夏は三時間目以降のことを思い返していた。

三時間目 そう、二週間後に迫るクラス対抗戦の代表者を選出する時間だった。

クラス担任である織斑千冬が、自薦他薦問わず相応しき者の名を挙げよと言った際、何故かクラスの大半の人間が彼を指名した。

その奇怪なる光景に織斑千冬が近くにいた者達を問いただすと、

『耽美！ 耽美なんですう！』

とか、

『彼なら何かしてくれる、というより既にしてくれました！』

とか、

『有明まであの人について行きます！』

などと珍妙な言動を繰り返し、教員二名を混乱させていた。

思い返してみれば、自分のクラスにはエキセントリックな性格の持ち主が多いようだ、と彼は考える。さしもの彼も、このような奇抜な人間が集まるクラスに馴染むことができるのかどうか、とノミの心臓の毛ほどの不安を覚えた。

そのことを伝えられた幼馴染はその言葉を意図的に無視した。

幕間 「一日の終わりに」

その後、一夏は千冬に何をしでかしたのかと詰問された。

しかし、彼自身は特に妙な行動をとった覚えは無かった。常に清く正しく、自分の心に嘘を吐かないように行動している彼にとって、本日の自身の行動の中に問題点を見出すことはできなかった。

だが、ついその場の勢いで『許してくれ！ 出来心だったんだ！』

と言ってみたら、詰問に打撃が混ざるようになっていた。

「打撃フォームに腰が入ってきたあたりで山田先生が『殿中です！織斑先生、殿中です！』と、涙目で震えながらも止めに入った。

流石の彼も、あのまま実姉の詰問が続いていたらしてもいない罪を認めてしまうところだった、と後に幼馴染にもらった。そしてそんな彼を、幼馴染はジト目で見ていた。

とにもかくにも、日本の冤罪はこうして生まれているのだろうか、と彼は世の理不尽さに唸った。

その理不尽さを知らしめたのが実の姉であつた点に関しては、彼は意図的にその事実を消去した。

さて、そのような珍事が収まると、とうとうクラス代表に立候補するものが現れた。

セシリア・オルコットである。

彼女は顔を赤くしながらも、決意に満ちた表情で彼に指を突きつけると、この度のクラス代表を賭けて決闘する旨を伝えた。

その時の内容を一夏なりに要約すると、以下のようなものとなる。

『おれアおめえがきにいらんけん、おとしまえつけたらア！かし
こ』

ひどい因縁もあつたものだ……と、彼は嘆息し、再び世の理不尽さを嘆いた。

英国貴族とは皆、彼女のように『ヤ』の人たちのような言いかけをつけてくる存在なのだろうと彼は納得した。

彼に特に悪意はない。

なお、その時突きつけられた指先を彼が凝視していると、セシリアは慌てて指を身体の後ろへと隠した。

その時、周囲の生徒は期待に目を輝かせていた。

・
・
・

そうこうして、思索にふけていた彼は手にした紙に書かれた番号の部屋 1025室前に到着した。

彼は鍵穴に鍵を差し込み捻る。

しかし

鍵が開いている。

その事実、彼は目を細める。

彼は音を出さないようにゆっくりとドアを開けて中を確認する。

ドア前　人影無し。

それを確認すると、彼はドアの隙間からスルリとその身を中にすべり込ませる。退路確保のため、ドアは閉めない。彼の目的は中にいる侵入者であつて、何も完全犯罪を成し遂げにきたわけではないのだ。

部屋に入つて最初に目に入るのは、二つ並んだ大きなベッドである。中々に上等な代物らしく、遠目に見てもそれが判る。彼は違いの判る男　イチカ・ザ・マエストロと呼ばれたこともある目利きなのだ。

それはともかく、部屋の奥にも人はいない。

最後は　彼はドアのすぐ近くにある、シャワー室へ通じていると思しき扉に視線を向ける。

中からは微かに水のはねる音がする。何者かがシャワーを使用しているのだ。

不逞な輩だ。

他者の部屋に侵入し、あまつさえ優雅にシャワーを浴びている侵入者に対し、一夏は怒りを覚えていた。

よかろう ならば強襲・制圧だ。

彼は何故か部屋の脇に置いてあったカバンから突き出た竹刀を手にとった。都合の良いことに犯人を拘束するための布きれも一緒に出てきた。

女性が胸部に身につける下着のようにも見えるそれは、少々頼りない材質ではあるが、無いよりはマシだろう。

彼はそれを片手に持ち、目を瞑り、ふ、と一息吐いた。

中で水のはねる音が止まる。シャワーの使用が終了したのだ。

人影が脱衣スペースに映る。どうやらバスタオルで身体を拭いているようである。

人影が後ろを向いたのを確認すると、彼は勢いよく扉を開け、中に踏み込んだ。

ちょっとした誤解、小さなボタンのかけ違いから、人の争いは始まる。

これはそんな悲しい事件であった。

後日、篠ノ之箒と同室であることを伝え忘れていたタヌキ娘（山田真耶）は、一夏に散々その柔らかい頬をつねり倒された後、一日中語尾に『ぼん』をつけることを強要された。

幕間1 「一日の終わりに」(後書き)

部屋のシャワー室に脱衣場があったのかどうかは定かではありません。

第5話 「朝げの時間」(前書き)

あまり進みません。

題名通り翌日の食堂での出来事です。

第5話 「朝げの時間」

IS学園、1年生寮の食堂。

多くの生徒で賑わうその一角で、織斑一夏と篠ノ之箒は朝食をとっていた。

篠ノ之箒は手にした箸で納豆をぐりりとかき混ぜながら、その思考を動かす。

思い返すのは昨夜のこと。鍛錬で出た汗を寮の自室にあるシャワーで流し終え、脱衣場で肌の水滴をバスタオルで拭いていた時のことだった。

突然、背後の扉が開け放たれ、脱衣場に人影が飛び込んだきたのだ。

すわ暴漢か、と箒は身を硬くした。しかし彼女とて剣道という武を嗜む者のはしくれ、たとえ無手であろうとも、抵抗もせずみすみこの身を下種に許すほど懦弱ではない。

『花は桜木、人は武士、女は貞淑、一夏は嫁』と、かの一休宗純が遺したかどうかは定かではないが、とにかくにも、彼女は来る性犯罪者に対し迎撃姿勢をとった。

そんな彼女の決死の氣勢は、相手の姿を目に留めると同時に霧散

した。そして彼女は先ほどとは別の理由でその身を硬くした。

相手もそんな彼女の姿を認識したのか、その身をピタリと止めた。

眼前で彼女に竹刀を向けていたのは、彼女の幼馴染　織斑一夏に他ならなかった。しかも、女性が胸部に身につけるための下着を片手に持つて。

どれほど親しい者が見ても、弁護のしようが無い姿だった。

想い人のそのあんまりな姿に、彼女の思考はその髄までも凍りついていた。

そうして固まる彼女をながめた一夏は、うんうんと頷き『箒ならしかたない』と言いながら脱衣場から出ていこうとした。

その途中、彼は何か思い出したかのように立ち止まると、その顔をこちらに向け、微笑しながらサムズアップしてこう告げた。

『ナイスおっぱい』

と。

彼は満足したように再びうんうん頷くと、今度こそ脱衣場の外へと向かうべく背を向けた。

あまりにもいい笑顔で告げられたそれに、箒の思考は瞬時に加速した。

す、と箒は片足を一步後退させると、次の瞬間には一夏の無防備な後姿に美しい延髄切りをかましていた。全裸で。

第5話 「朝げの時間」

その後の彼女は不遇だった。

夜叉も逃げ出すような勢いで、ひざを折り前のめりに倒れていく一夏の襟首を掴むと、仰向けに引きずり倒して馬乗りとなり、打撃

を叩き込んだ。全裸で。

肉を打つ鈍い音が響き渡る1025室での狂騒は、密かに一夏の後をつけていた生徒数名によってドアの隙間から目撃され、ホウキ・ザ・アマゾネスの異名が一晩のうちに近隣に広まった。

箒は泣くに泣けなかった。

思い出すだけでも腹立たしい、と彼女は納豆を混ぜる手に力を入れる。

あの後、情報の伝達に齟齬が生じていたということは彼から聞いて理解した。とりあえずあのタヌキ娘にはいつか絶対落とし前をつけてやる、ということとで精神を落着かせた彼女だったが、人の裸を拝んでおいて、あまりにも変化の無い態度をしている眼前の幼馴染への怒りは収まらなかった。

（のんきに稲荷寿司などパクついて　　！）

目の前の食皿に山と盛られた稲荷寿司を次から次に平らげていく一夏に、箒は増していく苛立ちを感じながら、納豆を御飯にかける。

そのような会話の一切生じていない食卓に近付く者がいた。

「お、織斑くん、朝ごはん一緒にしていいかなっ？」

声の先に視線を向けると、そこには料理の載ったトレイを持った女子が三名、緊張した様子で立っている。

一夏がその問いに了承の意の頷きを返すと、彼女達は目を輝かせて席に着いた。

その様子に筭がまた怒りの数値を上げたことを、彼は知るよしもない。

「うわー、織斑くんって朝すごくたくさん食べるんだねー！……
稲荷寿司だけ」

「お、男の子だねっ！ 稲荷寿司だけだけど！」

彼女達は頬を僅かに引きつらせながらも、一夏の朝食の量に感心した。生活の中で自然と目につく性別の違いが興味深いのだろう。

彼は再び肯定の意の頷きを返す。食事はしっかりと食べる。小さなことだが、これは一夏が長年続けてきた習慣の一つであった。

家にいたころの彼は、実姉の織斑千冬が家事を全くできないというチャームポイントの持ち主であったため、家の雑事の多くをこなしていた。

その中には当然食事作りも含まれており、無駄に凝り性であった彼は、普段の行動や言動からは考えられないような理想的な食事を食卓にのせていた。

今彼が食べているメニューも、ほうれん草のおひたしに焼鮭、味噌汁に稲荷寿司、それに食後の果物と一部相対的に量の多いものもあるが、基本的にはバランスのとれた構成をしていた。

彼の日常の行動は、一つだけをとって見れば洗練されているが、全体的に見ればやる意味がまったくない無駄な行動に満ち溢れており、そのことにより加算される消費カロリーを考えると、山盛りの稲荷寿司は十分健康の許容範囲である。多分。

そんな一夏に対して、彼女達のメニューは飲み物一杯にパン一枚、おかずが一皿と軽めである。

「女子はそれだけしか食べないで平気なのか？」

一夏は自然に浮かんだ疑問を口にする。

目の前で焼鮭をほぐしている幼馴染のメニューは和食。剣道で体を動かすからか、彼女は朝食はしっかり、バランス良くつつている。

筈と比べると彼女達の献立はずいぶんと少なめだ。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。これでちょうど良いかなっ？」

「お菓子もよく食べるしねっ！」

と返してきた。

その返答に対し、一夏は考える。

朝食は一日を健康に過ごし、元気に活動するためのエネルギー源である。

朝食は健全な肉体を形作る源であり、そして健全な肉体には健全な精神が宿る。

これに当てはめて考えると、このままでは彼女達は健全な肉体作りがうまくいかず、結果、自分のように素晴らしい黄金の精神を養えなくなってしまう。

ましてや朝食をないがしろにし、中途半端な時間に間食するなどという行為は唾棄すべき愚行である。

過程に少々の歪みはあったが、あながち間違ってもいない結論に達した彼は決意した。

彼は自分の目の前にある稲荷寿司を箸で挟むと

隣に座っている生徒、谷本なにがしの口へと向けた。

「へ？」

突然の奇襲に谷本なにがし（以下、谷本）の挙動は静止し、ついでに食堂の空気も固まった。

・
・
・

私は谷本である。名前はまだない　　と言ったかどうかは知らないが、彼女　　谷本は混乱していた。

自分の口に稲荷寿司を突きつけている箸の先には、学園唯一の男子　　織斑一夏がいる。

その整った顔立ちが浮かべる表情からは、まったくといっていいほどこの行為の意図が読めなかった。

彼女は何故自分が今このような状況に置かれているのかが心底理解できずにいた。

色々と興味をひいてやまない眼前の少年と少しでもお近づきになると、友人二人と共に意を決して話しかけたのが随分昔のことのようにも感じる。

その時は何ら問題もなく同席を許されてうれしかったし、これがきっかけとなって自分と彼との恋のヒストリーが始まるのではなからうか、という突き抜けた期待も少しはしていた。

だが現状、朝食の量に関する会話からこのような状況に発展するような思考経路を彼女は有していなかった。

元来活発な性格である彼女だが、他の多くの女子と同じように男性慣れしてはいなかった。そんな彼女が恋のバイブルとしている少女マンガでは、このようなイベントは二人の関係がある程度親密になってから起こるものとして描かれていた。

いったい自分はいつの間にイベントフラグを打ち立てたのだらうか？

浮かぶ疑問はあれど、答えてくれる者はいないし、解を導き出せるような経験も彼女にはあまりない。

考えてもわかりっこない、と判断した彼女は、現状を前向きに捉えることにした。

これはごほうびだ、と。

普段男っ気のない生活をしながらも、頑張って学問に取り組み、S学園という急峻へと入学するに至った。

これはこれまでの自分のその努力が、神さま的な存在に認められたのだ、と。

そう考えると悩むのが馬鹿馬鹿しくなった。

彼女は神さま的な存在に感謝の祈りを捧げると、迷いなく目の前の稲荷寿司を口にした。

背後で『あ……！』という友人の声にも似た雑音が聞こえた気がしたが、きっと気のせいだろう。

緊張から神経が過敏になっているためか、食堂中の視線が自分に集まっているような錯覚さえ覚えて妙に気恥ずかしかったが、口に含んだ稲荷寿司は噛むことにお揚げから甘い下味が滲み出て、彼女の味蕾を濡らした。

これが甘酸っぱい青春の味が、と彼女はゆっくりと咀嚼し、それを味わう。

そしてゴクリ、と稲荷寿司を飲み込んだ。

唇についた揚げの油をぺろりと舌で拭う。その動作はどこか成熟した女性を感じさせる艶かしいものだった。

彼女は頬を赤くしながらも満足気にニコリ、と微笑みこう言った。

「ごちそうさまでした」

そんな彼女に、一夏も何故か満足気にニコリと笑みを返す。

こうして突発的な青春イベントは終了した。

そして、その次に控えるイベントが異端審問であることを彼女は知らない。

参加者は食堂にいる生徒の大半。弁護人はいなかった。

そして一夏は涙目の箒の打撃を受けた。

嫉妬にかられた女たちの狂宴は、寮長である織斑千冬が食堂にいる生徒全員を一喝するまで続いた。

地獄への道は想像以上に綺麗に舗装されているのかもしれない、と谷本は後に語った。

第5話 「朝げの時間」(後書き)

書いてる自分でもびっくりの谷本さんイベント。

イチカ・ザ・ヒロインキラー(おとすのではなく自分でやる的な意味で)の異名を持つ彼は、油断していると突然奇襲してきます。

第6話 「お昼前のものがたり」 (前書き)

相も変わらず進みません。

題名通りお昼前あたりまでの物語。

ネタと乙女。

第6話 「お昼前のものがたり」

後半が魔女裁判と化した騒がしき朝食も終え、二日目の授業が始まった。

これといった問題もなく授業は進行していたが、途中で山田先生がISの持つ生体機能補助を女性が胸部につける下着のようなものつまり、サポートはするが人体に悪影響はないものであるとの大胆な見解を披露した。

そして、目の前の一夏と目が合うと自分の述べた内容を思い返し、あわあわと顔を赤くして慌て始めた。完全な自爆であった。

教室の生徒達も、自分の胸元を隠しながらちらちらと恥かしそうに一夏へと視線を向けた。

教室が極めて微妙な雰囲気になったことを察知した彼は、この状況を打開すべく立ち上がった。

彼は山田先生の顔を正面から見据え、ニコリと満面の笑みをつくった。

その笑みを『大丈夫、俺は気にしてませんよ山田先生。あと愛してる』と前向きに解釈したのだろうか、彼女はその顔をさらに朱に染めこそしたものの、落ち着きを取り戻した。

一夏はそれを確認すると、笑みを崩さず告げた。

セクハラですよ山田先生。

彼女は涙目になって再び慌て始め、篠ノ之箒は『お前が言っ的な視線を射殺さんばかりに彼に送り、織斑千冬は溜息を吐きながら出席簿を握った手を振るった。

こうして教室の微妙な空気は霧散した。そして更に微妙な空気が教室を覆った。

第6話 「お昼前のものがたり」

「織斑、お前のISのことなんだが……お前は少々特殊なケースだ。故に、学園が専用機を用意することになった」

授業が終了してすぐ、一夏は実姉にそう告げられた。

織斑一夏は現時点でISを扱える唯一の男、つまり希少種である。その彼のデータを収集するために、専用機を用意することが決定したとのことだった。

織斑千冬が告げたその言葉に、彼の周囲は『わあ!』とわき立つ。

現在、ISのコアは世界に467しか存在していない。

そのコアの全てがブラックボックスと化しており、コアの製造はISの開発者である篠ノ之博士にしかできない。

故に、この467という数字が今後増えるかどうかは未定であり、その限りある数の中の一つを個人で専有できる専用機は、IS操縦者にとってエリートの証でもあった。

そのことに一夏はふむ、と顎に手をやり回想する。

篠ノ之束。思い返すの彼女のことだ。

彼女は幼馴染である篤の実姉であり、一夏自身、幼少の頃から何度か顔を合わせていた。

現在はその行方をくらましており、超国家法に基づいて世界中で搜索が続けられている。しかし、その搜索の目はことごとく掻い潜られ、今だに発見するに至っていない、まさに神出鬼没のうさぎさ

んである。

ただ一夏にしてみれば、たまにひょつこりと織斑家の台所に出現しては食事のおかずをかつ攫っていくドラ猫のような人物である。

彼もそれを阻止すべく手を尽くしたが、こちらが対策を練る毎に相手の手口も巧妙化していった。

途中からは、光学迷彩を駆使してプレデターの如く獲物おかしを狩っていった。

彼はそれに対抗すべく新たな力を求めて、通信講座で忍者の資格を取得して気配察知の能力を鍛えた。

忍びへの道は厳しく、最後にはニンジャマスターの異名を賭けて共に学んできた中学の悪友と戦わねばならないという非情な場面もあった。その最後の戦いで悪友は彼の実力を認め、一夏はニンジャマスター・イチカの称号を得るに至った。

ニンジャマスターの称号を得た彼は、既に光学迷彩の弱点に気付いていた。

いかに高度な科学技術を用いようと、それを扱う身は人間。たとえ姿は見えずとも、獲物おかしを前にして抑えきれなくなった濃密な気配までは隠し通せはしない。そして一流たる彼は、その気配を察知し、出所を喝破できるだけの業を得ていた。

結果　一夏は光学迷彩を見破り、天才・篠ノ之束はお縄についた。

す巻きにされて床に転がり彼女の最後の言葉は、何故か「さらばだ明智君！ また会おう！」であった。特にその場で消失するようなことはなかった。

ここに、未来永劫続くかと思われた不毛なイタチごっこは終結した。見事にうさを釣り上げたその日のおかずは、カラッと黄金色に揚げたアジフライであった。

絶えず未来を見続け革新的な技術を用いた篠ノ之束と、先達が集積してきた過去の知識と身体に秘められた可能性に賭けた織斑一夏。

この二人に共通するのは、どちらも人の持つ可能性を信じ、曲がらず歪まず前へと進んだ点である。ただ、最初の進行方向の選択に致命的な誤りがあったことは、二人は生涯気付くことは無いだろう。

その後千冬が帰宅し、三人はアジフライとその他諸々のおかずが載った食卓を仲良く囲んだのだった。

・
・
・

「あの人は関係ない！」

そうして過去の記憶に浸っていた一夏の意識は、突然響いた箒の
声によって振り返された。

視線を向けた先にいるのは、数名の生徒に囲まれた箒。浮かべる
表情は険しく、余程のことがあったのだろう。

「……騒がせてすまない。しかし、私はあの人じゃない。教えられ
るようなことは何もない」

そこまで言った彼女は、ふと周囲を見渡す。

周りの生徒の顔は皆一様に恐怖に歪んでいる。

そこまで怖がらせてしまったのか？

箒は恥じた。自分もまだまだ未熟だ、と溜息をつく。

彼女がそのように後悔していると、教室の人間は、箒の周囲にい
る生徒達に向かって口を開いた。

『し、篠ノ之さんを怒らせて あなたたち1組のホウキ・ザ・ア
マゾネスの噂、知らないの!？』

なに？

それは、あまりにも彼女の想像を超えていた。ななめ上に。

『篠ノ之さん、昨日の夜織斑くんに馬乗りになって殴りつけてたのよ！！』

『昨日の夜、篠ノ之さん部屋の扉を指を弾くだけで真っ二つにしてたわよ！！』

なん……だと！？

箒は絶句した。彼女は現状がシリアスな場面だと思っていた。しかし、自分が実は致命的な空気の読み違いをしていることに気付いた。

しかしそれは仕方のないことであろう。いかに彼女とてここで伏線回収の如く、昨夜に起こった喜劇的な惨状が掘り起こされるとは思わなかった。恐らく思いたくもなかっただろう。

あれは箒にとっては、もう忘れてしまいたい記憶だった。

それが過大な誤解によって、パンパンに膨らんで目の前に転がってきたのである。

彼女はこの時、人の噂というものに恐怖した。思いも寄らぬ人間に自分のことがいつのまにか知られてしまう。しかもその情報は、伝達の過程で意図するしないに関わらず歪んでいき、最後にはまったく身に覚えのないことで自分の人間像を貶められてしまう。

ハッ！と気付き、彼女は責められた生徒達へと目をむける。彼女達は皆、顔を青ざめさせて涙を浮かべながら体を震わせていた。

そして、

『ゆ、許して』

『ごめなさいごめなさいごめなさい』

『真つ二つはいやあつ！』

等の台詞を口にしながら、箒にお菓子や現金を差し出してきた。

それはどんな親しい人が見たとしても、弁護のしようがないほどに 恐喝^{かつあげ}の場面だった。

箒は今度こそ泣きたくなかった。

・
・
・

そのような騒ぎもあったが、最後は千冬の一喝によって収まった。

何故このような騒動に至ったのか、千冬は筭に聞いただったが、彼女は『無実です！ 無実なんです千冬さん！』と涙目で容疑を否認。普段であれば『織斑先生と呼べ』と注意するところであったが、そのあまりに必死な様子に彼女はそれはしなかった。

そして詳しい事情を聞いた末 彼女は愚かなる実弟の意識を絞め落とした。タップアウトは一切認められなかった。

・
・
・

一夏は授業が終了すると、朝と同じ感覚で昼食を共にするため、頭を抱えて机に突っ伏している幼馴染のもとへ向かった。

その途中でセシリア・オルコットが彼に声をかけたが、一夏が彼女の指を凝視すると慌てて去って行った。

一夏は首をかしげつつも、大方『あなたも専用機が用意されますのね？ これでフェアですわね！』というようなことでも言いにか

たのдарう、と脳内で判断し、このことに関する思考を終了した。

なお、その予想は当たっていた。

「箒、飯食いに行こうぜ」

彼は箒に声をかけるが、反応はない。

ふむ、と彼は考える。

どうやら幼馴染は随分と疲労しているようだ、と彼は判断する。
普段どれだけ強気なことを言っているにも、彼女とて十代の少女である。

新たな環境に身を移して、精神的な疲労が蓄積しないはずがない。

彼の予想は精神的な疲労という点に関しては当たっていた。

だが

と、彼は更に思考を走らせる。

疲労しているのは仕方がないが、昼食を抜くのは感心しない。たとえ僅かな量でも口にしてい、その上でゆっくりと休むべきだ。

意外に思われるかもしれないが、実家で家事を担当していた彼は保護者的な思考を有している。

実は普段の奇行とて、その大元を突き詰めれば相手の身体を気遣うての行動であることが少なくない。

ただ、その優しさを真つ当に発露するために必要なネジが、十本や二十本ぐらい外れてしまっているだけなのだ。

彼は脳内で考えをまとめ終わると、おもむろに突つ伏す箒の脇に立った。

「箒」

「……なんだ、昼食なら私はいい」

かけられるその声に、彼女はそう返す。彼女は先ほどのアマゾネス云々のやりとりで憔悴していた。前の授業こそ何とかまじめに受けたが、それも授業が終わるまで。彼女は授業が終わり、教員二名が教室の扉を出ると同時に机に突つ伏した。

今日は厄日か。いや、昨日から厄日だ。

彼女はとにかく身を休ませたかった。若干の空腹を覚えてはいたが、食堂まで歩くのがどうにも億劫であった。

しかし、そんなどこまでも沈んでいきそうな彼女の意識とは裏腹に、彼女の身体は浮かびあがった。それも突然に。

「な!？」

ぼすん、と身体が妙に居心地のいい場所に収まる。

そしてそこは

織斑一夏の胸の中だった。

「な、な、な……!？」

彼女の意識は熱を持ち始め、高熱に浮かされそうになる。しかし、そのことに気付いた筈はその侵食を強引に押し止める。

「は、離せ馬鹿者っ！！？」

慌てて、一夏の胸を手で押し付けるが、意外にもその体軀はびくともしない。

い、意外と逞しい体つきをしているのだな……！

彼女の脳裏には、場違いにもそのようなことが浮かんた。

それが原因で一瞬暴れるのを止めた彼女の体を、一夏は一瞬にきて抱き上げた。

は？

人体を横にして、持ち上げるようにして抱きかかえるその抱き方の名は

『お姫様だっこ』

篠ノ之箒は乙女チックな状況に遭遇した。

「き
」

そして、

「「「きゃあああああ！」「」」

お昼の教室は、昨日に続いて歓声に包まれた。

第6話 「お昼前のものがたり」(後書き)

中盤で落として、終盤で持ち上げられる篤さん。

心の弱ったところを狙う『ヤ』のつく人の手法。

いつもどおりの奇襲です。

一夏くんの内面は優しさに満ちています。

第7話 「涅槃へようこそ」 (前書き)

少し短いです。第さんパート。

平日はやはり更新頻度は落ちます。

第7話 「涅槃へようこそ」

1年1組の教室では歓声が挙がっていた。

その歓声はすさまじく、廊下を歩く生徒は皆、何かと教室を覗きこんだ。そしてほぼ全員が目輝かせた。

その理由はいわずもがな、教室の窓際に佇む男女二人。

その腕の内に抱いた黒髪の少女を真直ぐ見据える男 織斑一夏であつた。

美しい花に蝶がとまり、甘い砂糖に蟻が集まり、タイムセールスに主婦が群がる これは世の中の道理というものである。1組の教室の前にはその道理に合わせるように人が集まっていた。

彼女達は皆一様に頬を染め、この絵画のような光景を目に留めようと二人の男女を凝視する。

ある者はメモを取り、ある者は写真を撮り、またある者はこの光景を後の世代に遺そうと映像を録った。

そのような諸々の行為は、平時の篠ノ之箒であれば一睨みして止めさせるものだった。

しかし、一夏の腕の中にすっぽりと収まる彼女には、それらの行為に意識を向ける余裕は皆無であつた。

彼女の思考は砂漠のような焦熱を帯び、誇りある尚武の血はその顔を朱色に染め上げるという極めて正常な働きをするべく体内を駆け巡った。

そして彼女の混乱は今、第三天を飛び超え、その意識は生きながらにして有頂天に至った。

涅槃に居住スペースを構えつつある意識をどうにか動かしながら、
篤は思った。

なにこの状況？

と。

第7話 「涅槃へようこそ」

暖かい。

自分の身に熱を伝える腕の先には、彼女の幼馴染　織斑一夏が
いる。

彼女は羞恥の心が行きすぎて、意識がもはや物質世界における欲望を一時的に超越しつつあった。

想い人の体温というものは、これほど心を安らげるのか　と、
平時に聞けば床の上を悶えて転がりそうなことを考える。

でも何で私は一夏の腕の中にいるんだろう？

彼女は驚くほど穏やかな心で状況をまとめ始める。

たしか自分は授業前のやり取りで心底疲労していた。授業が終わって昼休みになったが、食堂まで行く気力は自分にはなく、一夏の昼食の誘いにも応じなかった。いや、応じることができなかった。

そしてお姫様だっこされた。

わけがわからないよ。

本当にそのとおりだった。いかに現在の彼女の思考が人類全てを愛することが出来そうなほどに穏やかであっても、成立しない方程式を解くことなどできるはずがなかった。

だが、答えを得られぬことへの苛立ちは今の彼女にはない。

今の彼女の心は無限ともいえる慈悲と寛容の心に満ち溢れており、現状を紐解くことができないことぐらいで、満ち足りた心の泉を沸かせることなどできるはずもなかった。

今の彼女ならば、アマゾネスが出ようが女真族が出ようが、その心の平静を1すら揺らがすことはないだろう。

そして、

ああそうか。

彼女の精神は、ここで一つの結論に達した。

これはごくほつびなんだと。

誰かが既に通った道だった。

そんなことを知る由もない彼女の思考はぐるぐる回る。

六年間、想い人と離れ離れになった。当然それは望んだものではなかった。

離れた距離と時間から来る不安を埋めるかのように自分は文武に励んだ。

そしてようやく再会したと思ったら、その彼から裸は見られるし、制裁を加えている場面を他人に見られて南国の部族長みたいな異名をつけられるし、一夏は誰とも知れぬ女に目の前で『あーん』とかするし、クラスの人間に恐れられ金品差し出されて恐喝してるみたいになるし、一夏はまるでモブキャラのような女に『あーん』とかするし……。

列举してみると思いのほかアレだった。

箒は心の中で涙を流した。

彼女の流した涙が流星となって天へと昇り、やがて夜空に輝く一つの星となるかどうかは定かではないが、とにかく彼女は涙した。

顔では笑って心で泣いて、実に男らしかった。文章的に。

でももういいんだ。

彼女は思う。きっとこれまでのその頑張りを仏様っぽい存在が認めてくれたんだ、と。

そう考えると、もう悩んでいたことがどうでもよくなった。

彼女は仏様っぽい存在に、心の中で感謝の合掌を送った。

もう……一夏を私の嫁にしてもいいよね？

清々しいぐらいの本音だった。

有頂天だと思っていた場所は、実は三界の最初の一有だったのだろうか。超越したはずの彼女の欲望のたがは、魔女の釜のフタが開くかの如く外れつつあった。

そしてここから彼女の栄光に満ちたグロリーデイズが始まる！

かに思われた。

突然、彼女の体が揺れる。

ハッ！と、自分を抱く一夏に視線を向ける。

彼は何故か箒を抱いたまま、その片足を窓枠にかけていた。

箒の怪訝な視線を感じたのか、一夏は彼女の顔見ると満面の笑みを返した。

教室の出入り口、人でいっぱいだから。

彼の台詞で視線を移した先には、何故かカメラや携帯電話を手にする者、放送用カメラをまわしている不審者等で溢れ返っていた。

そのような状況を理解したうえで、再び彼女は一夏に視線を向ける。

すると彼はやはり満面の笑顔で言った。

こっちのほうか、速いから。

そして、その言葉の意味を彼女が理解するかしないかということこそで彼は

跳んだ。

時をかけたりした少女もかくや、と言わんばかりのポーズで。

有頂天に至った彼女の精神は、地球の重力に引かれ、その身体ごと地上へと落下した。

なんでやねん。

彼女はもう涙も出なかった。

彼女の意識は落下の衝撃で完全に現世へと回帰し、一夏は箒の古武術の冴えによって宙を舞った。

人体ってあんなにキリキリ回りながら吹き飛ぶのね、と窓から力メラをまわしていた生徒はつぶやいた。

・
・
・
・

その後回復した二人は食堂へ行き、箒も何だかんだで暴れてスッキリしたのか普通の量の食事を注文した。

しかしまだ心配だったのか、一夏は彼女の昼食をひったくり、俗に言う『あーん』をして食堂を再び沸かせた。

箒は顔を真っ赤にして文句を言ったが、最後はひな鳥のようになしく餌付けされていた。

おかずを咀嚼するその口元は、微かに上向きに弧を描いていた。

そして何だかんだで箒は、心配のお礼と称して、放課後にISの訓練と一緒にする約束を取り付けたのであった。

どんどはね。

第7話 「涅槃へようこそ」 (後書き)

ホウキ・ザ・コウメイ。

そしてそろそろ戦闘パートにいきたいです。

幕間2 「直前の内心」(前書き)

幕間です。前回言っておきながら戦闘には入りません。

まじめとふまじめ。

幕間 2 「直前の内心」

瞬く間に一週間が過ぎた。そして今日は月曜日。1年1組のクラス代表を決める試合の当日である。

その試合が行われるアリーナ上空では、鮮やかな青色のISSが既に待機していた。

『ブルーティアーズ』

蒼い雫と命名されたその機体に身を包むのは、今日の主役の一人セシリア・オルコットである。

やはり、空はいいですね。

流れる風を感じながら彼女は思う。

その視線を下に向ければ、目に入るのは観客席。そこには試合の開始を待つ己のクラスメイトたちがいる。

生身では至れぬ高度にその身を置くセシリアには、彼女達の姿が随分と小さく映る。

それを認識しながらも、彼女の脳裏に浮かぶのは一つ。

まるで人が虫ケラのようにすわね。

そんなナチュラルに極悪な選民思想を垂れ流しながらも、考えるのは自分のこと。

女神の如き美しさと賢者の如き知性を兼ね備えた自分は栄光ある貴族である。

貴族であるこの身は足下でトマトにへばりつくアブラムシのように蠢く庶民の上へと立ち、その進むべき道筋を照らさねばならない。

それこそがノブレス・オブリージュ。

高貴たる者に課せられたその義務を果たすが故に、貴族は特権を享受する。

故に彼女はこのままでは終われない。例えどれほどその身が敗走を重ね、どれほど屈辱を味わうことになるうとも、勝敗を決する最後の一戦を敗北で終えることだけはしてはならない。

貴族の敗北とは民衆が寄る辺を失うことを意味する。先の見えぬ暗闇で頼るべき光を見失うことを意味する。

最後の戦いを負けて終えれば民衆の進む先は永遠に闇に閉ざされる。それは己が貴族としての責務を果たせなかったということだ。

故に彼女はただ勝利を見据える。過去の敗北が、その手にした勝利を飾る花と感じるほどに余裕に満ちた圧倒的な勝利の二文字を。

だが。

彼女は思う。千分の一、万分の一にもありえないことだが、これから来る相手がこの身に敗北を刻むことができたなら、と。

教室では卑屈さの欠片も見えない態度を貫き、そして強かに自分を翻弄した。あれほど醜態を晒し、自分に腹が立ったことなどそうはない。

もしも、自分が圧倒的有利であるこの戦いでもあのように翻弄されてしまったら。

ありえないことだ。自分はイギリスの代表候補生であり、そのIS稼動時間は300を優に超える。それに対して相手のIS稼動は一度だけだと聞いている。

たとえIS適性があろうとも、優秀な操縦者としての素質があるかどうかは別だ。そして仮にどれほど相手に素晴らしい素質があろうとも、積み重ねた時間がそれを埋めるだろう。

教室であつたような醜態を晒すことなどありえないのだ。

だがそれでも、自分が最も拠り所としている力　ISでの戦いで敗北を喫したというのなら。

わたくしはどうするのでしょうか？

それに答える者はいない。

そして、

「ようやくお出ましですわね」

彼女の正面に位置するピットゲートから一機のISが飛び出した。

その機体色は白。

この戦いでその白は己の蒼色に染め上げられるのか、それとも

わたくしのISの蒼色までも塗り潰すのかしら。

酷くくだらない言い回しだ、と彼女は思う。しかし何かを期待している自分がいる。

だがそれを表情に出すことはありえない。

何故なら、

「わたくしは貴族ですもの」

声に出さない呟きと共に、彼女は右手に長銃 スターライトm

kIIIを呼び出す。

伝わる重みが思い出させるのは、これまで行ってきた訓練の映像だ。それが自分に自信を与えてくれる。

そして相手が自分の前で停止した。恐るべき狐がやってきたのだ。

さあ優雅にいこう。たつぷりと余裕を持つて。

故に彼女は口を開く。

こちらの余裕を見せ付けるために。

「あら、逃げずに来ましたのね？」

誇りを賭けた狐狩りが始まろうとしていた。

幕間 2 「直前の内心」

飛び立った白のISの背中を見つめる少女 篠ノ之箒はこの一週間のことを思い返していた。

幼馴染である織斑一夏にお姫様だっこされた彼女は、そのまま窓からエスケープするという極めて珍妙な体験をした。その体験と、

そのような事態に至る原因となった忌まわしいやり取り　通称ア
マゾネス事件の記憶は未だに彼女の脳裏に色濃く滞留していた。

もし記憶を物質化して取り出す術があるのなら、その記憶はコー
ルタールの如くドス黒く、それでいてやたら自己主張の強いピンク
色の明滅を繰り返しながら紫色の瘴気を周辺に撒き散らすことだろ
う。

だが、その後の食堂での青春イベントにより彼女の心中で吹き荒
れた春一番は、その憂いや苛立ちといった感情のことごとくを大陸
の彼方まで吹き飛ばした。

『この世をば　わが世とぞ思ふ　一夏は嫁』と、かの藤原道長が言
ったかどうかは問うも愚かなことだが、彼女のその心だけはリアル
道長状態だった。

もし彼女が犬であったなら、その尾を千切れんばかりに左右に振
りまわし、主の顔を唾液まみれにしていただろう。

そのような思いもよらぬ僥倖に浮かれながら一夏に食べさせても
らった白米を咀嚼する彼女の脳裏にある考えが浮かんだ。

そうだ、一夏にISの訓練をつけてやろう！

それは京都観光キャンペーンのキャッチコピー並に気軽だった。

織斑一夏は一週間後の月曜日にクラス代表を賭けて試合をするこ
とになっていた。

その相手は、彼に指を吸われ舌を這わされるという意味不明な体験をした忌々しき金毛の女狐　セシリア・オルコットである。

彼女はその後のクラス代表を決定する時間に自ら立候補し、他薦された織斑一夏に対して決闘を申し込んだ。

申し込まれた彼は最初は首を傾げていたが、やがて肯定したと言わんばかりにその顔を上下に振った。そして彼はセシリアの指を凝視し、慌てて彼女は指を隠した。

それはさておくこととして、簡単に了承したその様子とは裏腹に、その勝負はそう容易くはない。

何故なら、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生である。

たしかに日常生活において、『あ、こいつちよろい』という雰囲気をももし出している彼女ではあるが、一国の代表候補生にまで昇りつめた人間がそれほど容易い相手であるはずがなかった。

ましてや織斑一夏は未だにIS起動経験が一度だけという初心者も初心者。イチカ・ザ・ヒヨコ・チャンと呼んでも差し支えないような未熟者である。

故に、このまま何ら対策を練らずに当日を迎えては、なぶり者にされて終わってしまう。

(そのようなことになったら……)

と、その春の陽気のように温まった彼女の脳は回り出す。

（あの女狐なら『わたくしの足をお舐めなさい！ 自発的に指を舐めるような犬にはそれがお似合いですわ！』ぐらい言いかねん！）

彼女のセシリアへの評価がよくわかる一文だった。

そして彼女は思わずその光景を思い浮かべ、頬を赤く染める。ただしその想像は主が一夏で犬が彼女だった。

いけない妄想が彼女の思考を痺れさせる。

そのような破廉恥な行為を認められるわけがないだろうが、あの变态め！ わんわん！！

完全な冤罪であった。そして彼女は変だった。

思考領域がR 15を突破しそうになりながらも、彼女は訓練の必要性を強く感じた。

差し迫つての問題は、その旨を一夏にどのようにして切り出すかだ。

口にすれば一言で済むそれは、熟練したツンデレである彼女には

荷が重かった。彼女が素直に自分の考えを伝えられる見込みは皆無だった。

彼女には何かしら、それを切り出しても不自然でない理由が必要だった。

彼女の思考は回転した。一夏に食べさせてもらった塩鮭を口内でオーバーキルしながらも、彼女の思考は加速した。

そして彼女に天恵が降りた。

その案は、筭に言わせてみれば、かの軍師 諸葛孔明の魂魄が天より降りて自分に憑依し献策したのだと自信を持っていえるほどのものだった。

その案とは

私の体調を心配してくれたお礼だと言えばよいのだ！

思いのほか普通だった。

諸葛孔明というよりは、関に迫る連合軍に徒手で真正面から喧嘩を売る呂布並の単純さだった。

仮に孔明だったとしても、彼女の脳内孔明は三顧の礼を待たずし

て劉備の下に転がりこむアクティブさを発揮し、そして五丈原を待たずして蜀の趨勢を決していただろう。悪い方向に。

だが今の筈には、脳内孔明が赤壁を赤く染めながら高笑いする三国一の放火魔の姿が見えていた。ありがとう諸葛先生！

そのような脳内の三国時代は終焉し、彼女は一夏に訓練のことを切り出したのだった。

そして放課後の訓練が始まった。

彼女が向かったのは剣道場。

残り少ない時間で彼に複雑なことを教えこむのは難しい。

彼には専用機が用意されるとのことだが、まだそれは届けられてはならず、どのような武装を持ちどの程度の性能を持つのかも不明である。

専用機ということですら悪いものが来るとは思えないが、はつきりわからないものを頼りに皮算用するのは愚かなことだ。

ならば何をすべきか。何ができるのか。彼女なりに考えた結果が剣道だった。

ISは言うなればパワー・スーツである。特殊な武装もあるが、基本的には人の動作を強化拡張するものである。

剣道は身体能力向上にはなるが、それは兵器としてのISの本分

であるので無意味だ。

しかし、様々な攻撃の避け方を体に染み込ませる。それだけでも僅かに勝率は上がるのではないだろうか。

そう判断したが故の剣道だ。

という理由を、剣道場での訓練を始めて三日目に思いついた筈だった。

初日の筈は、とりあえず久しぶりに同門である幼馴染の実力を見てみよう、というぐらいの考えだった。

一夏は疑問はあったようだが結局筈の勢いに押され、6年越しの同門同士の試合が始まった。

その時の結果から、筈が思うのは一つ。

変態だ。

これに尽きた。

瞬きした次の瞬間には目の前にいる。そんなことは序の口で、し

まいには八艘跳びや壁走り、手裏剣投擲など、お前はどこの忍かと叫びそうになった。

無論これは剣道ではないので、何度も普通に戦わせようと彼女は手をつくした。

だが戦う度に新たな技を繰り出してくる一夏を前に、段々と彼女の武人としての血が騒ぎだし、最終的に彼女の脳裏からISの二文字は消え去っていった。

一人梁山泊を地で行くような手数を持つ一夏との激戦の末に、気がつけば一週間が過ぎ去っていた。

箒にはまったくわけがわからなかった。

これは狐に化かされているのではなからうかと首を捻り、何度も部屋のカレンダーを確認した。

だが幾度彼女が眉に唾をつけようと、日付をあらわす数字に変化はなかった。

そして今にいたる。

か、勝ってこい！ 一夏！！

もはやそれぐらいしか彼女が言えることはなかった。

幕間2 「直前の内心」(後書き)

後はもう戦うだけです。多分。

第8話 「はじめてのIS戦・前半」(前書き)

まじめ。初のIS戦です。セシリアさんががんばります。

いつものような笑いは少ないですので「留意下さい」。

第8話 「はじめてのIS戦・前半」

アリーナ上空。そこで対峙するのは蒼と白のIS。

蒼のIS『ブルーティアーズ』を操縦するセシリア・オルコットは、眼前で静止する相手に口を開く。

「最後のチャンスをおげますわ」

その言葉に、白のISを身にまとう男 織斑一夏は疑問の表情を浮かべる。

それを目で確認しながら、彼女は続ける。その表情には微笑が浮かんでいる。

「この戦い、わたくしが一方的に勝利するのは自明の理ですわ。このまま大衆の面前でなぶりものにされて無様を晒したくないのですしたら、今ここで頭を垂れて謝罪しなさいな。そして」

彼女は一拍置いて、告げる。

「ひざまずいてわたくしの足をお舐めなさい！ 自発的に指を舐めるような狐にはそれがお似合いですわ！」

絶好調だった。箒の彼女への評価はピンポイントに正鵠を得ていた。

犬が狐に変わってはいるが、それは言葉の大意を変えるほどのものではなかった。

そしてそれを眺めるクラスメイトたちも、

「「「きゃあああああ！」「」」」

もはや習慣に成りつつある歓声を上げた。

同時刻、ピット内のモニター越しにその台詞を聞いていた人間の反応は様々だった。

織斑千冬は眉を微妙にひそめ、篠ノ之箒は『やはり』といった表情でセシリアを睨みつけ、我らがタヌキ娘こと山田真耶は顔を赤くして頬に両手をそえながら、いけない妄想の世界へとダイブしていた。

とんだ副担任であつた。

第8話 「はぢめてのIS戦・前半」

ピット内がそのような状況となっていることなど知るよしもない
セシリアは、織斑一夏の無表情を眺めながら思った。

（やはりこの程度で揺らぐような方ではありませんわね）

そう、先ほどの台詞は挑発のつもりだった。言葉通り退くなどとは考えてもいなかったし、挑発を受けて醜態を晒すような甘い狐だとも思えなかった。

（ふふん、それでこそわたくしが相手をするにふさわしいというものですわ）

彼女は口元の笑みを強くする。

と、そんな彼女の耳に、ISが拾った観客席の音声が入る。

「セシリアさんすごい！ 公衆の面前で指の次は足だなんて
そんなアブノーマルなプレイ、とても真似できないよ！」

「さすがセシリアさん！ 海外の人が自分の欲求常時フルオープン
ってというのは本当だったんだ！」

「自信满满だねセシリアさん！ こういうの死亡フラグっていうの
かなー！」

その勝手気侷なクラスメイトたちの言葉にセシリアは頬をひくつかせる。

は、早まりましたのわたくし？ 何かものすごい偏見で人格が
貶められている気がしますわ！ というかわたくしの評価がななめ
上につー！？

後の祭りだった。ぬおお、と悶える彼女への評価は既に手遅れだった。

そして彼女がどれほど先の発言を後悔しようと、クラスメイトた

ちの咲き乱れる会話を止めることなど出来ない。

民衆がゴシップ好きというのはどこでもそうは変わらない。

そのことを忘れ、みすみす獣の群に肉を放り込むようなまねをした己の迂闊さが憎い。

思わず爪を噛もうとするが、ISを展開している状況ではそれもできない。

そして彼女は、

観客席を狙撃とかしたら駄目ですわよね？

思いのほか思いつめていた。だが、さすがにそれは流石に危ないですわね、と自制したが。

ふう、と一息吐くと、自分の心を落ち着かせる。

（まあ、挑発の台詞に本音が少しばかり混ざっていたことは否めませんが……）

彼女はかつての教室でのやり取りを思い出し、僅かに顔を熱くする。

だがそれもすぐに抑えると、完全に思考を戦闘時のものへと切り

替えた。

自分の先ほどの挑発への、相手からの反応はない。

「その無言は否定と受け取りますわよ？ ……残念ですわ。非常に残念ですわ。非常に遺憾ではありますが、それなら」

瞬時に射撃体勢を取り照準。

初弾エネルギーは満ちた。そして彼女は

「狐狩りの開始ですわねっ！」

迷いなく引き金を引いた。

レーザーライフルの独特の発射音と共に、戦いが始まった。

・
・
・

初弾は白のIS　　白式の肩を撃ち抜いた。

胴を狙った照準が直撃しなかったのは、ISのオートガードが作動したためだ。

だが放たれた射撃はISの持つバリアーを僅かだが貫通した。

それによる実体ダメージの痛みに、織斑一夏表情は僅かに歪む。

しかし休む間もなくそこに追撃の弾雨が降り注ぐ。

白式はおぼつかないながらも速さだけはある動きでそれを回避する。それでも、連続する射撃音は白式を確実に追いつめる。

「さあ必死に踊りなさい。わたくしとブルーティアーズの奏でる円舞曲を！」

言う間にも射撃の手は緩めない。飛来する青い光が機体をかすめ、白式は少しずつまるで氷が溶けるかのようにエネルギーを消費していく。

IS戦における勝利条件を簡単に説明するならば、それは相手のシールドエネルギーを0にすることである。

現時点で織斑一夏はISのバリアーのおかげで実体ダメージは軽

微だ。しかし、その代償としてシールドエネルギーは確実にその量を減少させている。

このまま抵抗しなければ、シールドエネルギーはすぐにでも空となり勝敗が決まってしまうだろう。

さあ、どうするのかしら？ 織斑一夏！

射撃の手を緩めることなく考える彼女に対して、白式に変化があった。

近接戦用のブレードを展開したのだ。

（ここで近距離格闘装備？ 射撃装備が搭載されていないのかしら？ 何にせよ）

「中距離射撃型のわたくしを前に近距離格闘装備だなんて……無謀ですわよ！」

白と蒼。彼我の距離は27メートル。こちらに近付けさせぬことは容易い。

その数値を確認しながら、彼女は焦ることなく射撃を繰り返す。

止まぬ音を耳にしながら彼女は思う。

（よくかわしますわね。それに速い……）

眼前の相手のIS稼働はこれで二度目。経験などと口にするのもおこがましい。

だが試合が始まってからかわされたこちらの射撃の回数は少ない。そのため、相手のエネルギー残量の減りは意外にも遅い。

白式の最高速度は恐らくこちらのものよりもうえだ。

彼女はく、とその口元に笑みを浮かべる。面白い、と。

「あなた、誇りなさいな。わたくしのブルー・ティアーズの攻撃を、初見でそうまで耐えてみせた相手は初めてですわよ？」

ですが、と彼女は続ける。

「そろそろ閉幕^{フィナーレ}に致しましょう。このわたくしの 圧倒的勝利で
っ！」

大仰に広げた両手が合図となり、蒼のISは己と同じ名を持つ自立機動兵器を射出する。

キン、という固定が外れる金属音とともに機体を離れるパーツは四つ。それらはまるで意志があるかのように整列すると、次の瞬間には己の敵に向かって一斉に飛び出した。そしてそのうちの二つが射撃を開始する。

その正面からのレーザーを白式は危なげなく回避する。

「ただ銃口が増えただけとは思わないことですわね！」

それを見越してのことか、回避先には既に残り二つが待機しており射撃音を響かせる。

先の回避で勢いのついた白式は身を捻るような動きをすることで直撃を避ける。

だがそれも予想済み。

「まずは左足、いただきますわね」

放たれた一撃は予告通りの部位を撃ち貫く。

「まだですわ！」

さらに右手、右肩、左手、右足と、動きの止まった白式を次々と正確に撃ち抜いていく。

だが彼女は攻撃を止めない。

「まだ、圧倒的勝利には足りませんわ！」

白式は周囲に展開した四つのブルー・ティアーズ ビットによって両手両足の関節部が一斉に撃ち抜かれ、そのまま地上まで落下した。

そして白式のエネルギー残量を示す数値は47。もはや後は無い。

「ここまでですわね」

余裕の笑みとともに地面に降り立った彼女は、倒れた相手に声をかける。

その内心で彼女は織斑一夏という男に感心していた。

慣れぬ機体、頼れる武装はブレードのみ。さらにそこに圧倒的なまでの経験の差だ。

これだけ不利な条件が揃っているながら、正直ここまで粘られるとは予想外だった。

きっと彼は、このまま経験を積んでいけば優秀なIS操縦者となるだろう。実際に相対してそれがはつきりと感じられた。

だが、今日はここで終わりだ。

損傷した部位にスターライトmk?の一撃を叩き込めばそれで終わり。そして損傷部位は全身に存在している。

どこか一箇所にあたれば彼女の勝利となり、彼との因縁も一先ず終了となる。

それをどこか残念に思っている自分に気付き苦笑する。

（ま、まあその健闘をたたえて、足を舐めるのは許してさしあげましょうか。というかこれ以上クラスの獣どもに餌をやるのは危険ですわ……）

彼女は己の未練を誤魔化すようにそんなことを考える。後半は本音だが。

ですがしばらくはわたくしの小間使いとして働いてもらいますわよ？

その光景を想像したのか、口元が弧を描く。

彼女は白式を照準する。上空では四方をブルー・ティアーズが囲み、逃走を防ぐ檻をつくる。

「なかなか楽しかったですわよ狐さん」

だが

「あら、まだ立ちますの？」

その言葉のとおり、眼前のISはゆっくりと立ち上がった。

「まあこちらとしましては、倒れた相手を撃つという行為に気が引

けていましたから、丁度良かったですわ」

圧倒的な余裕。彼女は己の勝利をもはや毛ほども疑わない。

最後に彼女はここまで健闘した相手　織斑一夏の顔を見る。その表情はこんなときでもいつもと変わらぬ無表情。

「こんな状況でも変わりませんのねあなたは。明日からは紅茶の淹れ方でも覚えてもらいましょうか」

彼女は笑いながら、今度こそ引き金を

と、

次の瞬間、白式はその手にあるブレードを彼女に向けて勢い良く投擲した。

「なっ!?!」

そのあまりにも隙の無い動作に彼女の思考は一拍遅れ、回避のタイミングを見逃す。

それでも

「無駄ですわっ!?!」

彼女は手にある長銃を振り、飛来したブレードを弾き飛ばした。

手に衝撃が伝わり、金属音とともにブレードは横にそれる。

見苦しいですね、わたくしが折角感心していたというのに！
やはり首輪も必要かしらっ！！

装備の砲口が僅かに歪んでしまったことに苛立ちを覚えながらも、
すぐさま彼女はブルー・ティアーズに射撃の指示を出すべく思考する。

それに必要なとする時間はコンマ数秒。

しかし、それは叶わなかった。

え？

彼女が瞬きをした次の瞬間、白のISが目の前に出現した。

第8話 「はじめてのIS戦・前半」(後書き)

戦闘シーンは難しいですね。

次回は一夏のターン。

第9話 「はちめてのIS戦・なかごろ」(前書き)

まさかの中編です。かなりアレです。

第9話 「はじめてのIS戦・なかごろ」

それはほんの僅かな時間。迫るブレードを弾き、体勢を立て直そうと思ったその刹那。

彼女 セシリア・オルコットの眼前に白のISが現れた。

「え？」

そして彼女は遅れて気付く。ブルーティアーズがその接近を知らせる警告を表示していることを。

なっ！？ げ、迎撃をつ……！！

だが先程ブレードが飛来したときとは違い、彼女の反応は致命的に遅かった。

そして、

第三アリーナ全体に、硬い金属音が響いた。

第9話 「はじめてのIS戦・なかごろ」

試合が行われているアリーナにあるピット内の一室。そこでは二人の女性と一人の少女がモニターを見つめていた。

「ど、どうしてISであんな動きができるんですかっ!？」

三人のうちの眼鏡をかけた女性 山田真耶は、モニターの映像を見て叫ぶような声を上げた。

彼女はアリーナ内の白いIS 白式が行った非常識な機動を目にし、絶賛混乱中だった。

セシリアの『わたくしの足をお舐めなさい!』という大胆発言の後に始まったこの試合は、彼　織斑一夏が彼女に終始翻弄されるものとなっていた。

だがそれも仕方のないことだ。彼女はイギリスの代表候補生に選ばれるほどの実力の持ち主であり、ISの稼動時間も一般生徒とは比較にならないほどに多い。

そんな彼女に対して、一夏はISの起動が二度目だとは信じられないほどに健闘していた。

いつも何かと自分のことをタヌキよばわりして弄ぶ少年ではあったが、その予想以上の頑張りには胸が熱くなった。

すごいですね、織斑くん……!

そんな彼女は思う。

たとえ今日、彼がセシリアに敗北して足を舐めさせられても、せめて自分だけは優しくしてあげよう、と。

傷ついた生徒のケアも教師の大事な勤めだ。副担任として、自分は少しでもあの少年のためにできることをしてあげよう。

勝敗の見えた試合状況に、彼女はそんなことを強く決意したのだ。
った。

で、でも。

そしてその決意には続きがあった。

も、もしかして織斑くんと放課後二人きりで個人レッスンとかしちゃうのかな？ も、もしそんなことになったら……。

やがて始まる禁断の恋。

お、織斑くんどうしたんですか？ だ、だめですよ織斑くん！
またいつもの悪戯ですか？ 先生をからかつちゃいけませんよ！
え？ これはそういうことじゃない？ そしていつものあの態度は、気になる娘に対して加虐心が湧いて来るという思春期の男子特有の症例？ あと愛してる？ わ、わたしのことをそこまで想ってくれてたんですね？ じ、実はわたしも織斑くんのことがす（略）
わたし、あなたと、出逢えて、幸せ、でし、た…………。

恋というか変だった。それは脳内で己の大往生までの人生設計を一瞬でシミュレートしてしまうほどの大長変 もとい大長編だった。

そんな具合に自身の世界に埋没する彼女は、

『無駄ですわっ！！』

セシリアの叫びと、響き渡る金属音によって引き戻された。

「ふえっ！？」

そして目を向けた画面に映っていたのは、二機のISの距離が一瞬で縮まる光景。

隙を突かれたセシリアほどではなくても、ISを纏わない人間にとって一夏の動きは十分に変態的な速力だった。

そして冒頭に到る。

「ま、まだ一次移行でも無いのに！？ どうしてあんな動きができるんですか！？」
ファースト・シフト

叫ぶように言う彼女の言葉に、これまで黙っていた織斑千冬が口を開く。

「落ち着け山田くん。『最適化』なら済んでいるさ。織斑にとっ

ては、だがな」

「ど、どういうことですか織斑先生？　まだ白式は『初期化』も終わっていないんですよ？」

問われる疑問に、千冬はふ、と笑みを浮かべる。

「白式は『初期化』が終わっていない。だからあれは操縦者を振り回す暴れ馬だった。そのじゃじゃ馬の手綱をたった今あいつが握った、それだけのことだ」

「そ、それって……」

戸惑う真耶を横目にしながら千冬を続けた。

「あいつは寝た子が起きるのが待ちきれなくて、自分の方を先に白式に合わせた。振り回されるだけだった序盤では、あいつの動きはただ速いだけで動作に精密さが足りなかった。しかしここでようやく動きのクセを把握したんだろう。後はご覧の通りだ」

やれやれ、というその様子はどこか楽しげだ。

「ご、ご覧の通りって、そんな簡単に……さっきのあれはイグニッション・ブースト瞬間加速じゃないですか！？」

「いや、あれはそんな上等なものじゃない。身体を効率的に使って行ったただの力技だ。まあ地面に足がついていなければできない」

複雑』な力技だな」

くく、と機嫌良さそうに言う千冬に真耶の頬がひくつく。

「じ、地面に立っていたって、そんなことやるつもりでできるんじゃないですよ!？」

「私はできるぞ」

しれつ、と言われるその宣言に真耶はめまいを覚える。

「お、織斑先生と一般的な人類と一緒にしないでください!！」

「……」

「あ」

思わず出てしまったその一言によって、ピット内の空気が凍った。

「……ほう、山田くん。その発言、単純に解釈すると私がデフォルトで人外認定されているように聞こえるんだが、私の解釈の仕方が悪いのか？ そうなのだろうな、そうなのだろうとも　で、覚悟はいいかね？」

口元を弧にして言う千冬だが、しかしその目は笑っていなかった。
むしろ嗤っていた。

「ま、待ってください！ 誤解です！ わ、私が織斑先生をそんなふうにいるわけ無いじゃないですか！！ た、確かに織斑先生は思考が常識的なわりには手段が非常識極まりないバイオレンスウーマンですけど、でもちゃんと織斑くんのことを理解してあげている家族想いのところもあって」

焦って不穏な弁解を繰り返す彼女は、急速に重くなっていく場の空気に気付けなかった。

そして、

「いつも厳しい態度を取っているけど、実は部屋の机の上に織斑くんの写真を飾っている隠れブラコンかつツンデレで」

「……」

ギシリ、という音がした気がした。

「あ」

気付いた時には手遅れだった。

裁判終了の小槌は打ち鳴らされた。それも一瞬間16連打で。

「あ、あ、ああっ……！？」

「ふふ、怯えることはない山田くん。だが本当に久しぶりだよ、ここまで鶏冠とよがにきたのは 何、すぐに何も感じなくなる」

「ふ、不穩！？ その発言は不穩すぎますよー！？」

顔を青ざめさせながらガタガタと身を震わせる真耶と、口元を弧にしながらゆつくりと近付く千冬。

二人のその様子は、狸と狼の關係に酷似していた。どちらが狸なのかは推して知るべし。

数秒後、刑は執行された。見事なアイアンクローだった。

「い、痛い痛いですー！？ 私の頭部は人体を吊り上げるために掴む場所じゃ、ないですよー！？ というか照れ隠しにしては筋肉使いすぎですよー……！！！」

頭部を襲う痛みに苦しみながらミャーミャー鳴き声をあげる彼女の足は、地面から30cmほど浮いていた。

そして彼女の発言はこの状況から1マイルほど浮いていた。

その言動によって千冬の笑みはさらに濃く、阿修羅も逃げ出すような凄絶なものに変化した。

「ふふ、私はからかわれるのが嫌いだが　虚仮にされるのはそれ以上に大嫌いだ」

千冬は獰猛な笑みとともに、その手の力を一気に強めた。

「アリーヴェデルチ（さよなら）」

その一言とともに、山田真耶はためー！？と絶叫をあげた。

そして舞台はアリーナに戻る。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

甲高い金属音が響き、ブルーティアーズが長銃を取り落とす。

「くうっ!？」

その次の瞬間には彼女の視界がぐるりと反転した。

投げられた、と彼女が思ったと同時に、その思考を衝撃が襲った。

「く、ああっ!？」

バリアのおかげで肉体ダメージこそないが、伝わる衝撃が彼女の視界を揺らす。

む、無茶苦茶しますわね！　こんな馬鹿げたISの操縦ありえませんか!？

彼女は焦る気持ちを抑えながらも、自立機動兵器ブルー・ティアーズ　ビットに指示を送る。

だが、このような状況のために平時の集中を発揮できず、ビットの動きに精彩は無い。

それでも、かまうものか、と彼女は思う。

たしかに先ほどの投擲から続く急接近には驚かされた。

ISの補助によって知覚が強化されている自分に気付かせることなく距離を詰めてきたのだ。非常識も甚だしい。相手は本当に人間なのか疑わしくなってくる。

だが先の投擲により相手に装備は無い。

そして相手は一発当たれば終わり。仮に当たらなくても、こちらが体勢を立て直せる時間を稼げるならばそれで良い。

距離を置いて、今度こそ四方からの一斉射撃を持って終わらせる。

わたくしの勝利は揺るぎませんわ！

しかし彼女の思うようにはいかなかった。

彼女が相対しているのは、常に状況と思考のななめ上をいく狐なのだから。

左右のビットの動きを察知した一夏はふと考える。

先ほどからブルー・ティアーズはセシリアの命令によって動いているようだ。それは逆に言えば、セシリアの命令が無ければ一切動けないのではなからうか？

さらに彼は考える。ブルー・ティアーズを制御している際の彼女は何故か静止していることが多かった。

いかに彼女がビットの扱いに長けていようと、その数は4つ。そ

れらを同方向から差し向けるならまだしも、全て別々の方向から攻撃するためには、やはり多大な集中が必要となるのではないか？

ならば、

試してみる価値はある。

一夏は状況を打開すべく行動を開始した。

彼は眼前で立ち上がろうとしているブルーティアーズの脚部を掴んだ。

「ちょ、ちょっと！？ あなたいったい何をしていますの！！？」

ビットの攻撃で出来る隙を突いて後退しようと考えていたセシリアは、その突然の意味不明な行動に疑問の声をあげる。

一瞬、ビットの動きが遅くなった。

当たりだ！！

「え？ え？」

彼はそのままブルーティーズの両脚部をガシリ、と掴むと、おもむろに

「え？ ひゃっ！？」

ぶん回した。

俗に言うジャイアントスイングである。

「い、いやあああああ————！！！！？」

セシリアは絶叫した。生まれたばかりの赤子もかくや、というほどに絶叫した。

その天を突くような叫びとともに、白式に向かっていた4つのブル・ティアーズは道に迷う子供のようにウロウロし、そして停止した。

彼女の集中が切れたのだ。ぶっちぎりに。

だがそれも仕方のない事だろう。貴族たる彼女は、ジャイアント・スイングをくらうなどという珍奇な経験をしたことは無かった。

彼女の300を超えるIS稼働時間の中でも、このような攻撃を受けたことは一度たりともなかった。

そしてこのような状況でビットを操作するための集中ができるはずがなかった。

ああ……！ どうしてわたくし、母国から遠く離れた極東の地で盛大に振り回されていますの？

彼女は泣きたくなつた。自分の現状の意味がわからなすぎた。

世界が理不尽に満ちていることなど、とつと昔に実感していた。

だが、それにしてもこれはあんまりだろう。

自分はこのような仕打ちを受けるほどの罪を犯したのだろうか？

神はこの世にはいないのか？ 神は死んだのか？

セシリアの精神が遠心運動とともに変な思考回路を回し始めている間にも、一夏は抜群のバランスと平衡感覚を発揮して心地良く彼女を振り回す。

そして、途中で何度かブルーティアーズの背が地面に擦れる。背中から聞こえる音に、セシリアの精神が現実に無理やり引き戻される。

「ちよつ、ちよつとあなた！？ け、けけけ削れてますわ！？ じ、
実体ダメージは無いけど精神的ダメージがあ ！？」

ゴリゴリ音を立てる背部とともに、彼女の心の何かも勢い良く削

られていくが、その回転速度はむしろ増している。

しかも

「「「じゅーいーち！　じゅーにー！　じゅーうさーん！」」」

彼女の耳に観客席から回転数を表す声が聞こえた。実にノリとマナーの良いクラスメイト達であった。

「げ、外道の群ですわ！？　ここは敵地ですよ！？　ここには鬼畜しかいませんのー！？！？」

彼女は豪快に揺れる脳裏でちくしょー！と、絶望した。

だが、物事の全てには終わりがある。

かつて栄華を誇ったローマ帝国も、260年以上も太平の世を続けた江戸幕府も、全ては時の流れの中でその姿を消していった。

ならばウロボロスが象徴する循環性の如きこの円運動にも終わりが来るのは道理である。

ちよつと酔つてきた。

その回転が30回に達するかというあたりで、一夏は彼女を右往左往しているブルー・ティアーズの一つへと向けてタイミングよく手を離れた。

「も、もついやあああああー！？！？」

ぽぽぽーん、と飛んでいった彼女は、静止していたビットを勢いよく跳ね飛ばした。

その間に一夏は、先ほど自分が投擲したブレードが落ちる場所へと距離を詰め、地面に突き立ったそれを掴む。

そして彼は距離のひらいたブルーティアーズへと視線を向けた。

その先では瀕死の虫のようにカクカクと空中に退避する青のISがいた。

な、なんですのこれは……！　うぷっ……なんなんですよー！

まだクラクラする頭を抱えながらも距離をあけることに成功したセシリアは、心の中で絶叫した。

第9話 「はじめてのIS戦・なかごろ」（後書き）

織斑家はプロレス好き。

お気に入り登録が200件を突破。

総合PVは76000、総合ユニークも10000に達していました！

本当に感慨無量です。

読んで下さった皆様、お気に入り登録してくださった皆様、本当にありがとうございます！！

『IS Ichika the Strange』を今後もどうか
よろしく願います。

第10話 「はじめてのIS戦・後半」(前書き)

ようやくクラス代表戦ラストです。ふまじめとまじめ

少し長くなりました。

毎回7〜8Pぐらい書いている方もいらっしゃると思いますが、ちゃんとまとめることができていて感心してしまいます。

第10話 「はじめてのIS戦・後半」

アリーナのピット内の一室。そこに彼女 篠ノ之箒はいた。

隣で繰り広げられる教員同士の一方向コミュニケーションを無視し、彼女はアリーナを映すモニターを見つめていた。

画面に映る幼馴染 織斑一夏動きを目で追う彼女の表情はどこか誇らしげだ。

あの一週間は無駄ではなかったのだな、一夏……！

彼女の心は思わぬ試合の思わぬ状況に、喜び震えていた。

第10話 「はじめてのIS戦・後編」

彼女がそうなるのも仕方のないことだった。

試合が始まってからというもの、彼女はこの一週間のことを思い返しては後悔していたのだから。

彼女を悔やませること　それは自ら放課後の訓練を切り出しておきながら、剣道場での対人戦に全ての時間を費やしてしまったことだった。

正直なところ篤は、彼と一緒に時間を過ごせるという事実には浮かれていた。それは否定しようがない事実だった。

六年の時を経て、夢にまで見た幼馴染との再会を果たした彼女の心は、乾きを癒す水を求めるかのように一夏との会話を、そして共に過ごす時間を求めた。

その結果が放課後のISの訓練だった。

無論、セシリアが勝利することで一夏に変態的な要求をする（と篤は信じていた）のを防ぐという意図もあった。

だが一番の理由は、『少しでも多く、一夏との時間を』という少女らしい、年齢相応の願いからだった。

故に彼女は、脳内孔明の力を借りてもっともらしい理由を考えた。そして持てる勇気を振り絞り、そのことを一夏へと切り出し、ついに実現に至った。

そんな彼女が喜び浮かれることを誰が責められるだろうか？

ただ、彼女とて無責任な人間ではない。

訓練の開始直前まで、短い時間をどのように使って一夏に訓練を施すかを真剣に考えていたのだ。

剣道の腕を見えるということに関しては、彼女の私的な理由が多少は混ざっていたことは否定できない。

だがそれ以外にも彼女は、訓練機を用いての実際の訓練や、対戦相手であるセシリア・オルコットの情報を集めるといった単純だが至極真つ当な案も考えていた。

しかしISの貸し出し申請を出しても、その許可がすぐに降りるわけではない。

故に、とりあえず許可が下りるまでは情報収集と、それとISを扱う一夏の体が昔より鈍っていないか、久しぶりに腕を……と剣道場へと向かったのだった。

それが愉快的悲劇の始まりだということも知らずに。

そして、剣道場で一夏が一瞬のうちに距離を詰めるという変態機動を行った。

その時から何かが傾き始めていたのだ。

一夏はその速さに様々な武術を組合わせて彼女を苦しめた。

箒が彼の剣を受ければ、次のタイミングにはカポエイラの流れを組む流麗な蹴足が頭部を襲った。

逆に彼女が打ち込めば素手でいなされ、そこを合気の業を持って投げ飛ばされた。

かと思えば遠距離から手裏剣・苦無・太刀魚といった投具が彼女を襲うなど、もう滅茶苦茶であった。

だが、何とかそれを手の得物で弾いて凌いでいた彼女だったが、いきなり飛来した10円玉が竹刀を真つ二つにした時にはさすがに顔を青くした。

その業は大陸に伝わる暗器術の『羅漢銭』の応用であった。

い、一夏はこんな技まで ベッド下にあったブリキ箱に、
10円玉が大量に入っていたのはこのためか……！

何故に彼女が同室となつて間もない一夏のベッド下の事情を把握していたのか、理由は定かではない。

それはさておくこととして、彼女がまともに剣道をしろと抗議しても彼は聞かなかった。

それどころか彼は、

『既に我が剣に道は無し。剣を手にしたその瞬間より、この身は既

に外道に堕ちた。それでもなお、道を強いるというならば己が武威をもって俺に道を示してみせろ！」

と、それっぽく聞こえなくもないことを口にした。

まぎれもなく彼が即興で考えた狂言であつた。

しかし筈は乗ってしまつた。彼女は純粹すぎた。

武を極めんとする彼女の血が滾つてしまつたのだ。

『よかろう……その身が既に鬼畜生と成り下がつたというならば、我が剣の冴えをもって叩き伏せ、再びお前を道の上へと戻してみせよう　　そしてお前を嫁にしてみせよう！！』

と、真に威勢の良い漢らしい台詞を音声付で返した。どさくさにまぎれて煩惱が発露していたが。

恐らくアドレナリンが分泌されすぎて、思考系を焼いてしまつたのだらう

彼女達二人を見学に来ていたクラスメイト達からは当然のように

歓声が上がった。

『さ、さすが篠ノ之さん！ 力尽くで男を攫って嫁にしようだなんて、さすが1組のアマゾネス！』

『お、男だね！』

『煩惱ダダ漏れだねっ！！』

『ていうかそれってプロポーズだよね！』

と、その大胆発言を大いに絶賛しつつ人格を貶めていたが、眼前の一夏に集中する彼女の耳には入らなかった。幸いにも。

なお、その時の『嫁』という言葉が、後に来日するドイツ人に思わぬ影響を与えることをその時の彼女は知らなかった。

それはさておき、それからあつという間だった。

彼女は得物を竹刀から木刀へ変え、阿修羅の如く戦った。

たとえ何度弾き飛ばされ、得物を折られ、膝をつき、魚にまみれても、彼女は最後まで諦めなかった。

そんな彼女を見て、一夏も本気でその業を振るった。

そしてついに最後の日、彼女の剣は一夏の投擲した手裏剣を弾き、苦無を空中で四分割し、太刀魚を三枚におろした。

さらに飛来する10円玉の軌道を剣の風圧で曲げ、全て床に直立させるという偉業をも彼女は成し遂げた。

それを見届けた一夏は、これまでの日々で初めてとなる笑顔を見せ、心からその成長を喜んだ。

初めは倒すべき敵として、だが剣を交わす時間の中でいつのまにか師に向けるような感情を抱き始めていた箒は、その笑顔を見て胸を熱くし、その瞳には涙が浮かんだ。

わ、わたしはっ、っ、強くなることができたのだなっ！！この、っく！一週間は無駄では無かったのだな！！

彼女は達成感に包まれていた。

そうして喜びながらも涙を流すまいとする彼女を、一夏は優しく抱きしめ、頭を撫でた。

そこで箒は耐えることを止めた。

その日の夜、部屋へ戻りシャワーで身を清めた彼女の目に、ふとカレンダーが目に入った。

彼女は何気なく今日の日付を見た。そして何度も何度も見直した。

そして彼女はうんうん、と頷き、一息吸って言った。

『IS関係無いだろコレは!?!』

一週間越しのノリツツコミだった。

シャワー室を使用していた一夏が頭をバスタオルで拭きながら出てきたとき、彼女は慌ててその事を一夏に告げた。

だが彼は、

『大丈夫。心配するな、何とかなる』

と、かの一休宗純が弟子達に遺した手紙の内容ようなことを言うて気にしなかった。

だが、当然ながら篤の心は晴れなかった。

そして序盤のセシリアによる一方的な攻勢である。

自分が原因で一夏は負けてしまいかもしれない、と思わずにはいられなかった。

己の武人としての血が憎らしい！　これが力を求めるものの哀れな末路なのか……！

と、彼女は拳を握り嘆いた。

しかし、その硬い拳は解かれることになる。

ブルー・ティアーズの一斉攻撃によって白式が地に落ち、『もう終わりか』と、彼女が目を背けそうになった時に変化が現れた。

ゆらりと立ち上がった一夏がブレードを投擲し、そして一気にセシリアとの距離をつめたのだ。

それを見た瞬間、彼女の心が震えた。

その動きは忘れるはずも無い。この一週間毎日のように剣道場で目にした変態機動だった。

その恐ろしさを彼女は身をもって経験していた。

そしてそこから一夏の逆転が始まった。

銃を蹴り飛ばし、合気をもってブルーティーズを地に叩きつけ、円運動をもって放り投げた。

一夏は絶体絶命かと思われた窮地を脱したのだ。

一夏が一つ業を繰り出すごとに彼女の心は浮上した。パフォーマンスを見て喜ぶ親父のようにも聞こえるが、そうではない。

その動きのどれもが剣道場で目にしたものだったからだ。

彼女の一週間は期せずして有益な訓練となっていたのだ。

あの『大丈夫』は、嘘ではなかったのだな一夏！ これも、諸葛先生（脳内）の遺した策か……！

と、若干斜め上の感想を抱いた彼女の脳裏では、軍勢をもって成都の地を包囲した諸葛孔明が笑顔でサムズアップしていた。

ともかくにも彼女はその後ろめたさを払拭するに至ったのだ

そして彼女は再び思う。

勝つてこい、一夏！！

それは後腐れの無くなった筈の心からの応援だった。

空中のブルーティアーズを見上げながら、織斑一夏は自分が戦う相手の行動について考えていた。

勝利まであと一歩というところで、彼女 セシリア・オルコツトは過ちを犯した。

飛来するブレードなどISのシールドバリアが防いでくれる。仮にそれがバリアを貫通したとしても、ここまで一度も攻撃を受けずにいるブルーティアーズのエネルギー量を一気に0にすることなどできるはずがない。

ならば多少の痛みは走るかもしれないが、彼女はブレードを無視して持てる全ての火力を持ってこちらを撃滅しておくべきだった。

しかし彼女はブレードを弾く行動を取った。

彼女にそのような選択をさせたのは、目に映るブレードに対して働いた防衛本能だ。

冷静に考えれば許容範囲であるとはわかるはずだが、突然飛来した回避不能のブレードを見て、体が反応してしまったのだろう。

それが無くても、あえてダメージを受けてまで撃つ理由が彼女には無かっただろうな。

そうでなければ困る、と彼は思う。そのような行動を取るように仕向けたのは他ならぬ彼自身だったからだ。

あれはセシリアの油断を読み取ったうえでの奇襲だった。

結果としてそれは成功し、自分は窮地を脱するに至った。

そしてここからだ、と彼は思う。

長銃は無いが、四つの自立機動兵器は健在だ。

手数ではまだまだこちらが不利。それに他に隠し玉を残している可能性もある。

そして何より、

もう油断はしてもらえないだろうな。

序盤の一方的な試合運びによって、セシリアは完全に慢心していた。そして自分はそのについて危機を逃れた。

そして回した。

だが彼女とて愚か者ではないだろう。このまま同じ轍を踏むとは考えられない。

化かす場面はもう過ぎた。ここからは本当に技量の戦いだ。

そしてこちらは一発でも当たれば終わりなうえに、得物は手中のブレード一つ。

しかし、ようやく機体のクセがつかめたのも事実だ。

もはやセシリアの攻撃が実姉の拳と同等の速度でも無い限りは当たる気がしない。

実姉と相對することと比べれば、このような戦いは飯事（実食）に等しい。

彼は息を一度吐いた。

決めてこよう、この勝敗を。

そして彼は向かう。倒すべき敵へと。

・
・
・
・
・

・
・
・

ど、どうしてこうもうまくいきませんの!?

セシリア・オルコットは混乱していた。

既に勝敗は決したと思っていた。だが奇襲によって脱出された。

そして体勢を立て直すべくブルー・ティアーズを差し向けた。その矢先に回された。

それはもう豪快に。そして投げ飛ばされた。

IS戦のセオリー無視にも程がありますわ!!

心中で文句を言うがどうにもならない。それは彼女自身分かっていることだった。

自身の慢心が好機を逃す原因となったことも、彼女は理解していた。

彼女は失敗から学ばぬ愚劣ではない。そして学ぶためには自分の過ちをしっかりと把握し、飲み込む必要がある。

彼女は溜息を吐きつつ、改めて相手である織斑一夏という少年について考えた。

砂漠の狐などと思いましたが、あながち間違いではありませんわね……！

『砂漠の狐』

かつて世界中を巻き込んだ大戦があった。

その中で、凄まじい物量を盾に押し進む連合軍を相手にした男がいた。

連合軍の戦術の杜撰な部分を突き、高機動戦と度肝を抜く戦術で引つ掻き回した英雄。

そして貴族ではないが、中産階級出身者で初めて陸軍元帥となった人物。

考えれば考えるほどに、今の自分達の状況を当てはめてしまう。

そして自分が相手取る狐は、今こちらに向かってきている。

しかも、迎撃する4機のブルー・ティアーズの攻撃は、その悉くが外れ、逆に撃破されている。

相手の動きが試合序盤とは明らかに違いますわ……！

一つ、二つ、とビットからの反応が消えていく。軌道が完全に読まれているのだ。

その事実にはセシリアは穏やかではられない。

「そ、その動きは何ですの！ 序盤は手加減していたとでもいうの！？」

思わず高まる声に、またもビットを両断した一夏が簡潔に返答する。

「慣れた」

「慣れた！？」

身もフタも無く、しれっと言われたその答えに彼女はめまいに襲

われる。

「な、慣れただけでそんな動きが……！？ あ、ISはそんな単純なものではありませんわー！？」

うわーん！ と頭を抱えて絶叫してしまうも、そこで彼女はハッ！ となる。

罨だ！ またしても！！

かつて至ったひらめきだった。

戦闘の緊張感で高揚した彼女の思考は一気に加速する。

落ち着けセシリア・オルコット。

これは自分を混乱させて、正常な判断をできなくするための目の前の狐が弄した罨だ。

この男の言動や行動に付き合えばろくでもないことになるのは、もう十分に体感したではないか。

その結果、先ほど放り投げられた。

このまま冷静さを欠いては、また同じことの繰り返しになる。

それに『慣れた』などととばけたことを言っているが、それとて本当かどうか怪しいものだ。

実際はこちらを油断させ、そして最後の最高のタイミングで嘲笑うかのように鼻っ面を殴りつけるつもりだったのだろう。

恐ろしい狐ですわ……！

思わず彼女は身震いする。よもや敵がこれほど執拗に策を仕掛けてくるとは思わなかった。

ですが

彼女はその熱を理性で冷却する。

こちらとてみすみすやられるつもりはない。恐らく相手はこちらの装備が残っていないと思っっているだろう。

しかしこちらにはあと二つ、虎の子が残っている。

そちらが奇襲を持ってこちらを翻弄するというのなら、こちらも最高のタイミングの奇襲で勝負を決めよう。

そして今度こそ、最後の最後で勝利する。敵が得意とする奇襲でもって。

彼女の取るべき策は決まった。

彼女はその手に接近戦用装備『インターセプター』を呼び出す。

射撃装備と違って呼び出しに時間のかかるそれを展開した頃には、四つ目のビットが両断された。

それを見て彼女は勝負に出る。

手に構えたショートブレードを白式に向け、告げる。

「さあおいでなさい！ 今度こそ決着をつけますわ！！」

勇猛果敢な騎士のようなその態度に、一夏は一瞬判断を迷った。

だが、現時点で相手の装備は近接格闘装備のみ。他に何か隠していたとしても、展開にかかる僅かな時間さえあれば、体勢を整え対応できる。

ならばいける！

彼の考えがまとまると同時に白式は加速し、突撃した。

蒼と白、彼我の距離が一気に縮まっていくな。

そして、

「フェイクにかかりましたわね」

笑みとともに、相手に向けるのは腰部アーマーにある2つのブル
ー・ティアーズ。そこから発射されるのは、これまでのものとは違
う弾道型。

「……！」

ここで一夏の顔に初めて焦りの表情が浮かんだ。だが遅い。

「ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

それは最初から機体に装備してあつた。一夏が考えたような、量子化しているものを展開するための時間などあるわけがない。

くっ！？

そして、爆音がアリーナに響き渡つた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「一夏！？」

モニターの様子を見ていた箒は思わず声を上げた。

直前まで、序盤とは逆となる一夏の猛攻が続いていた。

そしてセシリアまでの距離はあとわずか、というところまで来ていた。

四機のビットももはや残っていなかった。

一夏の勝ちだ……！

彼女はそう思った。

だがそれはセシリアの策だった。

一夏が勝負を決めるべく加速し、接近したタイミングに合わせて隠していたミサイルを放ったのだ。

勢いのついた白式は回避することもできず、一夏は爆発にのまれた。

爆発直前の白式のエネルギー残量を考えて、箒の思考は暗くなる。

先ほどまで隣じゃれあっていた教員二名も静かになっている。

セシリア・オルコットは驚愕していた。

原因はブルー・ティアーズを放った相手 織斑一夏だった。

今度こそ、今度こそ勝敗は決したと思った。

エネルギー残量を考えればもう復帰は絶望的だろう。

彼女はほう、と安堵の息を吐いた。

よ、ようやく終わりましたのね……。

だが、それは何かの旗を突き立てる行為だった。

突然、前方に広がる黒煙を切り裂いて出てくる影があったのだ。

そしてその機体は、

え？

滑らかな曲線を描く装甲を持った、美しい純白のIS。

それは明らかに変化していた。

そして冒頭の台詞である。

「ば、化けましたわっ!？」

彼女の混乱は凄まじいものだった。倒したと思った相手がまだ健在で、なおかつ機体の色や形状が変わっていたのだ。

もう彼女の心の許容量は一日の限界値に達していた。

も、もう今日は何が起こっても驚きませんわ! ええ、驚きませんとも!!

脳内で密かにそのような決意をしながらも、彼女は相手の状態を確認する。

そして彼女の頬はさらに引きつった。

「ま、まさか一次移行!？」ファースト・シフト あ、あなた、初期設定の機体であんな動きをしてましたの!？ へ、変態! 変態ですわ!？」

先にした決意は数秒持たずに粉塵と化した。

そして彼女は泣きたくなかった。何故こうも眼前の男は奇襲ばかりかけるのか、と。

実は自分はずっと彼に踊らされていたのではなからうか？

実力を隠すどころかそれ以前の状態で戦っていたのだ。

しかもその状態の相手に振り回されていたのだ。

このうえ一次移行などしたら、自分など歯牙にも掛けなくなるのではないだろうか。

そして二度目の稼働でこうならば、300もの時間を費やしてきた自分は一体何なのか。

セシリアは一夏の実力の底が全く見えなかった。

彼女は一夏の行動の全てが自分を騙そうとしているように思えてきて、彼に恐怖した。

そんな彼女の心境など知るよしもない一夏は、自分の機体の状態を把握し密かに驚いていた。

膨大な情報が流れ込み、そして先ほどまでには無かった『しつくり』した感覚が彼の体を包む。

それは、暴れ馬であった白式が、ようやく自分の専用機となったことを意味していた。

もはや手綱を握るまでもなく人馬一体となっている。

そして彼はもう一つの変化に気付く。

先ほどまで無銘であった近接ブレードがその形状を変え、さらに銘が追加されていたのだ。

「雪片・弐型？」

太刀に近い形状のそれは、かつて実姉が振るい有象無象を切り捨てた専用IS装備と同じ名称を与えられている。

そのことを確認した一夏は言う。

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

この試合が始まってから、自分が窮地を抜けるための鍵となり、また唯一の装備として振るってきた。

そのブレードが弐型というならば、それは姉が振るった雪片があったからこそその存在だ。

生真面目な性格で、少しふざけただけで拳が飛んでくる実姉だ。
だが、自分が今まで生きてこられたのもその千冬姉あつてのことだ。

まだまだ、敵わないな。

彼は口元に笑みを浮かべる。

「しかもお得なことに、千冬姉は世界で最強だ」

「……は？ あなたは何を言って」

そのセシリアの台詞を遮って言う。

「つまり、織斑家のちーちゃんは世界最高かつ最強のお姉ちゃんだ。
おまけに隠れブラコン 倍プッシュだ」

「ほ、本当にあなたは何を言ってますの！？」

何故か怯え始めたセシリアの言動を心地良く無視し、一瞬見えた
気がした死兆星も無視して一夏は思う。

ならばこれ以上、未熟を晒して恥をかかせるわけにはいかない。

最高最強の織斑千冬の弟たる自分が無様を晒しては、あの厳しくも優しい姉に申し訳が立たない。

ずっと俺が守る、なんて傲慢なことは言わない。だが守られるだけなのも御免だ。

そう、並び立つ。

厳しい態度の千冬姉が、内心では自分をとて大切に思っていることはわかってる。

そして千冬姉もこちらが自分のことを大切に思っていることはわかっているだろう。

故に、現時点で自分達は最高に噛合った最良の家族だ。

だがそれだけでは足りない。家庭内だけではまだ不満だ。

「守り、守られ、家族とはどこまでも対等でいたいんでね」

ISに関わる者としても

かつて世界最強と呼ばれ、現役を退いてなお衰えぬ織斑千冬と肩を並べる。

千冬姉と並び立つために、とりあえず自分も世界最強となってみるのも一つの手かもしれない。

だが、自分には千冬姉のような戦い方はできない。だから自分なりの方法で頂点を目指すことになるだろう。

いずれにせよ、ここでもたつくようでは名すら守れない。

彼は思考を引き締めると、雪片・式型を構えた。

「セシリア・オルコット」

「え？」

彼女は突然呼ばれた自分の名前に怪訝な表情を返す。

その表情を確認し、一夏は続ける。

「その首 もらいうける!!」

「そ、その発言は不穏すぎますわ!?!」

突然の死刑宣告にセシリアは盛大に怯え、慌て始めるが、一夏は気にすることなく最大加速する。

「こ、これが噂に聞いた日本の伝統文化、『KIRISUTE・御免』ですの!?!」

すさまじい文化の違いにカルチャーショックを受けた彼女は、その顔を青ざめさせる。

「じよ、冗談ではありませんわ!!」

彼女は迫り来る白式に弾道型ブルー・ティアーズを発射した。

だがそれは既に見切られており、すれ違いざまの雪片の閃きによって一瞬にして両断された。

遅れて爆音が響き、そして白式がブルーティアーズに迫る。

「くっ！ でもまだっ！！」

セシリアはブルーティアーズを加速させる。

彼女にも意地がある。このまますすみず敗北を迎えることなどできるはずがなかった。

武装は扱い慣れないショートブレードだけだが、それでも一矢報いてみせると最後に意気込んだ。

「泣いても笑っても これで最後ですわ！！」

彼女は気合と共に、白式にインターセプターを振り抜いた。

そして二刀が交差する

かに思われた。

一夏は飛来するミサイルを雪片で切り捨てた後、あることに気付いた。

！ エネルギーがつ！？

それは己が振るう武器の特性『バリアー無効化』。その名のとおり相手のバリアーを無効化して直接ダメージを与える強力な能力だが、その反面自分のシールドエネルギーを大量に消費する諸刃の剣となる。

それを知った一夏の判断は一瞬だった。

雪片を再び量子化させたのだ。

つまり、今の白式の手には雪片は握られていない。

「え、ええっ!？」

そして一夏はセシリアの大振りな一撃を、その場で体を横に回転させながらずらすことで回避した。

その結果、セシリアは盛大に空振りした。

「な、なんっ、なんですのー!？」

一夏は回転で勢いを殺し、逆に勢い余ったセシリアは体勢を崩してその背を晒してしまう。

そして一瞬、セシリアと一夏の視線が交差する。

「あ」

その時のセシリアは完全に目を白黒させていた。

そのうえ、

あ、隙だらけ……。

次の瞬間、再び雪片を展開した一夏は、今度こそ全力で、しかしエネルギーが無くなる前に迅速に一刀を振るった。

「さ、最後の最後まで奇襲ですの——！！?!?!?」

もはや言葉は無力だった。次の瞬間、彼女の体を衝撃が襲った。

そして、

『試合終了。勝者 織斑一夏』

ブザーが鳴り、勝者が告げられると同時に、アリーナに歓声が響いた。

それはセシリア的にはあまりにも悲しい結末だった。

第10話 「はじめてのIS戦・後半」 (後書き)

最後までこんな感じとなりました。

そして姉のことになると饒舌となる一夏はシスコンです。

幕間3 「戦いの残響」(前書き)

更新が遅くなり申し訳ありません。

そしてその間に、お気に入り登録が300件を突破しておりました。

本当にありがとうございました。

なお、今回の話はふまじめ、のちR15となっております。多分。
念のため。

幕間3 「戦いの残響」

1年1組のクラス代表を決定するための試合は、織斑一夏の勝利によって幕が下ろされた。

敗北したセシリア・オルコットはぶつぶつと何事かを呟きながら、幽鬼の如くゆらゆらとピット内に姿を消した。

そして、勝利した織斑一夏は彼女とは反対側のピット内へと戻った。

IS稼動二回目にしてイギリス国家代表候補生に勝利するという快挙を成し遂げた彼は、ピット内で試合を見守っていた人物によって出迎えられた。

そう

アイアンクローで。

幕間3 「戦いの残響」

「随分と持ち上げてくれたものだ、とか、あの最後はどうなんだ、とか、言いたいことは色々あるが、とりあえずお前がどうしようもない大馬鹿野郎だということを再認識したよ織斑」

と、片腕で一夏の頭部を握りつぶさんばかりに鷲掴みにしているのは、彼の実姉であり担任、そして先の戦いの中でブラコンであると公言された女性 織斑千冬である。

実弟に容赦の無いアイアンクローを極める彼女の心中は、その能

面のような表情とは裏腹に、怒りで激しく燃え上がっていた。

「ちーちゃんだの、隠れブラコンだのと散々好き勝手なことを言うてくれたじゃないか、ええ？」

『ええ？』のあたりで、その心情を表すかのように加える握力が上昇し、そして一夏の身体が一瞬びつくと跳ねた。

だがそれで何かの臨界点に達してしまったのか、彼はそれ以降、力無く手をぶら下げたまま反応が無くなった。

明らかにヤバイその状況に、周りにいた山田真耶と篠ノ之箒は慌てて止めに入る。

「ち、千冬さん、何卒御慈悲を！ こ、このままでは一夏の頭部に真っ赤な死に花が咲いてしまいます！？ 夏休みの絵日記に描いたスイカみたいなことになってしまいますっ！！？」

必死の形相で慈悲を乞う彼女だが、修羅と化した千冬はその言葉に耳を貸す様子はない。

そこで箒の横にいる真耶が、震えながらも前に出た。

「せ、先生！ 織斑くんがかなり危険な感じで痙攣してますよっ！
？」 とうかその愛情表現は激しすぎます物理で

次の瞬間、彼女はずるりと伸びてきた手に顔面を力強く鷲掴みされた。

その突然の強襲に箒が『ひっ』と小さな悲鳴を挙げたすぐ後に、真耶は顔を掴まれたままホラー映画の如く箒の視界から姿を消した。

そして、

「い、いやぁー！？ に、二度目ですか！？ 二度目なんですか
ー！？」

彼女の頭上の方から悲鳴が聞こえた。

千冬の左手によって顔面を固定された真耶は、本日二度目となる嫌な浮遊感に足をばたつかせながら恐怖した。

「ふふ、困ったものだな山田くん。どうやら一度だけでは懲りなかったようだな。なに、安心したまえ。左手は私の利き腕ではないの
でな」

彼女はにこやかな笑みを浮かべ、告げた。

「加減が一切できん」

女神の如き微笑を浮かべる千冬の額には、見事な青筋が浮かんでいた。

それを確認した真耶は、顔を青褪めさせながら、回想した。

彼女の心中で思い返されるのは、数日前。

己の顔面に掌をジャストフィットさせている千冬と、二人で並んで貰い物の缶コーヒーを飲んでいた時のことだった。

甘みの強いコーヒーを少しずつなめるように飲んでいた真耶の横で、千冬は微糖のコーヒーを豪快に呷った。

やたら男らしいその動作で缶の中身を空にした彼女は、その缶の側面にプリントされた文字を矯めつ眇めつ眺めた後、おもむろにそれを

握り潰した。

べこり、と嫌な音がした。

何ら意識せずにいる千冬の手の中で、空缶は深海に放り込まれたかのように瞬く間にその面積を減じていき、やがて、実を食べつくされたリンゴの芯のような状態になった。

真耶は、空缶が鈍い音をたてながら無残な姿へと変貌していく様子を震えながら見ていた。

その鈍い音が、彼女には空缶が上げるくぐもった悲鳴のように聞こえてならなかった。

そして、その時の手は確か

ひ、左手でしたよアレはー！！？ 『山田真耶「頭部なんて飾りですよ」仕様』爆誕の危機ですかコレはっ！？

ひー！ と悲鳴をあげる彼女の脳裏には、己の頭部が千冬によって破砕される映像がやたら鮮明に流れた。

それと同時に、これまで自身が経験してきた出来事の数々がフラッシュバックした。

生命の危機に瀕した際に、その者の一生の記憶をリピートするというそれは、わりと深刻に走馬灯だった。

「ぜ、全然安心できませんよそれはー！？ 脳髄グシャーしちゃいますよ私！？ とういかツンとデレのバランスがおかしいで

痛あーっ！？ 痛い痛い、痛いですってばあー！ーっ！！？」

お約束の如く軽やかなステップで地雷を踏んだ真耶の顔に、容赦無く千冬の五指が食い込んだ。

そして、

「腐ったリンゴは芯から潰さなければ

なっ！」

千冬の気合と共に腕の力が一気に強められた。

「ふああっ！？ んにゃー！ー！！？」

万力の如く締め付けられる頭部に激痛が走り、タヌキ娘は珍妙な悲鳴を上げた。

そうして彼女は、しばらくの間その手足をバタつかせてもがいていたが、やがてそれも花が萎むようにゆっくりと減衰していき、そして動かなくなった。

オチたのだ。色々な意味で。

そして人間の意識がオチる様をまざまざと見せ付けられた篤は、小犬のように震えながらも、空気の読めない副担任の勇氣ある言動を思い返し、黙祷した。

だがそれは、どちらかといえば勇氣ではなく蛮勇だった。

ついでに、一夏を掴む腕もとばっちりで締められ、彼はその意識

を闇の奥底へと完全に沈めた。

もはや、勝利者はどこにもいなかった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

IS学園1年生寮の一室。その中のシャワー室には、水が床を打つ音が響いている。

そこで身を清めているのは、金の長髪の少女 セシリア・オルコットだ。

シャワーノズルから絶え間なく噴き出すお湯は、彼女の肌の上を滑り、その艶かしい肢体を濡らしていく。

シャワーを浴びながら、彼女はぼんやりと思う。

負けてしまいましたのね、わたくし……。

そう、彼女は敗北した。それもISの試合でだ。

それは自分がこれまで拠り所としていたものが揺るがされたことを意味した。

彼女は虚を突く行動に翻弄され、突飛な言動に惑わされ、その最後の最後まで相手に振り回され敗北した。

その相手は、ISの稼動が二度目という素人の 男。

常に自分の勝利を信じ、能力を高めてきた彼女にとって、あの試合の何もかもが耐え難い屈辱の記憶として記憶にこびりつき、無様な自身を激しく責め立てる。

その筈だった。

しかし、意外なことに彼女の心は平静だ。

否、平静というには語弊がある。彼女はその胸の内に、小さな揺らぎのようなものを感じていた。

それは彼女がこれまでに感じたことの無い種類の熱を帯びており、彼女の心中に波紋が広がるように静かに、ゆっくりと浸透していた。

そして彼女を穏やかに、心地良い気分にした。

自分のそのような不思議な感情に気付いた彼女は、戸惑った。

織斑、一夏……。

恐る恐る思い浮かべた名前は、彼女を敗北させた男のもの。

セシリアにとっての彼は、常に奇行を繰り返す変人だ。しかし、二度目のIS稼動にも関わらず自分に勝利した恐るべき狐でもあった。

そこでふと、彼女は先ほどの試合のことを思い返す。

試合の終盤 白式が一次移行した場面で、彼女の心は折れかけていた。

自身が相手を押していた序盤とは打って変わり、彼女は一夏の奇襲に振り回されていた。その状況はエリート意識の強い彼女にとっては苛立ちをつのらせるものだった。

彼我の経験の差は圧倒的であり、彼女は自身の敗北など考えてもいなかったのだ。

それが、押されている。

それも素人の、男にだ。

それだけでも許せないというのに、一夏は彼女に追い討ちをかけた。

ファースト・シフト
一次移行である。

成れぬ設定の、慣れぬ機体。経験云々を口にする以前の問題だった。

そんな機体を操縦していた相手に、セシリアは振り回され、あまつさえ押されていたのだ。

それが判った時点で彼女の思考にある考えが浮かぶ。

自分は弄ばれているのではないのか？

捕らえた獲物をすぐに殺さずに弄ぶ獣のように、彼は自身の実力を隠し、大言を吐く自分を心中で嘲り笑っていたのではないか？

彼女はそんな嫌な考えを抱かずにはおれなかった。

相手が初期設定であそこまで戦っていたというのなら、本当の実力はどれほどのものなのか。

彼女は実力の底が見えない一夏に恐怖した。

己が寄る辺としてきたISの実力と、自信を裏打ちしていた起動時間が、突然大したことのないように思えてきた。

奇襲を繰り返す相手の行動を思い返した彼女は、彼の無機質な視線が隙あらば虚を突こうと自身を伺っているように感じられた。

その一挙一動が、何かの奇襲の前触れではないかと怯えた。

その無表情が、自分を騙すための思惑を隠すための仮面に思えて仕方が無かった。

考えれば考えるほどに、焦りは重なり、恐怖はつのり、正常な思考が遠のいていった。

怖い。

彼女の精神は、試合の決着を待つことなく自壊しつつあった。

際限無くどこまでも沈んでいくセシリアの思考は、しかし、次の瞬間停止する。

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ』

一夏がその言葉を口にしたとき、彼女はその言葉の意図するところがまったく理解できなかった。

その時、その言葉の後に続けた自身の台詞は、彼女が心底思った本音だった。

そんな心境を知るよしもない相手は、さらに言葉を重ねる。

『つまり、織斑家のちーちゃんは世界最高かつ最強のお姉ちゃんだ。おまけに隠れブラコン　倍プッシュだ』

この時点で彼女の思考は混乱した。

相手が実は地球人の皮を被った宇宙人なのではないかと思っ
てしまっただけに、その台詞はわけがわからなかった。

だが、そんな彼女の心境は一転する。

それも、他ならぬ織斑一夏の言葉によって。

『守り、守られ、家族とはどこまでも対等でいたいんでね』

え……？

それは積み重なった苦悩が雫となり、その青色の眼から零れ落ちる寸前でのことだった。

初めて目にする彼の気持ちの良い笑みから告げられたその言葉に、セシリアの思考は停止した。

言葉だけを聞いていたなら、彼女はまたも何かの前触れかと身構えたかもしれない。

しかし、セシリアの視界に映る彼の笑みと、真直ぐに彼女をそしてその先を見据えているその瞳は、嘘を吐いているようには見えなかった。

そのことを認識した彼女は、この試合が行われるに至った経緯を思い出した。

思い返せば、それは自身の織斑一夏に対する理不尽な感情の発露。傲慢にも彼を試そうとして、しかし逆に振り回された。自分が定めた基準を考えればその時点で及第だったにも関わらず、その高すぎるプライドが素直に結果を受け入れることが出来なかった。それ故の八つ当たり。

ここまで押されてきたことにより妙な慢心が無くなった彼女は、そのことを自分でも驚くほど素直に受け入れた。

そして、自分が望んでいたことがなんだったのかを思い返した。

卑屈だった父を見て膨らんだ、情けない男への嫌悪感。

それは彼女の中で、強くて頼りがいのある男を望む気持ちを育てた。

嫌悪が強い分だけ、その期待も強くなり、それ故に理想の人物が見つからないことへの失望感も大きかった。

だからこそ、ISを扱える彼　織斑一夏は彼女の一縷の望みだ

った。

そして今、彼は自身が願う『在り方』を口にした。

彼は守られるだけでなく、守ることを望んだ。

彼は家族とどこまでも対等であることを願った。

その家族は、世界最強のIS操縦者として名高い、ブリュンヒルデと呼ばれる実姉　織斑千冬であるにも関わらず。

彼は実姉の実力が理解できない愚か者ではないだろう。

守ることも、彼自身が思う『対等』の形に至ることも、それが高い壁であることを理解したうえで、彼はそれを言つてのけたのだ。

他者に媚びることなど考えられない、迷い無き瞳で。

卑屈さの欠片も見えない、堂々たる威風を持って。

そうして彼は勝利して魅せた。

自分の取れるありとあらゆる手を使って、彼は勝利を引き寄せた

のだ。

それを卑怯だとは言わない。弱さゆえだとも思えない。

むしろ、家族のために進んでそのような道を選び取る強さに、セシリアは心惹かれた。

そこからは、彼がどうやってでも家族を守り、対等であるために、『最強』と並び立とうとする気概が感じられた。

ああ、これがそう、そういうことですね。

彼女は気付いた。自分が今、理想の存在と出会ったことを。ずっと願い、探し、求めてきた男と出合ってしまったことを。

「織斑、一夏……」

思わずその名前を口にすれば、胸に広がる熱がその温度を増していく。

頬が赤く染まり、心臓の鼓動が速まるのがわかる。

その心を落ち着かせるように、そっと自分の唇を撫でてみる。

だがそれは、彼女にある行為を想起させて、不思議な興奮を生み出した。

「……………」

止まらない。胸を甘く締め付けるこの感覚、思い浮かべれば少し苦しいのに、同時に喜びに満ちた感情が湧き上がってくる。

この気持ち、この感情は……。

シャワーから得られる熱など比較にならない程に、身体の奥底から熱くなる感覚。

知りたい。もっと、彼のことを。

彼女は唇を撫でた自身の指先に目を向ける。

白い肌の、細い美しい指。

教室で突き出したこの指先に、いきなり彼は吸い付き、舐めたのだ。

何故そのような行動に出たのか、今でも彼女は解らなかったが、それでもその記憶は色を失うことなく脳裏に映し出される。

その光景を思い出し、ほう、とセシリアは熱い吐息をこぼす。

頭が先ほどまでよりも、ひどくぼんやりしているのがわかる。

そして自身の指先から視線を離せずにいる。

そして

彼女は人差し指をゆっくりと口元に近づけると、そつと舌先を肌に触れさせる。

ほんの僅かな塩っぱさを味蕾が感じ取る。彼女はそれを気にすることなく、今度はそろそろと舌を這わせる。

あ……。

第一関節に沿って走る舌先の感触にくすぐったさを感じながらも、彼女はその行為を止めない。

降り注ぐシャワーで湿った指先を、お湯とは違う、僅かに粘りの

ある液体が濡らす。

やがてもどかしくなったのか、彼女はその指を少し咥えた。

口の中で指先が唾液に塗れ、湿った音をたてる。

「ああ……一夏、さま」

その小さな一言は浴室で噴き出すシャワーの音に掻き消され、室内には流れる水音、そして舌が指先を弄ぶ音だけが響いた。

この日、セシリア・オルコットの心中には新たな感情の火が灯った。

幕間3 「戦いの残響」(後書き)

気がついたらセシリアさんが若干アブノーマルな方向に。彼女ならこの程度は大丈夫だと思ったがゆえの結果です。

そして次回からは日常パートということだ。

第11話 「その後の日常と犬と猫と来訪者」 (前書き)

更新が遅くなって申し訳ありません。

色々やることがモコモコ重なっております、地味に忙しい現状です。

久しぶりの投稿で、微妙に感覚が掴めませぬ。

第11話 「その後の日常と犬と猫と来訪者」

四月の下旬。出会いと別れを象徴する桜の花もその盛りを終え、木々には新緑が入り混じり始めている。

クラスの代表者を決める波乱に満ちた試合も終え、1年1組には元の日常が戻っていた。

その日常が穏やかなものであるかどうかはともかくとして。

第11話 「その後の日常と犬と猫と来訪者」

IS学園グラウンド

に何故か開いている大穴。

その中ではISスーツに身を包んだ篠ノ之箒とセシリア・オルコットが向かい合っていた。相手に向ける視線は双方共に険しいものである。

「なんですって！」

「なんだ！」

お互いにぐぬぬ！ と呻き、睨み合っている彼女達のすぐ横では、地面に腰を下ろした織斑一夏がその様子を眺めていた。

何故こうなっているのかさっぱりわからぬ、とでも言いたげに目の前の状況を眺めている一夏であったが、当然の如く事の発端は彼にあった。

それは、このような事態に陥る少し前に遡る。

IS 学園のグラウンドには1年1組の生徒達が乱れることなく整列していた。

学園の授業内容には教室で行わる講義の他に、実際にＩＳに触れて操縦技術を身につける実習の時間が設けられている。

現在は、その実習の時間が始まろうとしているところだった。

整然と並ぶ少女達を見据えるクラス担任　織斑千冬は、いつもの黒のスーツにタイトスカートではなく、肩に黒のラインが入った白色のジャージという格好していた。

「これからISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、そしてオルコット。まずは専用機持ちのお前から飛んでみる」

「わかりましたわ」

よく通る声で告げられた指示に、まず進み出るのはセシリア・オルコットだ。

彼女は目を閉じて意識を集中した。すると左耳にある青色のイヤークラスが、彼女の意味に反応するように光を放ち始めた。

光の粒子がセシリアの身体　胴体、脚部、腕部と順に覆い、蒼の装甲を形作っていく。

そうして彼女の専用IS　ブルーティアーズが展開された。その展開動作には一切の淀みが無い。

（見事なもんだな）

そんな彼女を見て一夏は感心していた。自身も専用機を持つ身であるために、慣れぬ人間がISの展開にどれほど手間取るのかを彼は身を持って知っていた。

故に、彼はセシリアの流れるような展開動作を目にし、彼女が一国の代表候補生となるほどの実力者であることを再認識していた。

「何を見呆けている織斑。熟練した操縦者は一秒とかからずISを展開するものだ。お前もやってみせろ」

そんな彼を急かす実姉の言葉に、一夏は目を瞑って自身の右腕にあるガントレットに意識を集中させる。

彼が思い浮かべるのは白色の装甲、自身の専用ISである白式を身に纏うイメージだ。

（来い、白式）

その心中のつぶやきと同時に、薄い皮膜が広がる感覚が右手を中に彼の身体を伝わっていく。

先ほどのセシリアと同じように光の粒子が彼の全身を覆い、次の瞬間には白のISが顕現した。

遅れてやってくるのは身体が軽くなったような浮遊感。

一夏は自身の感覚をそれに合わせながらも、白式が問題なく展開されたことを確認して安堵する。

「二人ともISの展開は済んだな。よし、では飛べ」

「はい！」

その千冬の指示に対するセシリアの反応は迅速で、一拍後には一気に蒼の装甲が飛翔した。

ぐんぐんと高度を上げていく彼女に倣うべく、一夏も白式を上昇させて蒼の軌跡を追って加速する。

だが

「遅い、スペック上の出力は白式のほうが上だぞ！」

通信回線から叱責の言葉が響く。しかし言われたところですぐには改善しない。

何故か。

それは一夏がISの操縦に未だ慣れていないためだ。

クラス代表を決める試合では素晴しき変態機動を披露した彼だったが、その動きの多くはこれまで彼が何度も繰り返して身に染み込ませた動作であり、それは彼が生身でも行えるものだった。

故に、駆ける・跳躍する・投擲する、といった動きに限定して言えば、彼の技術は同年代の追隨を許さない高度なものとなっている。

だが『空を飛ぶ』という動作は、当然ながら生身で行うことはできない。そのため、飛行する感覚を彼は未だに完璧には掴みきれていなかった。

そのような理由から、彼のIS操縦技術は『人間的』な動作は一流だが『IS的』な動作は未だに初心者域を脱していないという非常に偏ったものとなっている。

先のIS戦で幾度もブルーティアーズの攻撃を回避していた一夏だが、空中での彼の回避行動は地面に足を着けていた時と比べるとトップスピードや動作の精密さにおいて劣っていた。

そんな彼にしてみれば、飛行状態を維持し続けるよりも八艘跳びをしながら遠方の船上で揺れる扇の的を雪片・式型を投擲して落とせと言われたほうが容易いことであった。

このあたり、彼の操縦技術の偏りが如実に現れているといえるだろう。

「自分の前方に角錐を展開させるイメージ、か。それがよくわからないな……」

何ともままならない自分の状況に、一夏は思わず呟いた。

角錐を展開させることが何故に安定飛行に繋がるのか、それが解らず彼は頭を悩ませる。

と、その声を拾ったのか、先に行くセシリアが速度を落としてその機体を白式の横につけてくる。

そして彼女は微笑みながらも一夏に声をかけた。

「イメージは所詮イメージですわ。自分がやりやすいイメージ、自分に合った方法を模索する方が建設的でしてよ」

彼女の助言とも取れる発言を意外に思いながらも、一夏は成程と思う。

一般的なイメージが誰にでもぴたりと当て嵌まるわけではない。参考にする程度なら問題無いが、なかなか上手くいかないにも関わらず、自分はそのことに囚われすぎていたようだ。

違った方向からアプローチをかけるという意味で、自分なりにやりやすい方法を探すという考えは確かに重要だ。

そのような思考に至った彼はうんうんと頷く。

そんな頷く彼を横目に、何故かセシリアは頬を赤く染める。

「そ、その……よろしければ、放課後に飛行の指導をしてさしあげますわよ」

「は?」

そんな意外な発言が追加されたことに、さしもの彼も疑問の声を上げた。

思い返してみればクラス代表決定戦に至るまでの彼女の言動や態度は、お世辞にも好意的とは呼べないものだった。

そのあらゆる行動からは彼女の気位の高さが感じられた。そして彼女が自身に良い感情を抱いていないことに一夏が気付くのは容易であつた。

そのうえ彼女は先のIS戦で一夏に敗北している。

短い付き合いではあるが、色々とわかりやすいセシリア・オルコットの性格を考えれば、忌々しく思われ蛇蝎の如く嫌悪されても不思議ではない。

そのため、セシリアのその発言は一夏を驚かせる。そしてこれが自身を嵌めるための罠である可能性さえ彼に考えさせた。

放課後、人目が無くなったところで凶行に及ぶ可能性がある。

そう考えると、この頬を赤らめている状況にも色々と考えさせられる。

そう、

これは放課後、油断している自分の背中に『叔父貴の仇！』と
あいくち
言いながら懷中に忍ばせた匕首を突き立てる光景を思い浮かべる
ことによる興奮から来ている可能性もあるのだ。

相手は面子で生きる上流階級。^{アップバー・クラス}えげつない思考回路を持つていても不思議ではない。

彼は貴族という生き物の執念深さに僅かに身震いする。

それは妄想の産物であつたが、彼の思考は止まらない。

恐らく彼女のような貴族は、アフタヌーンティーの時間にヤクザな話題で盛り上がっているのかもしれない。

それはティースプーンを床に落とす行為に、実は最後通牒的な意味が込められているかもしれない世界。

そこではテーブルに載せられたお茶やお菓子の一つ一つに意味があり、取り皿の上で真つ赤なジャムに塗れているスコーンが、次の犠牲者^{えもの}を象徴しているのかもしれない。

彼女達はその穏やかな表情とは裏腹に、口元から覗き見える真つ白な犬歯を眼前のスコーンに突き立てて咀嚼する。

以下妄想が続く。

『あそこの奥様のお話、聞きました？ 少しよろしくない噂がありますの（さいきんあいつアまじちようしのってるけえ、このへんでちイとばかりヤキいれたらア！ かしこ）』

『ええ存じていますわ。少しお話が必要かしら（うちらをなめくさりよってからに。そんなタマでえつぐなわせちゃらア　かしこ）』

『あまり大袈裟にしてはいけませんわよ？（チャカもちだしちゃああしいついちまわあ　かしこ）』

『あらご心配には及びませんわ。静かなところで二人きりでお話するだけですから。うふふ（なあに、ひとのいねえところでうまあやるけえへまなんざあせんわい　かしこ）』

妄想終了。

恐ろしい話だ。

と、彼は眼前で頬を染めるセシリアを見ながら思う。

これが荒唐無稽な想像でしかないことは自分でも解っている。だが、それにしても試合の前後で、彼女の態度には落差がありすぎるのだ。

彼はセシリアの真意が読めず、人知れず苦悩した。

「そ、そのときは二人きりで　」

そんな彼の心中など知るよしもなく、セシリアは頬を染めながら更なる言葉を紡ごうとする。しかしそれは回線から聞こえた千冬の

声によって遮断される。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ」

千冬の指示によって、ゆるんでいた彼女の表情は瞬時に引き締まりIS操縦者のものとなる。

「了解です。……では、お先に行きますわね」

言葉とともに、ブルーティアーズが視界から姿を消した。セシリアが急降下を開始したのだ。

瞬く間にISと地上との距離が縮まっていく。

その距離が一定のものに達すると同時に、彼女は機体を起こすように体勢を変え、そして機体の両脚裏のスラスタを噴かして速度を殺しながらも姿勢を維持する。

そうして彼女は、地表から10cm程の場所で停止してのけた。

それは言葉にすれば簡単だが、実際に行うのは簡単なことではない。

己の機体性能を把握し、動作の感覚が身体に身についていなければ、地表すれすれでの停止など狙って行うことはできないだろう。

だが、彼女はそれを容易く行つて見せた。ブルーティアーズは体勢を崩すことなく、地面から極僅かの高さで静止してみせたのだ。

（さすがにうまいもんだな）

その技術の高さ、そして先ほどの思考の切り替えの早さを思い出し、一夏は改めてセシリアに感心する。

試合でこそ勝利した彼であつたが、真つ当な『IS』の操縦に關してはまだまだセシリアは格上の存在であることに一夏は気付いていた。

（セシリア・オルコット、か）

彼は眼下に目を向け、金髪の少女を見る。それは自分と戦つた、高い技量を持つクラスメイト。

もしかしたらその微笑の裏では、自分の殺害計画を練っているかもしれない少女ではあるが、差し当たって自分が学び取るべきものを持つ存在でもある。

彼女の真意は解らないが、学び取れる部分は盗ませてもらおう。

一夏は表情を引き締めると、一気に地上へと加速、降下した。

そうして急降下を行う一夏だが、地面に近付くにつれて問題が生じた。彼の身体が長年の間に染み付いた『着地』の姿勢を取ろうとしたのだ。

指示されていたのが『自由落下からの着地』であつたならば、彼は生身でも問題無くそれをやり遂げただろう。

しかし、今回行うのは『急降下からの完全停止』であり、この場合の彼の身体が取った姿勢は目的に適したものではない。

頭で考えていることと実際の身体の動きとの間に乖離が生じた一夏の体勢は極めて中途半端なものとなった。

結果、

あ、これ無理。

彼は盛大に墜落し、轟音と衝撃がグラウンドに伝わった。

「一夏あつ！」

「織斑くん！？」

クラスの間が墜落した彼を心配する声を上げる中、篠ノ之箒と山田真耶が不安げな表情で落下地点へと駆け寄った。

しかし、宙に舞っていた土埃が晴れて身を起こす一夏の姿を確認すると同時に、二人は安堵の息を吐く。

一夏本人は元より、白式の装甲さえもシールドバリアーの防御のおかげで傷一つついていない。

そのことが予想できていたのか、少し遅れて千冬がゆっくりと近付いてくる。

「馬鹿者が。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

実姉の言葉に一夏は思わずうなだれる。己が未熟な初心者であることは理解できていた彼だが、それでも目標としている実姉本人からのお叱りに少々落ち込む。

もし彼に獣的な耳があつたならば、それをペタリと伏せているところだろう。

そんな普段あまり目にする事のない彼の様子に、クラスの間
の一部が身悶えしていた。

だが、千冬がそれを視線のみで黙らせる。

そうこうしている間に、一夏が無傷であることを確認した筈が、
大穴の上から彼に声をかける。

「情けないぞ一夏。昨日、私が教えたことを覚え 「一夏さまっ
！」ぬあっ!？」

しょんぼりとした幼馴染に心中で悶えながらも、筈は一夏に話し
かけようとした。

しかし、それは後ろから駆けて来たセシリアに弾き飛ばされてし
まい中断する。

自分の話を中断させられたことに若干の憤りを感じた筈だったが、
ふと、先ほどのセシリアの台詞の中に聞き捨てならない言葉が入っ
ていたことに気付いた。

一夏、『さま』……だと？

思わず視線を横に向けると、副担任である真耶は頬を引きつらせ
ている。その隣にいる千冬は、頭痛に耐えるかのように眉間を揉ん
でいる。

そしてクラスの人間達は餌を目の前に置かれた犬のように瞳を輝
かせ、一夏に駆け寄るセシリアの様子を観察していた。

何なんだこの状況は！

箒の脳内では先ほどの『一夏さま』という単語が高速で分析される。

一夏summer？　どんな季節だ。一夏Sama？　一夏はアウストロネシア語族とは何ら関連性はない。多分。ならば一夏・ザマ？　どこの聖戦士だ。……まさか一夏『様』だともいうのか？　尊敬の意味を込めて名前の後につける『様』だともいうのか？

彼女の思考は元気良くぐんぐんと走る。

何故『様』付けなんだ！　奴が、セシリア・オルコットが何故一夏に『様』を付ける？　どこにそんなことに繋がる場面があった？　考えろ！　考えるんだ箒！　きつとこの謎の答えが古の都アトランティスの封印を解き、隠された徳川埋蔵金の在処を指し示すヒントに……！！？

箒は結構な勢いで混乱していた。

だがそれも仕方のないことだ。

セシリア・オルコット。

彼女のこれまでの一夏への態度は、高圧的で威圧的、解釈のしようがないほどに好意的な感情とは程遠いものだった。

ましてや彼女は先の試合で一夏に敗北している。

自身を打ち負かした幼馴染を目の仇にしたとしても何の不思議ではなかった。

故に、そのセシリアが一夏に好意的な感情を向けるなど、あまつさえ『様』付けと呼ぶなどということは、本来ありえないことだ。

しかし、と彼女はその虹色の脳細胞で考える。

思えばセシリアは、試合開始前に公衆の面前で『足を舐める』などということを平然と言つてのける変態だ。

この変態的な要求からはセシリアのソフトなサディストとしての性向が読み取れる。

そのサディズムに対応するのがマゾヒズムであるが、これら二つの性向は古代中国思想における陰と陽の関係とは違い、互いに対立し合う属性だとは一概には言えない。

むしろその逆で、これら二つは欠けた部分を補うかのように互いを求め合わせ、そして完全性を示す円ウロボロスと成る。

それはコインの裏と表、オセロの白面と黒面のように二つで一つを形成しており、普段表に出ているのはどちらか一方の面であるが、ふと何かの拍子にそれが反転することがある。

先の代表者決定戦におけるセシリアの敗北が、いわゆる『何かの拍子』となったことは十分に考えられる。

つまり何が言いたいのかというと、セシリア・オルコットは一夏に敗北したことによって彼に対する性向が逆転し、これまで極端に高圧的な態度を取ってきたのが一転して、今度は極端に傳くようになってしまったのではないか？

他にも戦ったことによつて互いを認め合い、仲間になるという少年誌的なノリも候補にあがったが、セシリアの態度はそういった汗臭い展開とは明らかに異なる。

それはつまり

デレた！？ デレたのかあの女狐はっ！？

回転の速い頭脳は、時として残酷な真実に辿りつくことがある。

そして筈は、その回りすぎる頭脳による回りくどい過程を経て、一つの真実に辿り着いた。

実際にはセシリアの過去に起因した考えやもう少し繊細なセシリアの心境の変化といったものがあつて現在に至っているわけだが、結果だけを見るならばあながち外れとは言えなかった。

むしろかなり正確に正鵠を射ていると言える。色々と間違つた過程を経ているにも関わらずに。

一夏が絡んだ際の箒の思考は、迷走する過程を経ても何故か真実に辿りつくメイ探偵っぷりを発揮した。

そして箒は、セシリアのあまりにもちよろすぎる性格に慄き、愕然とする。

そんな箒の考えなど知ったことかと言わんばかりに、セシリアは一夏の心配をしていた。

「だ、大丈夫ですか！？　どこかお怪我などはありませんか一夏さま！」

「あ、ああ。大丈夫、だが……さま？」

一夏は手を振って自分が無傷であることをアピールしつつも、かなり予想外であった呼び方に戸惑いの声を上げる。

だが絶好調のセシリアは迷うことなく突き進む。

「それは何よりですわ一夏さま。でも念のために検査したほうが良いですわね……。よろしければわたくしが保健室に、そしてその後はわたくしの部屋でしつぽり　「無用だ！」　チッ！」

そこまで言いかけたあたりで箒が割り込んだ。

そのことにセシリアは舌打ちをする。明らかにアレな態度である。

「ISの装備をしていて、怪我などする筈がないだろう。というか、何故に貴様の部屋に一夏が行かなければならない！」

箒は鋭い視線で眼前のセシリアを睨むが、対する彼女は余裕の表情を浮かべる。

「あら篠ノ之さん？ 夫を ゴホン！ 他人を気遣うのは当然のことですよ」

「おい！ お前、今『夫』とか言いかけなかったか！？」

思わず箒は詰め寄るが、その剣幕をセシリアは軽く受け流す。

「あらあら篠ノ之さん、確かにわたくしと一夏さまが将来そういう関係になる可能性はありますけど、少々気が早いのではないですか？ まあそうなった暁には、式には呼びしますわ。新郎のご友人として」

「……変態女狐かと思っていたが、どうやら猫かぶりの泥棒猫だったようだな」

「あら、鬼の皮を被ったアマゾネスよりマシですわ。知ってますわよ？ 篠ノ之さんみたいなタイプを、日本では肉食系女子というのでしょう？」

ホホホ、と眼前で高笑いする金髪少女に対して、箒は頭のどこかで何かがプチプチと切れる音を聞いた気がした。

この腐れ毛唐人め！ 母国に帰って揚げた魚でも食べている！
箒は思わず放送禁止用語を脳内で叫びつつも口を開く。

「ふん、人前で足を舐めるなどという変態よりはマシだ。生憎と一夏はノーマルだ。お前は母国で婚活でもして、自分のアブノーマルな性癖を満たしてくれる相手でも探すんだな！ 一夏は私がもらう！」

「なんですって！」
「なんだ！」

そうこうして、冒頭に至る。

その光景にクラスメイトたちは、

『修羅場！修羅場なの？』とか、

『誰よ！ セシリアさんに何か間違った日本知識埋め込んだのは！
私もやる！』とか、

『実はどっちも肉食系な気がするわ！』とか、

『私も獣耳装着の織斑くんに足を舐めてもらいたい！』とか、

『くどいようだけど篠ノ之さんってナチュラルにプロポーズ的な発言するよね！？』

といった具合で、盛大に盛り上がっていた。

一部、自分の欲望がトップギアで入っている者もいたが。

「み、みなさん！　じ、授業中なんですから落ち着いてください！　あと自分の性癖に正直過ぎるのは先生どうかと思いますよー！　？」

そして山田真耶は、そんな彼女達を止めようとあたふたしていた。

何なんだろうな、この状況。

一夏はそう思いながらも、よっこらしょと立ち上がって、現状で唯一冷静だと思われる実姉の隣へと向かった。

「なあ千冬姉、どうして箒とセシリアはあんなに仲が悪いんだ？」

そう尋ねてきた実弟に対して、千冬は『解らないのか？』と言わんばかりの視線を向ける。

しかし色々と思い出して諦めたのか彼女は溜息を吐くと、ぼこり

と軽く一夏の頭を叩いた。

「授業中は織斑先生と呼べ、馬鹿者……」

何とも疲れた様子でそう言つと、千冬は收拾をつけるべく渦中の二人がいる方に向かった。

時刻は移り、夕暮れ時。

IS 学園の事務受付では、一人の小柄な少女が事務員の応対を受けていた。

だが少女の様子はどこか苛立たしげなものだ。

その様子を長旅による疲れだと判断した事務員の女性は、手元の書類を一通り確認し終えると、安心させるように微笑んだ。

「それじゃあ、手続きはこれで終わりです。あなたは二組の所属となります。ようこそISS学園へ」

人当たりの良い笑みを向けられた少女は、ふと口を開く。

「二組のクラス代表って、決まっていますか？」

その質問を自分の所属するクラスのことだから気になっているのだと判断した事務員は答える。

「ええ、決まってるわよ。この時期だと大体どのクラスも決まっているわね」

「名前は？」

「え？」

眼前の少女の様子が少しおかしいことに気づき、戸惑った事務員は逆に少女へと問いかける。

「え、ええと……それを聞いてどうするのかしら？」

女性からの問いに、少女は気の強そうな顔に極上の笑みを浮かべ、告げた。

「とりあえず、二組の代表の座、あたしが強奪^{せいど}っちゃおうかと思っ
て」

小柄な少女　鳳鈴音は、その不敵な台詞を皮切りに行動を開始する。

全ては幼馴染との久しぶりの再会を彩るために。

第11話 「その後の日常と犬と猫と来訪者」 (後書き)

セシリアさんが絶好調です。

そして鳳さん来襲！ 二組代表者さんが泣かされます (嘘

第12話 「宴の夜に」(前書き)

色々と忙しくて月刊状態になっています。

久しぶりの更新でわけのわからない展開に。

一応のR - 15、かなあ……？

第12話 「宴の夜に」

IS学園学生寮の一室。

そこではパソコンのキーを叩く軽快な音が響いていた。

その暗い部屋の中でよどみなくキーを押すのは、眼鏡をかけた一人の少女だ。

彼女の視線が向かうのは、その部屋の唯一の光源となっているモニター
そこに映っているある少年に関する文章だ。

彼女は液晶に映る文字を一通り目を通すと、ふう、と息を吐いて椅子の背にもたれる。

「織斑一夏、か」

思わず口に出るのは、現在自分が調べている少年の名前。

それは世界で唯一の男性IS操縦者にして、学園唯一の男子生徒の名前だ。

彼女はその少年に強い興味を抱いていた。

だがそれは他の学生のようなミィハー根性や、慣れぬ異性に対する関心とは少し性質が異なっている。

では何か。

彼女は学園の新聞部に所属している。しかも副部長という要職についていた。

そのため、彼女が一夏へ向けるのは、多くの読者が手に取るような記事を書くための視線、取材対象を探るブン屋としての視線ただ、それだけの筈だった。

しかしそれは、情報収集を続ける過程で変化していった。

切欠となったのは、1年1組の人間から得た彼の教室での様子だ。

彼の行動を一言で表すならば、

奇行

それに尽きた。

副担任を狸よばわりし、食堂で隣席の女子生徒にいきなりあーんをし、同じクラスの金髪少女の指を舐めたり、同室（！）の少女と裸でアブノーマルな行為に興じていたり、と叩けば叩いただけ埃が出てくるという有様だ。

最後の裸云々に関しては何とも言い難いが、兎にも角にも、織斑一夏15歳は驚くべき変人であった。

そうした彼の数々の奇譚を知った彼女は、男性IS操縦者としての織斑一夏だけでなく、彼個人にも強い関心を抱いた。

あれは間違いなく、今後の私の新聞部生活に深く関わってくるわね。

彼女は眼鏡を外すと、目と目の間をほぐすように指で揉みながら、口元に笑みを浮かべる。

そして彼女はその指を顔から離すと、机の上に置かれた一本のペンに手を伸ばして掴み取り、モニターに映った織斑一夏の写真へと向けた。

さて

そして、

「いよいよ直接取材と行きますか」

言葉とともにペンは薬指に弾かれ、中指を軸に一回転した。

その少女　　黛薫子の表情は、好奇心に満ちた笑みだった。

第12話 「宴の夜に」

「織斑くんっ！」

『『『クラス代表決定おめでとうー！！』』』

その言葉が音頭となり、寮の食堂にクラッカーの音が連続して響く。

現在は夕食の時間を過ぎた頃で、生徒の自由時間となっている時間帯。

ここIS学園一年生寮の食堂には1年1組の生徒達が集合していた。

先日行われたISの試合の結果、1年1組のクラス代表が学園唯一の男子生徒である一夏に決定した。

今宵の宴は、そのことを祝うべく開かれたものだった。

「だけどこれは少し大袈裟じゃないか？」

飲み物の注がれたコップを片手に言う一夏は、クラスの面々が自身を祝ってくれることには感謝していた。だが、クラスの役職が一つ決まっただけでこのようなパーティーをすることに少々疑問を抱かずにはいられなかった。

「そのようなことはありませんわ！」

その一夏の言葉に返答したのはセシリア・オルコットだった。

「一夏さまは英国代表候補生たるわたくしに挑み、勝利を飾ったのですから。むしろもつと華やかな祝賀会を設けたいぐらいですわ！このわたくしを翻弄した神算鬼謀、底の知れない操縦技術！まさに神代の英雄が」

と、セシリアは胸に手を当てながら試合の様子を大仰な言い回しで滔滔と語り出した。

その様は堂に入った見事なものだが、周囲の生徒達は皆、うんうんと頷きながら飲み食いを進めている。

自己の世界にトリップしつつあるセシリアを軽やかに無視するクラスメイト達を見、一夏は同級生達がセシリアの扱いに慣れてきて

いることに頷き関心する。

「いやー、それにしても織斑くんには驚かされっぱなしだねえ」

「ほんとほんと、まさかセシリアさんに勝っちゃうなんてねー」

「でもこれでクラス対抗戦も盛り上がるね！ 何せ学園唯一の男子だからね」

「おまけにセシリアさんは何でか知らないけど織斑くんのこと『様付けだしね！』」

女三人寄れば姦しいと言うが、少女が三十人以上集まっている現状は凄まじいものであった。もしこの場に騒音計があったならば、80dBぐらいの数値を叩き出していたかもしれない。

その人数は明らかに1クラス分を超えていたが、誰もそのことを指摘する様子がないため一夏は『そういうもの』なのだろうと思い、そのことに対する思考を止める。

兎にも角にも多くの少女達が一夏を祝い、彼に友好的な、時には好意の含まれた微笑を向けていた。

その様子を横でむすり、と眺めているは彼の幼馴染 篠ノ之箒だ。

「……人気者だな、一夏」

彼女は不機嫌な様子を隠すことなく口にする。

「そうか？」

その様子に一夏は怪訝な顔しつつも言葉を返すが、それが彼女の機嫌を一層悪くする。

「ふん」

箒は鼻を鳴らすと、一夏から視線を逸らす。そして、不機嫌な表情で手元のストローが入っていた紙袋を弄ぶ。

「何でそんなに不機嫌なんだ？」

一夏が問うも、箒はそれを意図的に無視する。

（人の気も知らないで　！）

紙を折る手を休めずにいる彼女は、クラスの少女達に囲まれる一夏に苛立ちや焦りを感じていた。

誤解の無いように言っておけば、箒とて一夏がクラス代表になったことを祝福していないわけではない。

むしろ自身の幼馴染である彼が、女狐改め泥棒猫ことセシリア・オルコットに勝利して代表になったことを、まるで自分のことのように喜んでいた。

だが、その勝利には代償がついた。箒限定の。

勝てぬと思われていた勝負に勝利してみせた一夏に、周囲の少女達は一層強い関心を抱くようになった。

今日の昼間も、彼のもとには入れ代わり立ち代わり女子生徒が押し寄せ、それは二人でISの訓練をする放課後まで続いた。

二人きりになれる時間が減ってしまっているじゃないか！

実際のところは、今までの訓練の時間にも少なくないギャラリイがいたのだが、箒はこれまでそのギャラリイを路傍に転がるジャガイモだと考え無視していた。

だが最近では、今までのそれと比べて人数が明らかに増えてきており、視界の隅で蠢くジャガイモの嬌声は、無視し続けるのが難しいレベルになりつつあった。もしも騒音計があったならば70dB程の数値を計り出していただろう。

それとて多少時間が経てば落ち着いてくるのだろうか、その『多少』がどの程度続くのかは誰にも判らない。

人の噂も七十五日、とはよく言ったものだが、そのことを考えると箒の精神状態は一層下降した。

そうして募った苛立ちは、一夏に対しても向けられる。

篤は自身の感情を言葉にすることこそ苦手であったが、その分素直すぎるほどにそれが態度に現れる性質であった。それ故に、いつもしれっとした表情で女性に囲まれている一夏に怒りの感情を抱かずにはいらなかった。

その感情が理不尽なものであることは彼女自身も理解できていた。そしてそれが解っていないながらも、それを一夏に向けることを抑えられない己の未熟さにさらに苛々してしまうというような不健全な感情のスパイラルが続いていた。

真に、恋心はままならず。

恪気は恋の命、とも言うが、乙女篠ノ之、恋焦がれて嫉妬のお餅をぼんぽん焼くお年頃であった。

篤はうー、と呻きながら手元の紙袋をちびちびと折る。だが、その様子は酷く弱々しいものだった。

そんな彼女をよそに、突如、食堂にカメラのシャッター音が響いた。

・
・
・
・
・
・
・
・

「はいはい！ 新聞部です！ えーと、君が今話題の新入生、織斑一夏くんだね！ とりあえず記念に一枚！」

元気の良い声とともに、再びシャッター音を響かせるのは眼鏡をかけた少女だ。

「あ、私は二年の黛薫子だよ。ちなみに新聞部の副部長ね。で、早速なんだけど」

笑みとともに一夏の口元にボイスレコーダーが突き出される。

「クラス代表となった感想とか、この間の試合の感想とかをどうぞー！」

その要求に一夏はふむ、と考える素振りを見せた後、口を開く。

「今回は何とか勝ったが、次にやっても同じ結果になるとは言い切れない」

「あれれ？ 随分と謙虚なお言葉だね。何か意外」

不思議そうな顔をしている薫子に一夏は返す。

「実際にセシリアは強かったし、操縦技術は今でも俺より上だと思ってる。俺はその差を奇襲奇策で何とか埋めたけど、次に同じような手がそのまま通用するとは思えないな」

「い、一夏さま……！」

一夏の正直な台詞に、セシリアが感極まった様子で反応する。

その彼女に視線を向けた一夏は、昼から考えていたことを口にする。

「それとセシリア、その『様』付けはやめてほしい」

無表情に告げられたそれに、セシリアは今度は不安げな様子で返す。

「も、もしかして不快な思いをさせていましたか？　これはわたくなりの一夏さまへの敬意の表れなのですが……」

「いや、迷惑じゃないし敬意を表してくれるのは嬉しいが、俺達と同じクラスの人間だ。できればお互い対等なつき合いをしていきたいと思うんだが」

「え？」

その言葉にセシリアは一瞬驚いたような表情をつくる。

だが、段々その言葉の意味が理解できると、それもすぐに綻び始めた。

「対等な関係……！　そ、そうですね！　わたくし達は対等な関係ですね……！」

大きな声を出してしまったことを恥かしく思いながらも、セシリアは思い返す。

自分が望んでいたのは対等で対当な関係。

それは、得意不得意はあれども互いに欠けたところを補い合って共に歩んでいくパートナーを意味している。

元々自分はそのような存在を欲していた筈だ。

しかし先日の試合であまりにも鮮やかに敗北してしまったばかりに、先程までの自分の彼への態度は対等を通り越し、尊敬を追い越して崇拜の域に達しつつあった。

まあ自分としてはそう悪い気分ではなかったのだが、それは本来自分が望んでいた関係ではない。

その最も大事なことを自分は失念していた。

迂闊、でしたわね……。

だがたった今、他ならぬ彼がその誤りを正してくれた。

女性に傳かれるように接されて嬉しくない男性はそういないと聞く。しかし彼はそのような関係を良しとしなかった。

あくまで自分との対等な関係を望んだのだ。

ああ……。

出会った当初は、卑屈さの欠片も見せずに相對してきた。

戦った時には、経験や技術の差を知力で埋め、最後には己の信念を示した。

そして今、その勝利に驕ることなく双方対等であろうと言ってくれた。

ああ、やはりこの方で間違いありませんのね。

そこまで考えたセシリアは、一夏の手をそっと取った。

顔に自然と笑みが浮かんでくるのを感じながらも、彼女は真直ぐ彼の瞳を見つめる。

その微笑みは貴族然としたものではなく、もっと純粋なもの
長年の間求めてきたものをようやく得ることができた一人の少女の、心からの笑顔だった。

「で、ではこれからは一夏さんと呼びますわ!」

「ああ、改めてよろしくなセシリア」

「はい! 不束者ですがよろしく願いしますわ!」

己の父を見て膨れ上がった男への不信任。それが原因で真つ当な恋愛など諦めつつあった少女は、今この瞬間、本当の意味で恋がスタートしたのだった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「いやー! 良い感じに話がまとまったところで、二人の写真良かな?」

「写真、ですの?」

「二人は注目の専用機持ちだからねー。並んだ写真をドンと貼り付けたいのよ」

その薫子の説明に、セシリアは笑みを崩さぬまま口を開く。

「つ、ツーショットですね……。あ、あの、その写真はいただけますの?」

「そりやもちろんだよ。今なら色々とサービスしちゃう! それじゃあ、お二人さん、もっと寄って寄って!」

手馴れた彼女の指示に従い、一夏とセシリアは肩が触れ合うほどの距離まで接近する。

ちなみにそれは、先に述べた薫子なりのサービスの一つだったりするのだが、彼女はそれをおくびにも出さずにカメラを構え、

「はい、じゃあ撮るよー!」

シャッターが切られる。

そして、

「ど、どうして皆さんも入ってますのー！？」

セシリアの絶叫が示すように、二人の周囲にはクラスの間人間達が集結していた。

撮った写真を部屋に飾り、寝る前に口付けを　！　などと典型的なことを考えていたセシリアは、獅子身中の虫が己のすぐ近くに、それも群を成して存在していたことに怒りのボルテージを上げる。

「まあまあ、落ち着いてよセシリア」

それを周囲の少女達が宥める。

「そうだよ、セシリアだけ抜け駆けはするいよ」

「一夏はわたしの嫁だ」

「今日は1組のパーティーなんだから、思い出作りだよ！」

それらの台詞を聞いたセシリアは、溜息を吐いて自身を落ち着けた。なお、先ほどの台詞に一部おかしいものがあつた気もしたが、80dB的な意味でよく聞こえなかったため、気のせいだろうと思う。

「も、もう！　仕方ありませんわね！　今回だけですわよ！」

色々と腑に落ちないところもあるが、クラス全体のイベントと言われればそのとおりだ。それに、これから色々と機会はあるだろ

う。

そんな感じでセシリアが落ち着いたことを確認した生徒達は、それぞれ自分の席に戻っておしゃべりを再開する。

だがセシリアは怒りが落ち着いたことで先程の一夏とのやり取りを思い出し、再び喜びの感情が溢れてくる。

い、いけませんわね。自然と笑みが……。

堪えようとしても浮かんでしまう笑みを、セシリアは必死に抑えようとする。

「いやー、それにしてもオルコットさんがあんなに乙女になっちゃうなんてねー」

「うんうん、さっき織斑くんの手を取った時の笑顔なんて、本当可愛かったもんね！」

「だよー」

な、何か色々と好き勝手なことを言われてますわね……！

いかに80dBあろうとも、己の家名が入った話題は耳に入りやすい。

セシリアはその奔放な会話に耳を澄ませながら、自分の席で飲物をちびちびと飲む。

「まあ教室で初めてセシリアさんが織斑くんに声をかけた時はドキドキだったよね」

「ああー、あの時は本当に何ていうか険悪な感じで」

「でも織斑くんが、その空気を見事に無視してセシリアさんの指を咥えた時はびっくりだったよ」

「あれで次の夏の作品内容が決まったよ！」

「く、クラスメイトをネタにするのはどうかなあ……」

くああ！ 過去の己の行動が恥かしいですわ！ あと四人目の方は後で話し合いが必要ですね……。

そのような感じで、セシリアは一人悶える。

だが、その次の一言が状況を変える。

「　　そういえばセシリアさんって、試合前に織斑くんを足舐めるとか言ってたよね」

その一言が、食堂の喧騒を一気に静めた。

写真を何枚か撮り終えて、一夏へのインタビューを続けていた薫子は、食堂の空気が唐突に変わったことに気付いた。

え？　　な、何でこんなに静かになってるの？

あまりに一瞬で静かになったために、彼女は不気味さを感じながら周囲を見渡した。

その彼女の視界に入る生徒達は、何故か皆一様に瞳を輝かせてい

る。

その様子に薫子が戸惑っていると、一人の少女が口開いた。

「ねえ、セシリア？」

ゆらり、という表現がぴったり当て嵌まる歩みでセシリアの眼前に來た生徒は、口元を弧にしながら語りかけてくる。

「な、何ですの……？」

セシリアはその異様な状況に若干怯えが入っている。

「セシリアは織斑くんに一度、指を舐められているんだよね」

その口調は疑問ではなく、知っていることを確かめるようなものだ。

「そ、そ、それがどうかしましたの？」

その時の光景を思い出したのか、セシリアは頬を赤くしながら返答した。

彼女の返答に、周囲の生徒達も口元に笑みを浮かべた。

「それってフェアじゃないよね？ 織斑くんだけ舐めるっていうのは対等とは言えないよね？」

「うんうん」

「セシリアさんは試合前に『わたくしの足をお舐めなさい、この雄豚野郎!』とか言ってたしねー」

「い、言ってますんわそんな台詞!! 豚野郎の件は完全に冤罪ですわよ!? 意図的な改竄が加えられていますわ!!!?」

セシリアは思わず立ち上がって抗議する。しかし、既にある方向へ向かいつつある空気は霧散することなく彼女に牙を向く。

「あ、あと『わたくしが敗北した暁には、足でも顔でも舐めて差し上げますわ! この雄豚野郎!』とも言ってたよね」

「だから言ってますん! 捏造もいいところですよ!!!?」

「実際に言ったかどうかなんてどうでもいいの!」

「そこが一番重要ですよに!?!」

「大事なのは、その言葉を信じる私達の心なの!」

「何か良い台詞に聞こえる!?!」

「じゃあ舐めようか」

「最悪ですよ!! 何事も無かったかのように議論が打ち切られましたわ!!!?」

ぬああ!! 忘れかけていましたけど、やはりここは鬼畜の巢

窟ですね！？ 人でなしじゃないんですの！？

セシリアは脳内で頭を抱えながら後ずさる。

「あ、あなたた「やめないか！」 し、篠ノ之さん！」

暴走する群集の前に立ちはだかったのは一人の侍、もとい箒だった。

「さつきから聞いていれば破廉恥なことを！ あの泥棒猫に一夏の柔肌を触れさせはせん！！ あれはわたしのものだ！！」

むしろあなたが破廉恥ですわ！ 結局、敵の敵が敵だっただけですのね！

しかしこれは好機だ、とセシリアは考える。

現在のこの状況は、宴のテンションが上がりすぎて一時的に集団トランス状態に陥っているだけだろう。

このまま箒が少しでも時間を稼いでくれたなら、この場から離脱する隙ができるかもしれない。

あとはそのまま部屋に閉じこもって、一晩も過ぎれば皆落ち着きを取り戻すだろう。

さあ篠ノ之さん！ わたくしのために働きなさい！

見事勝手なことを考える彼女だが、それは叶わぬ願いだった。

「どきなさい篠ノ之さん！ 私達が欲しているのは『恥じらい』という感情よ！！ いかに1組のアマゾネスと呼ばれた貴方でも、邪魔はさせないわ！！」

「だ、誰がアマゾネスだ！！」

古傷を抉られた箒は、指揮官と思しき生徒に近付く。

だが

「今よ！ 右翼と左翼は退路を封じなさい！ このまま包囲殲滅するわ！！」

「な、何だと！ こ、これは鶴翼の陣だと！？ 貴様、自分を咄に！？ ってこらっ！ ど、どこを触って ！！」

篠ノ之箒、退場。

じ、時間稼ぎにもなりませんでしたわ！

邪魔者のいなくなった群衆は、両脇からセシリアを抑え、のんび

り烏龍茶を飲んでいた一夏の目の前まで彼女を引きずり出した。

「くっ！ おやめなさい皆さん！ 何でそんなに本気入ってますの！？ 揃いも揃って変態ですよ！？」

「変態じゃないわ！ ただ可愛らしい金髪少女が恥じらいながら男性の指を舐めている様を目に焼き付けただけよ！」

「問うまでもなく変態でしたわ！？」

ちきしょー！ と、セシリアは絶叫しながらもがくが、両腕を口ズウエルの宇宙人捕獲シーンの如く捕まれている状態では無駄な足掻きというものだった。

「こ、これが話に聞いた日本の民衆が貴族階級に反旗を翻すというジャパニーズ・I K K I ですね！？」

「一揆でも革命でもいいじめでもないよセシリア。これはむしろ愛なんだから」

「歪んです！ あなたたちはみんな倒錯していますわ！！」

彼女の叫びが虚しく教室に響き渡る。

「さあ織斑くん、気にせずお願いします」

生徒の一人に押されて一夏は立ち上がる。

「いや、セシリアが凄く嫌がっているんだが、この行為にどんな意

味があるんだ？」

さ、さすが一夏さんですわ！ この狂気の集団心理に支配された場においても冷静ですわ！ でもここでそれを問うのなら、以前教室で何故一夏さんがわたくしの指を舐めたのが非常に謎ですわ！

色々と言いたいことはあるが、セシリアは最後の希望を眼前の一夏に託す。彼がこのわけわからん状況をあの日のジャイアントスイングのように吹き飛ばしてくれることを期待して。

その希望の星である一夏の前に、一人の少女が出てくる。

彼女の名は、

「君は、谷本さんか……」

「うん、織斑くん。ここからは私があなたに説明するわ。この行為の重要性を」

それはかつて一夏と食堂で相対し、俗に言う『あーん』イベントの相手となり、そして異端審問にかけられた少女 谷本なにがし（以下谷本）であつた。

「良いかな織斑くん？ 織斑くんはさつき、セシリアさんと対等なクラスメイトでいたいから『様』付けはやめてくれってお願いしてセシリアさんもそれを了承したよね？」

「ああ、そつだな」

「でもね織斑くん、それだけじゃ対等じゃないんだよ」

「どういうことだ？」

「『舐める』という行為を行う動物はたくさんいるけど、その行為には様々な意味があるわ。取り合えず飴玉を舐めるっていう食事方法の舐めるは除外するね。で、それ以外の意味なんだけど、グルーミング　つまり毛繕い、親に食事をねだる意味合い、傷口を殺菌する意味合い、上位者に対する媚び、そして　愛情表現としての意味合い」

一夏はふむ、と自身の顎に手をやりながら先を促す。

「まあたくさんあるわけだけど、これらから共通して読み取れることが一つあるの」

「共通して読み取れること？」

「うん、それはね？　『舐める』という行為に至るためには、舐める者が舐める対象に害意を持っていないということが重要な。まあ相手をみくびるという意味での『舐める』も、相手を甘く見て警戒を解いているという意味で考えるなら、害意を持っていないと言えるかもしれないね」

「なるほど、それで？」

「試合前の険悪なセシリアさんにさえ、織斑くんは指を舐めて害意を抱いていないという示しをつけた。試合が終わった今、今度はセシリアさんが示しをつける番なの。対等であることをお互いに了承して、手を合わせた。そのセシリアさんが織斑くんに害意が無いこ

とを表す『舐める』という行為を行えないということは、真に織斑くんを心を許していない　つまり対等になっていないということになってしまふの。わかった？」

「いや、そうか？」

一夏は無表情を崩さないまま、首を傾げた。

「さ、流石は一夏さんですわ！　谷本さんもこれ以上わけのわからない言動でわたくしと一夏さんに迷惑をかけるのはお止めなさい！」

「ふう、仕方がないね織斑くん。」

「じゃあこうしょうか」

少女谷本は一拍置いて、告げる。

「セシリアさんが織斑くんの指を舐める、これは試合前に彼女が約束したマニフェストなんだよ」

「そんなわけがありますか！？　そもそも言ってますんわ！？」

セシリアはつかまれた状態で叫ぶ。

だが同時にセシリアは思う。これで決まりだ、と。

長々と虚言を弄して一夏を騙そうとしたが、それも無駄に終わった。

そして今出てきたのは『マニフェストだ』などという根も葉も無い口からでまかせの一言だ。

先ほどのそれっぽく聞こえなくもない話で揺らがない一夏が、その一言で心のセーフティ・バルブを解放する筈がない。

勝ちましたわ！ わたくしは群集に勝利しましたわ！

セシリアは息を吐いた。

だがそれは何かしらの旗を突き刺す行為だった。

「マニフェストなら仕方が無いな」

「うんうん、解ってくれたんだね織斑くん」

「ちょ、ちょっと待って お待ちください！！ い、一夏さん嘘ですわよね？ それで納得してしまう筈ありませんわよね！？」

問われる一夏は、つかつかとセシリアの眼前に歩み寄り彼女と視線を合わせた。

そして彼女の口元に己の指を差し出して言った。

「セシリア、確かに約束が必ず達成できるとは限らない。でも、達成努力はしなければならない、俺はそう思う」

「だ、騙されてますわ！ 一夏さんはあの谷本さんに騙されているんです！！」

「約定を守るのは政に携わる高貴な人間の務めだと俺は思う」

「で、ですからその約定がでっちあげだと……!!」

だが彼はその抗議の声を華麗に聞き流し、左手をそっとセシリアの頬にあてて優しく撫でる。

「あ、い、一夏さん、何を……!!」

「俺はセシリアと対等な関係でいたい。セシリアもそう言ってくれたらどう?」

「そ、それは確かにそうですが……!!」

セシリアの声は僅かに震えている。

だが一夏はそれにも構わずに、彼女の耳元まで自身の口を近づけた。

それは彼の静かな息遣いが聞こえる程の距離で

「い、一夏さん。ち、近くて、息がわたくしの耳に……!!」

セシリアは自身の顔が真っ赤になっていくのを感じ、しかしそれを止められない。

「セシリアと対等でいたい。つまり」

一夏は一息吐く。その吐息が耳にかかり、セシリアの体がビクリ

と揺れる。

そして、一夏は、言った。

俺はセシリアに、（指を）舐めて欲しいんだ

それはやたら甘い声だった。

そして一夏はセシリアの耳たぶを甘く噛んだ。

「ふあ、あ……！」

ちゅ
ぱ

こうしてセシリア・オルコットは堕ちた。いやオチた。

人が互いに解り合うことの難しさ。

これはそれを表すような出来事だった。

備考。

冒頭でやたら『切れる』人物っぽいシーンが挿入されていた黛薫子は、その間休むことなくシャッターを切り続けながら思った。

「織斑くんだけじゃくて、みんな変態なのね……」

それは悲しいほどに的を射た発言だった。

なお、後日セシリア・オルコットは、この日のことを思い返してこう述べている。

ちよつとした油断から出た言動や行動が、後になって自分に襲いかかってくる。1組は隙を見せられない鬼畜の巣窟ですわ。

と。

そしてその言葉の意味を、後にフランス人やドイツ人がその身をもって知ることになるのだが、それはまた別の話である。

第12話 「宴の夜に」(後書き)

赤信号、皆で渡れば怖くない的な集団心理。

幕間 4 「おやすみ前のできごと」 (前書き)

少し長い幕間。宴の後の部屋での出来事。

篤さん絶好調で会話多めです。

変態成分が少し入っていますのでご注意ください。

幕間4 「おやすみ前のできごと」

「で、一夏。何か言い訳はあるか？」

と、篠ノ之箒は眼前で正座している幼馴染を見下ろしながら告げた。

腕を組んで仁王立ちするその姿は、正に仏敵を打ち払う守護神の威容を誇っている。

「いや、俺は箒が何を怒っているのかが解らないんだが……」

そして今まさに仏罰が下りそうな男 織斑一夏は、この現状に至った理由が理解できていなかった。

彼のクラス代表就任を祝して開かれた宴席は、途中でセシリアが幸せそうな顔で倒れるという珍事があったものの、それ以外はつつが無く進行して宴はつい先程まで続いていた。

その後、何故か簀巻きにされて目を回している箒を発見した一夏は、彼女を小脇に抱えて戻った。そして自室にて彼女を解放した瞬間、即刻正座を言い渡されたのだった。

「ほう、解らないと？ 何故自分が正座をして怒られているのかが理解できないと？ そういうのだな一夏？」

彼女が言葉を重ねるにつれて威圧感は増し、同時に部屋の窓がびりびりと音を立てる。

これが言霊というものだろうか、と愚にも付かない感想を取りやめて一夏は黙考する。

幼馴染は何故にこれほどの怒りを自分に向けているのだろうか？と。

幕間 4 「おやすみ前のできごと」

思えば彼女は先程の宴席でも終始不機嫌な様子だった。

それを指摘してみれば否定の言葉が返されたが、あれはどう見ても怒りによるものだった。

（そういえば、ここ最近の筈はどこか様子がおかしかったしな……）

ここ数日の筈の様子を思い返してみると、やはり苛立ちや焦りの

ようなものが感じられた。

放課後の訓練も、彼女の反応速度が0・5秒程遅れていたようだった。

その証左として、いつもは三枚におろされる太刀魚がここ数日は粗いつみれと化していた。

つみれに関しては後で鍋にして美味しく頂いたので問題はなかったが、普段の筈であればあのようなことにはならなかっただろう。

しかし、体調が優れないのかという一夏の問いに対する返答は、やはり否定。

腑に落ちない点は多々あったが、筈とて人の子、調子の優れない時もあるとその時は考え、それ以上追求するようなことはなかった。だが、思えばその頃には既に怒りの原因となる出来事があったのかもしれない。

つまり、原因は昨日今日起ったことではない。そして今回の物言いかから察するに、それには自分が絡んでいる。

そういうことになるのだが、肝心の理由が一夏には解らなかった。

（最近の俺の行動と言えば　　）

朝。起床。顔を洗い、部屋のブラインドを上げてラジオ体操。そして着替え。

簡単なベッドメイク　汗を吸ったベッドパッドを交換し、さらに純白のシーツに変える。当然二人分。

朝練で汗をかく筈のために用意しているスポーツドリンクのストックを確認し、不足している場合は作り足す。

部屋でシャワーを浴びる筈のために、脱衣場に洗い立てのバスタオルを置く。

最後に部屋の観葉植物に水を与えて朝食に。

持ち物（教本、筆記用具、財布、お菓子、苦無、発煙弾、フラッシュグレネード、狸娘観察日記、etc）を確認して登校。

（朝は基本的にこの流れだったな。次に日中は　）

朝のSHR後に授業。途中で副担任をからかって実姉のスナックのきいた手刀で沈黙する場面もあったが、それ以外は問題無く授業を受ける。

授業間の休み時間は、菓子でのほほんさんを餌付けしながら次の授業の準備を行う。

そして昼休み　この時間は基本的に箸と食堂で昼食。

（やはり何らおかしいところは無いようだが いや待てよ？）

ここで一夏は箒が怒っている原因らしきものに思い当たる。

「解ったぞ箒！」

「……ほう、言ってみろ一夏」

勢い良く拳手した一夏に、箒が視線を向ける。

「この間、冷奴にかける醤油を間違えてソースを渡したことをまだ根に持って「違う！」」 ふむ」

箒の言葉に、一夏は顎に手をやり考える。

冷奴の件が違うとなると、どうにも他に思い浮かばないな。

それ以外にもセシリアの試合から最近までの己の行動を思い返してみても、そのどれもが（彼の）常識の範疇に納まっており、箒に怒りの感情を抱かせるようなことは何一つ無いように思えた。

強いて変わったことを挙げるならば、帰る途中でおかしな視線を感じたので偶然持っていた発煙弾をばらまいて視線から逃れたことがあったが、この出来事には箒は全くといって良いほど絡んでこない。

謎は深まるばかりだ。事件は正に迷宮入りの様相を呈してきたな。それにしてもあの時の箒は見事だったな。ソースをかけて10秒ぐらい咀嚼した後に『うむ、やはり冷奴にはこれだな。まったりとしてコクがあって、肉汁の風味が活きた見事な　　ってこれは醤油じゃなくてグレイビーソースだろ!』というノリツツコミは、そんじょそこいらの十代少女ができるノリツツコミのクオリティを遥かに凌駕していた。

一夏がそうして愚にも付かない回想をしている間にも時間は無情に過ぎていく。

そして段々と箒も業を煮やしてきた。

「ええい!　まだ解らないのか一夏!!　わたしが怒っているのは、今日のパーティーのことだ!!」

「あ、それなのか?」

「それなのか、だと?　お前は本当に気がついていないのか!」

一夏の不穏な言葉に箒はぎろり、と一夏を睨みつけた。

自分に視線が刺さるのを感じて『やぶ蛇』と思いつつ、一夏は無言で首を振った。

ここでおかしな反応をすれば、事態が悪化すると判断したのだ。

「しかし、今日の宴会でお前を不快にさせるようなことを何かしたか？　俺は心当たりが無いんだが」

「察しが悪いぞ一夏！　良いか？　わたしが怒っている理由はセシリアだ！！　お前がセシリアに指を舐めさせ、そればかりか！　あろうことか！　あいつの、み、み、耳たぶを甘噛みしたことだ！！」

「甘噛みが問題だったのか？」

「問題ではないというのか！！」

「うん」

「……っ！！」

淡々とした返答に、箒は己の十指をわきわきさせながら言葉にならない声を上げ、ついでに己の拳を振り上げる。

それは彼女の感情のままに振り下ろされ、眼前の一夏を地に伏させるかに思われた。

だがここで箒の辛うじて残っていた理性が働いた。

く、落ち着けわたし！　暴力では何も解決しない！　そう、ここで怒りに任せて力に訴えたところで、わたしの気が一時的に治まるというだけで、結局一夏は己のしたことを理解せずに終わる。そうなればまた同じことを繰り返して第二第三のセシリアを生むことになる。そ、そんな羨ま　もとい、けしからんことを許すわけにはいかない！　ここは冷静に理性的な対処を取ることが求められる。今のわたしに必要なのは『力』ではない。犯した過ちを時間をかけ

て理解させるための根気が、相手の理解を助けようという意志が、そして相手の理解のためにこちらも相手を理解しようとする姿勢と想像力が必要だ。それが出来ないから世界から悲劇が無くならない。人と人はすれ違い、憎み合い、対立する。そうして家を焼かれ、家族や友を失い、空腹と寒さに震える者が現れる。確かに、他人の心を真に理解することなどではしないのかもしれない。だからと言ってそれで終わってしまうのはあまりに寂しく、そして悲しすぎる。ならばどうする？ 人と人は解り合えない、だが、だからこそ言葉がある。力ではなく、己の意思を言葉で伝え合う必要がある。さあ篠ノ之箒！ 己の器を自ら狭めるような真似をするな！ 極東一の大器と呼ばれた人格を、慈悲と寛容の心を示せ！ そして振り上げた手を下ろし、握った拳を解く勇気を見せろ！

壮大かつ遠大な思索の後に結論を出した箒は、そのままゆっくりと己のベッド脇へ行き、片方の手で枕を掴んだ。

「ふん！」

そして握った拳を叩き込んだ。

ぼすん、と枕が悲しげな音を立て、拳がめり込む。

それは先程の自身の思考内容とは明らかに相反する、力技によるガス抜きだった。

「ふっ」

それで幾分すっきりしたのか、箒は額を拭うを動作の後に枕を持ったまま一夏の前まで進み出た。

そして握った拳をゆっくりと解き、一夏の頭に優しく手を置いた。

まるで大人が子供にするように、或いは飼い主が飼い犬にするように。

そのまま彼女は視線を下げて、一夏と目を合わせて、言う。

「良いか一夏？ あの時の空気を考えて指を舐めさせるという愚行は百万歩譲って流そう。悲しいが、世の中には己が望まないことも我を曲げてやらなければならない時がある。それが上手く世を渡る術というものなのだろう。だから、お前がセシリアの指を舐めるということを全く望んでいなくとも、むしろ『あんな変態泥棒猫の指なんか舐めたくない』と嫌がっていたとしても！ あの場の雰囲気ではあのような行動を取るしか無かったのだろう。ああ、空気を読むというのは日本人の良いところであるが、しかし同時に染み付いて離れない悲しい性さがとも言えるものだな。しかし誤解するな一夏。わたしは不器用な人間で、そのように上手く立ち回れる自信は無い。だからこそ、時には己を曲げて行動できるお前のことを、わたしは尊敬する。よしよし、偉いぞ一夏」

箒は相手を真っ向から否定してその人格を傷つけてしまわないように、出来るだけ優しく語りかける。

その優しさが斜め上のものであり、そのうえ別の人間を貶めたりすることに気付かずに。

そのような箒の様子は普段の彼女を知っている身からすれば異様であり、何故か頭を撫でられている一夏は『箒、疲れているのかな』と思いながらも、必要以上に刺激するのは危険であると判断して大人しくされるがままにしていた。

「だがな一夏？ その前の、あ、甘噛みはどう考えても必要無いだろう？ 要求されていたのはあくまで『指を舐める』ことだったんだ。一体お前はこういう腹積もりであんなことをしたんだ？ あ、あれではまるで」

「まるで？」

寝所で睦言を交わす恋人みたいじゃないか！！

とは声に出せずに歯噛みする箒、色事に関心を持ち始め、ドラマのそういったシーンにも興味津々のお年頃である。

しかし、興味はあれど、口にするのは気恥ずかしい。そんな乙女心の持ち主である。

「そ、それはどうでも良い！ と、とにかく説明しろ一夏！」

箒は己の恥かしさを誤魔化すために声を張り上げた。

「いや、甘噛みは指を舐めるのと同じく相手とコミュニケーションを取るための手段だと、以前読んだ本に書いてあったな。相手にこちらの無邪気さを示すというか、敵意が無いことを示すものなのかと認識していたんだが」

「い、一体何の本だ、それは？　いかがわしい本ではないだろうか？」

「ああ、『かわいいおともだちずかん・いぬ編』という」

それを聞いた瞬間、箒の思考にピンク色の流星が走った。

『かわいいおともだちずかん・いぬ編』だと！　何ていかがわしいタイトルだ。『おともだち』の語感が平仮名チックで、いかにも『低年齢対象ですよ』という感じではあるが、この場合はそれがかえってアブノーマルないやらしさを醸し出している気がする。おまけに『いぬ編』というあたりに奴が好みそうな退廃的な雰囲気^{セシリア}がそこはかとなく漂っていて、対象年齢がR・18どころでは済まない邪悪な気配がする！　全く、こいつは一体いつからそんな背徳的な性癖を持つようになったのだ！　ここは幼馴染であるわたしが、こいつに『人』の『道』を説いてやらねば

「って犬の本だろそれは!？」

えらくピンクがかった思考の末の長いノリツツコミだった。そして
箒は変だった。

「どう考えても犬の本で、犬がする行為だろそれは!？ 獣かお前は!？
というかそれを読んでいながら人間にアレをやったのか! セシリア
？ そもそも甘噛みはコミュニケーション手段ではなく、しついで
矯正するものであつて、ああもう! ツツコミどころが多すぎてど
うすれば良いのかわからなくなってきたぞ一夏!！」

「大変だな箒。お茶でも淹れようか？」

正座したままのんびりしている幼馴染に、箒は体の震えを押さえ
ながら言う。

「何故に他人事なんだお前は！？ だいたい、あれは犬猫がするのと人がするのでは全然意味が違うんだぞ！！」

「人間だとどんな意味なんだ？」

「そ、それは勿論きゅー！」

「きゅー？」

それはLOVEから始まる、QとIが並び立つ行動！

箒は加熱してきた脳内で、この言葉を口にした後のやり取りを演算する。

それはなにー？（いちか）

それはねー？（ほうき）

それはー？（いちか）

というような会話の後に、（想像の中の）箒がニコリと笑みを浮かべて言う。

『求愛行動』だよー

「言えるかぁー！?!?!」

「へぶあつ!?!」

絶叫と共に箒は手に掴まれた枕を眼前に叩き付けた。

至近距離から投擲された枕は一夏の顔面にぶち当たり、彼はその勢いで後方の壁に激突、鈍い音が響くと同時に、ずるりと床に崩れ落ちた。

掌が上向きになって倒れるその様は、明らかにヤバイ状態である。

だがそのような反応をするのも仕方の無いことだった。

箒は崩れ落ちる一夏へ背を向けて顔を覆う。

言えない。言える筈が無い。

初心なねんねである彼女に、笑顔で『QI的なアクションだよ
などということを言える筈が無かった。』

箒は自分の顔が赤く染まっていくのを感じ俯く。

見事な自爆であった。

加熱した彼女の脳味噌はぐるぐる回る。

こいつ、実は何もかも分かっているわざとやっているんじゃないのか？

普段は異性にさして興味を抱いていないような顔をしているが、やっていることは相当にアレな一夏である。

疑心、暗闇に鬼を見出す。

混乱した箒はそう思わずにはいらなかった。

だがこのままにいるわけにもいかない。

とりあえず彼の話を信用すると、パーティーのアレにそういう甘

酸っぱい意図は無かったということになる。

し、仕方あるまい。

そうして箒は結論を出す。

彼女は後ろを振り向くと、指を突きつけて告げた。

「もういい！ この話はこれで終わりだ！！」

彼女はこれ以上の追及を避けるため、話を強引に終了させることに決定したのだった。

だが一夏は、

「……」

壁に背を預けて身動き一つしなかった。

箒はそれを確認すると、溜息を吐いた。

「疲れた……もう着替えて寝よう」

まったく、一夏ときたら……。

何とか力技で一夏の追及を逃れた筈は、寝巻きに着替えるために胸元のリボンのを解く。

端を引っ張るとしゅるり、と布地が擦れる音が響き、解けたリボンが床に落ちる。

聞いて欲しくないことばかり追求してくる。

溜息を漏らしながらも、制服を脱ぐ。変なところにシワができないように制服を畳む。

そもそもそういう意図が無かったとしても、恋仲でもない異性の耳たぶを甘噛みするのはどう考えてもおかしいだろう。どうしてアイツはこう、変に知識が偏っているんだ？ それともこの年頃の男は誰でもそんなに子供染みているのか？

段々と苛立ちが再燃してきた箒は、少し乱暴にシャツをベッドの上に置く。そして寝巻き用の浴衣を羽織るように袖を通して、帯を手取る。

手にした帯は最近新しく購入したもので、今の寝巻きと色と模様が良く合うだろうと気に入った品だ。

他の衣服と違い目立たないものだが、これは箒なりのお洒落心の表れであった。

箒は慣れた手付きでその帯を胸の下あたりに巻いていく。

と、

「あれ？ 箒、帯が新しいやつだな」

そこで後ろから一夏の声がかかった。

「！ わ、わかるのか一夏？」

ずっと朴念仁の亜種であろうと思っていた幼馴染に自分の小さなお洒落ポイントを指摘された箒は、その僥倖に胸が高鳴り始める。

「ああ、色とか模様が全然違うしな。その浴衣に合ってるぞ」

「そ、そうか……よ、よく見ているな」

この時点で、箒の先程までの苛立ちは吹き飛んだ。

彼女は頬を紅潮させて微笑を浮かべる。

つい勢い余って帯がきつく締まったが、それも大して気にはならなかった。

「それは気付くだろう。文字通り寝食を共にしてるんだぞ？ 毎日お前を見ているんだからな」

「そ、そうか！ 毎日わたしを見ている、か。そうだな！ 毎日仲睦まじく寝食を共にしているんだからな！ そうかそうか、ふふ」

箒は一瞬で有頂天に至り、ニコニコ箒さんが顕現した。

確かにそうだ、わたし達は夫婦みたいに寝食を共にしているのだな！

一体今まで何を苛立っていたのだろうか。自分と一夏は幼馴染であり、現在では同室となっている。他の者が絶対に持ち得ない立ち位置に自分はある。

変に焦る必要は無い。自分はこの優位を活かして悠々とアプローチしていけばいい。

そう考えると一夏にも悪いことをしてしまったな。本当につま

らないことで不機嫌になっていた。

喜びの感情の後に一夏への申し訳なさが募ってきた筈は、後ろにいる一夏に声をかける。

「一夏」

「ん？」

振り向かずに出された己の名前に一夏が反応する。

「その……すまなかったな。さっきのもそうだが、最近色々、わたしは態度が悪かったと思う……」

「いやいいよ別に。俺はそんなに気にしていない」

「ほ、本当か……？」

「ああ、誰にでも苛々するときはあるだろうし、それによくわからんが今回は俺が原因だったんだろ？　むしろ俺が謝る必要があるんじゃないのか？」

「そ、そんなことは無いぞ一夏！　あ、あれはわたしが、その、些細なことで苛立ってしまったわたしの方に責があった！」

「そうなのか？」

「そうだ！　わたしが悪かったんだ！」

その叫びに、一夏が笑い声を漏らした。

「な、何を笑っている一夏！ わたしは可笑しなことを言った覚えは無いぞ！」

「いや、篝らしいと思ってな。そういう潔さというか、真直ぐなところは」

微笑交じりに告げられたそれに、篝の胸の鼓動が速まる。

「う！ そ、そうか……？」

「ああ、じゃあお互い様ということで手打ちにするか」

「そ、そうだな。で、では寝るとするか！」

「ああ」

そうして二人は自分のベッドに入った。

しかし、ベッドに入っても彼女の胸の高鳴りはなかなか治まらなかった。

ふと、違和感を感じた。

それが何かと聞かれれば即答できないが、どうにもすっきりしない。

何か、こう、他人の話を長々と聞いていたら、最後にオチが無かった、みたいな気持ち悪さが……。

それがたいがいな違和感であることは自覚できたが、気になるものは仕方が無い。

その小さな違和感の正体を掴むべく、第は一つ一つ、丁寧に記憶を手繰る。

そして、

箒はあることに気付く。

先程一夏が話しかけてきたタイミングはおかしくなかっただろうか、と。

浮かんだ疑問は、彼女の思考を一気に回す。

そして彼女は解答への階段を上り始める。

一夏が箒に声をかけてきたタイミング、それは

わたしが着替えた後……否、わたしは帯をまだ巻いていた、そう、帯をまだ……巻き終わっていない時に一夏の声が……。

カチリ、と何かがはまった気がした。

そして箒は真実に至る。

わたし、着替え覗かれてないか？

答えは得られた。

簾はゆらり、と立ち上がると、傍らに置いてある木刀を握りしめた。

そして彼女は、すっ、と息を吸うと、

「――夏あ――！！！！！！！！」

咆哮を上げた。

戦場一面に響き渡るような怒声だった。

だがそれに対する一夏の反応は意外なものだった。

その叫びを受けて、横になっていた一夏は布団を跳ね上げて一瞬で箒の前に転がり出ると瞬時にその手に苦無を握り、彼女を庇うような体勢を取って部屋を見渡した。

しかし、何も異常が無いことを確認した彼は息を吐いて箒を見る。

「特に変わった様子は無いが、木刀まで握ってどうしたんだよ箒？何か怖い夢でも見たのか？」

木刀を振り上げていた箒に、一夏は気遣うように声をかけた。

そして箒は、彼の思いがけない行動に己のすべきことを踏みとどまった。

いつものようなぼんやりとした表情で『どうした？』とでも聞いてくるのだらうと考えていた箒は、彼が自身の身を守るような行動を真っ先に取り、また身を案じるようなことを言ってきたことに戸

惑わずにはいらなかった。

こ、こんなに大げさな反応をされるとは思ってもいなかった。

そう思う今も彼女に向けられる視線は真剣なものであり、自分が自身の認識していた以上に大事に思われていることに気付いた。

そして先程自分が至った解答に疑問を抱く。

これほど自分を思ってくれる彼が、覗きなどという卑劣なことをするのだろうか、と。

思わず大声を上げてしまったが、少し早まったかもしれないな……。

確かに一夏にはシャワーを浴びた筈の裸を見たという前科がある。

だがそれは副担任であるタヌキ娘の情報伝達に問題があったことがそもそもの原因であり、彼の意味によるものではなかった。

今回のことも、何か誤解やすれ違いがある可能性もある。単なる自分の勘違いの可能性もあるのだ。

一夏の話を見かずに有罪無罪を決めるのは褒められることではないな。

燃え上がっていた激情が静まるのを感じながら、箒は息を吐いた。

少し落ち着こう。冷静に、一夏と話をしよう。

「いきなり大声を出して済まなかったな一夏。少し、気になることがあってな……」

「そうか、少し驚いたが何も危険が無いようで良かったよ」

「し、心配をかけたな」

「ああ、でも気にするなよ。俺達は幼馴染だろ？」

「ところでわたしの下着は何色だった？」

「薄いピンクだったな」

「有罪——！！！！！！！」

箒は木刀を振り下ろした。再燃した激情を乗せて。

「おっと！」

思わぬタイミングでの奇襲に驚きながらも、一夏は身をよじって攻撃を回避する。

「避けるな！！」

「やれやれ、いきなり木刀を振り下ろすなんて、何を考えているんだ箒？　まるで漫画やアニメで主人公に着替えを覗かれて激昂しているヒロインみたいな反応じゃないか」

「いや！　お前わざとだろう！？　理解していて言っているだろう！？」

「箒が言っていることは抽象的すぎて俺にはわからないな。それより丸腰の人間相手に木刀を持ち出すのはどうかと思うぞ箒」

「お前がわたしの着替えを覗いていたからだろう！！」

「着替え？　ああ、仕切りをせずにいきなり脱ぎ始めるのはやめた方が良くぞ箒。部屋に俺しかいなかったから良かったものの、これが服屋とかだったら大変だぞ？　このうっかりさんめ」

「やかましいわ！？　アウトだよ！？　可愛らしく言ったところでこの場が既にアウトだよ！？　わたしの羞恥心が大変だよ！　気付

いていたのならそのとき指摘するなり、見えないように後ろを向くなり、色々とやりようはあっただろう！！　それがどうして下着の色までしっかりと記憶している！！」

「いや、『幼馴染に着替えを見られたところで一向に構わん、ガハハ』とかそういうことなのかな、と」

「誰の真似だそれは！？　　というか構うわ！　　ばっちり恥かしいわ！　　というかも少し悪びれる一夏！」

「はっはっは、悪い悪い」

「何故に微笑を交えて爽やかに答える！？　　大体だ！　　幼馴染とはいえ、年頃の女子の着替えを覗いたんだから先に言うことがあるだろう！」

箒の言葉に、一夏は一瞬考える素振りを見せるが、直ぐに正面を見据え、

「ありがとうございます？」

「な、何に対する礼だそれは！？」

「それは勿論、箒の裸をみ「言わんで良い！　怒るぞ！！」　既

に怒っているじゃ「うるさい！　黙れ！　そして考えろ！！」

アイマム！」

ここで一夏は思索する。

状況を整理するところだ。

箒は己の裸を見られたことに対して怒っている。

それは事故であり、こちらが意図的に犯行に及んだわけではないのだが、しかし実際に目にして下着の色まで目に焼き付けたのは紛れも無い事実だ。

眼前で怒り狂う幼馴染は十代の女子。その中でも時代錯誤と言えるほどお堅い気質の持ち主であるのがこの少女だ。

ならばわざとではないにせよ、自分の行動によってこちらが思っている以上に傷ついてしまったのかもしれない。

ならば、

こちらも真剣に、誠意を持って対応することが肝要、か。

一夏は箒に向けて頭を下げた。

「ごめん箒。お前も女の子だしな。その、無神経だったよな俺」

「そ、そうだぞ一夏！ どうしても見たいというのなら対応の手順

を踏んでだな　　！」

と、箒が本音の混ざった危険な発言を言い切る前に、一夏は彼女の両肩を掴んだ。

「箒、理解できたよ。お前が言っていた『先に言うこと』ってやつを」

「な、何だ、いきなり真面目な顔をして……というか今の謝罪がそうだったのではないのか？」

唐突に真面目な顔になった幼馴染に戸惑いながらも言葉を待つ箒に、それが告げられる。

それは

「箒って、安産型だよな」

割と直球でセクハラだった。

「誰がわたしの尻の評価をしろうと言った――――!!!!」

怒声と共に打撃音が響いた。

こうして夜は更けていく。

そして騒ぎを聞いた他の生徒達は、扉の隙間から目撃することになる。

浴衣を乱して、一夏に馬乗りになる筈の姿を。

そして部屋に響き渡る打撃音を耳にする。

翌日、アマゾネスが和のテイスト溢れる衣装でイタしていたという情報が学園に広まった。

幕間 4 「おやすみ前のできごと」 (後書き)

箒さんはツッコミ係。

次回からは鳳さんが狂気の宴に加わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675t/>

IS Ichika the Strange

2011年10月2日15時50分発行